昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年一月廿五日印刷納本　每月一回一日發行
昭和九年二月一日發行

精神分析

第二卷第二號

昭和九年二月

女性心理研究號

――（裏面に續く）――

東京精神分析學研究所出版部

本研究所關係者名簿（いろは順）

●印 客員　　＊印 特別誌友　　△印 雜誌委員

△岩倉具榮
岩倉良子
△伊東豐夫
＊池田多助
＊磯野信司
今福由江
△長谷川誠也
長谷川浩三
●早坂長一郎
＊本多了惠
●堀要
＊堀濱吉雄
朴永鎭
時平佐喜雄
千葉廣洋
＊林獨步
＊林中松
＊和田節雄

川上水夫
●金子準二
●高島平三郎
高橋鐵
＊田中雅子
●田内長太郎
田内貞喜
＊高橋退藏
高崎能樹
＊高村光太郎
高水力太郎
武田忠哉
＊多田玉枝
●塚原政次
＊浪越春夫
中山太郎
＊南雲義男
△長崎文治

永田道彥
●内田勇三郎
●上野陽一
海野十三
△則近保良
小野田幸雄
小柳津邦太
奥村博史
＊奥本島田
＊太田繁子
△大槻憲二
＊大橋正二
＊大岡正己
＊大山浩
＊尾形孝治郎
●岡田保雄
●久保良英
矢部八重吉

●山村道雄
山田一郎
●丸井清泰
△松居桃多郎
●慶大神經科教室
＊福澤一郎
藤木義輔
近藤石象
小山良修
＊小林忠藏
小林五郎
小松德
●古澤平作
江戸川亂步
●雨宮保衛
＊佐藤政宏
佐藤基
＊佐々木龍治

●木村廉三吉
＊三井慶次郎
●宮田修
＊三輪輔
＊水野章
＊島崎勝次郎
下山善高
霜田靜志
＊澁田見勝亮
廣井重一
＊平岡貞一
●諸岡存
＊森永醇
＊森下雨村
＊鈴木雄平
＊菅村氏
＊須田勇
●杉田直樹

青年期に於ける女性と自殺意識

宮田修

（一）

生きんとする慾望が、萬人共通の本能であることは云ふまでもない。だが其慾望は個性、環境、年齢等の差によつて、必しも平等ではない。殊に年齢の差は、その生存意識に格別の相異を來し、從つてその生存慾の强度にかなりの開きを見せる。卽ち幼兒期に在るものと少年期に在るものと、少年期に在るものと靑年期に在るものと、乃至靑年期にあるものと壯年期、老年期に在るものとを比較すると、それは直に認め得る現象である。但し年齢の低いものは、まだ人生に對する經驗も乏しく知識も薄いから、自ら本能のみによる生存慾によつて生きんとするのであるが、漸次年齢の增加に伴うて生命に對する意識が豐富になり、この意識が本來の生存慾に更に賦彩を施すからである。是を要するに人は其年齢を增加するに從つて、その生存慾の强度は漸く追加し、且つ複雜化してゆくのが普通であるらしい。今、此處に取扱つて見ようとする女性は、十六七歳から二十歳程度のもの、卽ち靑年期の最も代表的期間に在るものである。

一般に人の靑年期は男女を問はずその生理狀態が變化すると共に、心理作用も亦複雜化する時期であるだけ、その現象も自ら特異の性質を呈して來るのを看過することが出來ない。今まで盛に活動して居た或る種の心的作用が何時か影をかくして、未だ登場しなかつた新しい心的活動が遽に現れることもあり、兩者が錯綜して不統一の姿のまゝ活

躍することもある。

殊に生命に對する慾望は、先天的の本能を因とする上に、徐々に複雜な後天的の意識を交へてゆくのだから、其處には他の時期と比較して一層注目に値する變化を見遁し得ない。

この變化は原則から見れば、生命に對する尊重の念を增し、自殺の如き消極的の行爲を否定せしむる筈であるが、また一方にはこの變化の過程中に於て心性の確實性を失う爲に、却て自己を否定して生命の緒を斷つ機會を作らうとするものがある。現に近時の統計は青年期の自殺者數が、他の年齡期に比して優つても劣らない狀勢を示しつゝあるのに見ても、この時期のものゝ心理現象が、如何に錯雜であり特異であるかを推知することが出來よう。稱して危險期と云ふのは、最も當つた銘名だと思ふ。

(二)

W子は高等女學校の第四學年に通つて居た、十七才の少女であつた。その父が「……此學校でも受持の先生方に特に注視して頂いたやうでして、殊に〇〇〇〇先生からは溫き情を以て導いて下すつて居た事を、W子の死後、いろいろの方面から始めて私達が承知することを得まして、涙のこぼるゝ思ひで悅んで居ります。それ等の御蔭でズット首席優等を續けて來ました。」と書いて居るが、彼女はひとり女學校に於て優良の成績を占めて居たばかりでなく、小學校時代から常に首席を占めて斷然群を拔いて居つた。

家庭も亦有福かどうか知らないが、父は某會社の社長で堅實な家庭を營み、老人を始め弟妹若干の家族は穩かな日々を過して居る。家庭内の躾もまた緩急よろしきを得て、W子の將來のためにその父は特に共教育に心を配つて、極めて親切であつたらしい。たゞ幼きW子にとつて、常に辛い思をさせたものは、「生れ落つると肉親の母から別れたW子は、育ての母にさへ九歲の年に別れました。彼女自身は並ならぬ愛をW子の上に持つてゐたように思つてゐますが、それはどの親も持つ共通の母性愛だと思ひますが、W子としては母の愛は此人の外には知らないのでありますか

ら、後年生みの母親や姉妹に逢ひ、爾來文通を斷やしませなんだが、矢張此人を愛慕して居ましたが、聰明なるW子は、此人と私とが離別せねばならぬ事情の實際をつかんでゐましたので、其處に十分の理解を持つて居ましたが、それは寧ろW子の爲めの去り難き苦痛でありましたでせう。」（父の手記中より）の境遇であつた。

けれど彼女はその缺陷を「W子は秀才たるを失はなかつたと思ひます。實にしつかりした子でした。親、兄弟或は朋友にやさしいと云ふ樣な人情味のある子ではありませんが、必ず家名を揚げる者と確信してゐましたので、私は渾身の望を囑して居りました。」と手記して居るその父の愛によつて補はれ、更に學校に在つては前記の受持教師〇〇〇〇先生に認められ、また「急に學校が戀しくなつた。お友達が……私の樣に誰からも嫌はれてもやはり學校は私の糧である樣に思へる。」と彼女自身がその最近の日記に認めて居た程、心を打明ける友達の若干もあつた。

斯うして調べて見ると、彼女は決して自殺を圖るべき境遇でもなく、條件もないやうに觀られる。

（三）

然るに彼女は高等女學校の第四學年在學中、十七歳の初夏自宅に於てその日の深更に、「猫いらず」を嚥んで從容死に就いた。

その死は單にその家人を驚かしたばかりでなく、その教師を驚かせ、その友人を愕かせ、何が彼女を死に就かしめたかの疑問は、この報に接した各自の胸に解けない重い謎を與へたのである。

スタンリ・ホール Stanley Hall を始め自殺の原因に就て論じた幾多の心理學者は、靑少年期の自殺の原因の一として、復讐を擧げて居るが、彼女の場合に當るものかと推察したものもあつた。けれどその家人の語るところによるとその前後は復讐を敢て企てる程の衝動は與へられて居ないらしい。現に彼女は死に就たその日まで日記を書いて居るが、是等によつても或は泳ぎに行つたとか、時計の紐を替へたとか、父の命によつて書物を整理したとか、學友から來た物理の質問の手紙を氣にしながら眠に就たとか、如何にも少女らしい素直な無邪氣な記事だけしか見られない。

而も前後に一句たゞ「永々有難う存じました」と謝意を述べて居る。

就中彼女が服藥して、命の將に隕んとする刹那まで書いたらしい遺書によると、益々彼女の死は一時の衝動に驅られた激情の結果とは思はれない程、沈着で冷靜であつたらしい。その沈着な冷靜な態度は、曾て潜航艇操縱中海底の藻屑になつた佐久間大尉が、艇內の稀薄な空氣の中で認めた遺書に見るような、憎い程落ついて我と我が死を客觀視した態度であつた。生に執着を持つ者には、所詮考へられぬ程主觀を沒して刻々に變つてゆく生命の斷末魔を、藥を嚥んだ、やがて咽喉が渴いて來た、胃部が燒けるやうな感じがして來た、堪らなくなつたから床を出て水を飲みに往つた、眞夜中の周圍は靜寂そのものだ、水を飲んでも〳〵燒きたゞれてゆく苦痛を脫れることは出來ない、いやにくさいおくびが出て來た、手足がしびれるような感じがして來た、云々と云つた風に大膽に而も精細に描寫して居る。

然らば彼女を死に誘つたものは何か。戀愛か、幻想解除か、哲學思想か、罪惡の悔ひか、身體の疾患か。彼女の場合は何れも當つて居ない。その父は「生れながらにして親を知らなかつたW子は、その薄倖な運命の上に、私見たような者を父として育てられねばならなかつたのは、思へば悲し過ぎる運命でありました。」と記して居るが、この境遇から來た感情も確に其原因の一つに數へられようが、是のみを以て彼女の自殺の凡てを說明することは出來まい。

（四）

その父は彼女の日常の行動から歸納して、其性質を次の如く批判した。「子を視る事親にしかずと申しますが、W子はどんな性質の子であつたのか、どう考へて見ても私達にはハッキリつかめません。然し大膽であつた點と、執着心の無かつた點と、責任感の强かつた點とは疑ひもなく認め得られます。」

家庭で見たこの特質は、學校の彼女を知る者も亦同樣の判斷であつた。W子は確に大膽であつた。責任感は强かつたが、執着心は薄かつた。尤も主我心はかなり强かつたから、場合によつて隨分强情であつたらしいが、惜みなくその生命を見限つた程諦めはよかつた。諦めなくてもよい程度のものさへ、決着早く諦めてひとり淋しく自己を眺めて

居た。是がやがて家族又は友人からうとまれたのでないのに拘らず、自分で自分を孤獨の裡に投込んだ。自分では、「…私の樣に誰からも嫌はれても云々」とか「一言ぐらひ私にも聲をかけてもよささうなものだと思つた。もう今迄の氣持は風船球がふくれたあまり、高い空にうかれて突然パチン！　の憂目にあつた樣に思つた。さも殊勝氣に云つた言葉の下に出しぬかれて…もう何も云ふまい。思はず脣をかみしめた。」とかその日記の中に書いて居るが、周圍の者は誰もが彼女を嫌つては居ないし、寧ろ尊敬の的になつて居た位であつた。從つて彼女自身が胸の障壁を除けば、喜んでその窓の中に飛込まうとするものは決して少くなかつたらしい。

然し彼女の持つて生れた氣質は、自己の周圍を狹ばめ、自己を孤獨に置き、何とはなしに淋しみを味ふことに悅樂を感じようとしたらしい。要するに社交性の乏しい品質であつたらしい。

加ふるに青年期に入つてからは、その經驗と知識とがグングンその特質を作つて行つたところへ、少女期の純潔を耽美する意識が働きかけた。丁度咲た花を憧れ、唄う禽に聞きほれるやうに、今まさに萎まんとする自己の少女期を惜しみ、悲しみ嘆くのであつた。一方からは此感情が日をふるに從つて、益々濃厚を加へてゆくに拘らず、他方では生命の存在が現世限りであると云ふ生存意識がまだ明瞭に發達して居ないから、終に惜みなくその生命を棄て去つたものと見てよからう。

（五）

以上、W子の自殺は、ひとり彼女自身の特殊のものではなく、青年期に於ける女性の自殺には、斯うした動機から發したものが少くない。

幸ひ轉向して、今は無事であるが、嘗て自殺を企てた十七歲のN子（女學校五年生）は、その先輩に次の樣に書き送つた。

「都のちりをのがれて青葉の山であら草を踏みわけて、蕨とりをしたり、若草の野邊で柔い土を踏みしめて、芹を摘

んだりして遊んで居る内は、死にたいと云ふ感情など消え失せて居りましたが、東京に歸つてからは二ツの心のいさかひがます〳〵烈しく、生きながらに魂を失つた樣になり、其の日〳〵をなまけながら過して參りました。然し落第點だけはどんな事があつてもとつてはならないと思ひ、圖書館に行つて無理におしこみ勉强をやり、……今となつては生きる爲に一生取るまいと自分に誓つた假面を脫ぎとつて理解して頂かなければならなくなりました。

先學期の試驗最中木枯が吹き荒び、犬の遠吠の物悲しい小夜中に自殺を企てました。……自分をも信じられなくなり、生きる目標を失つたからでございます。……くわへた管から異臭のガスが不氣味な音を立てて口の中へ流れ込み體がだるくなり、頭がふらふらするのを覺えはじめたとき、……「自分の勝手にしてはならない命なのだ」と直感いたしました。その刹那夢中でガスをとめ、辛じて臥床まで這ひ戾りました。

その後淋しい獨我論からのがれたさに、人生哲學や心理學に興味を持ち、兄の本を片つぱしから讀みふけりました。そして釋迦親鸞などの人生論をどうにかして理解したいものと鈍い頭を虐げて考をしぼり出し、殊に每日曜統一會館に日蓮上人の開目抄の講義を聽きに行つたり致しました。「自己ありて經驗あるにあらず、經驗ありて自己を生ず」など知ることによつて、自分の生き方の非を悟り、心の安らかさを得たまではよかつたのですが、しかしその弊害として鉛筆を持つてものを書いて居る時にも、箒をとつて庭を掃いて居る時にも、くだらない思索から離れなくなつてしまひました。

（六）

四月のなかばに至つては、眠れない宵が續き、殊に或時には布團が石の樣に固くなつて、體にのしかゝつて居るのかの樣に感じ、又ある時には空氣が層をなして、底知れない力を持つて胸をおしつけるやうに覺え、苦くて苦くて床の中で轉りまわつたものでした。」

「そして二度目の自殺を企てようとする心を……今この苦しみからのがれる唯一つの道であるとしても、長い間限り

ない恩を受けた人々に、此上もない迷惑をかけるからには、非常な罪惡ではないか。お前は餘りに利己主義だ」と他人の心が叱りとばして生きて居りましたが、終にたまりかねて屋上で「私死にたいのだけど」と口に出したばかりに先生にまでお忙しい折御心配をかけまして、誠に申譯のない事をいたしました。

しかし日頃出來るだけ自分の痛みを外に表すまいとつとめて をりました爲め、幸に母には何時もの調子で饒舌つたのだと信じきつてをります」

N子は兩親も揃ひ兄妹も睦しく、家産もあり健康もよく、知能も優れ、交際もあり、是亦自殺をしなければならぬ條件は一つも備つて居ない。たゞ空想の力は强いので、W子同樣 少女期と離れる過去の憧れに堪へないものが、寂寞の極地である死の詩的情景と纒綿して、自殺への動機を作りつゝあつたものと思はれる。

總じて十七八歳位の女性の意識中には、W子やN子に見るやうな、フウワリとした人生觀の上に立つて、深く考へるでもなく、將に別れんとする少女期の夢の樣な樂しい快い世界に對する愛惜の情と、想像の間に表現されて來る詩的の死の幻想、延ては死後に續く華かな天國又は極樂の樂土感とが錯綜して、一寸した衝動、例へば時代の寵兒であつた文學者詩人等の自殺、若くは讀書の間に見る華かな自殺行爲の物語等に刺戟されて、大人には想像も出來ない程重大なる生命の取捨を甚だ輕々しく取扱ふものがあるものである。

「生きる事がいやになつた時、其處には死と氣狂ひと白痴とになる三つの道が殘されて居る。死にたくなつたら直ぐ死ぬ勇氣があつたらいい。死は恐れてはいけない。苦しみながら死ぬのはどうかしら。カルモチン一箱のめばいゝのだらうか。カルモチンは一寸もきかないんだもの。此前見たいに少しもねむれなかつたら弱るな。」とは矢張り十七歳になる優秀のI子がその日記中に誌した文字であるが、此女性は自殺を試みるべく餘りに常識が發達して居る方である。にも拘らず自殺そのものをこんな風に時々考へて居るらしい。

是を要するに此年輩に在る女性は、十中七八まで丁度彼女が道端で摘んだ花を弄ぶように、自己の生命を遊戯化しようとする傾向があるらしい。殊に頭のよいものに多い樣だ。(昭和九年一月十一日、未定稿)

コリオレーナス母子の心理

長谷川誠也

これを讀んだ人には迷惑でもあらうが、未だ通讀してゐない人のためだと思つて辛抱してもらひたい。これはサー・トマス・ノースの譯、プルタークの『英雄傳』を基としたもので、脚色の具合から、多少、原書とは異なつてゐる點もあるが、大體プルタークそのまゝの筋である。

（附記、コリオレーナス傳說には、プルタークと異なつた筋のものが數種あるさうで、そのいづれが史實であるかは今日、判斷しがたいといふ話だ。傳說研究といふ立脚地からすれば、これらの異なつた筋を比較し、かつ心理學的考察を下すべきである。例へば、一傳說によればヴォラムニヤといふ名前は、コリオレーナスの母のものではなく、妻のものである。傳說が、かやうに一つの名を母のものともし、妻のものともするところに、非常におもしろい心理學的解釋が下されるのだ。しかし、今はその方面の研究に入るべき場合でないから、何事をも言

シェイクスピアの最後の悲劇と言はれる『コリオレーナス』は、專門家の研究によれば、一六〇八年から同一〇年の間の作であらうといふことだ。これは、ローマ史を材料としたものであるが、『シーザー』のやうに、主義または思想のために活躍する人物を中心としたものではなく、强烈な心理過程を核心としてゐる。それだけに性格研究あるひは心理研究の學徒にとつては、甚だおもしろい作品である。これが價値についは、諸研究家の說が一致してゐない。或人はこれを激賞し、或人はさほどの名作でもないと言ひ、ショーのごときは、「シェイクスピア喜劇の最大なものである」といふやうな、例の矯激の評をぶつぱなしてゐる。しかし、それら諸說の檢討は、これを他日に讓り、ここには、コリオレーナス母子の心理を主題としよう。

この作の解說中に物語の筋を書き加へることは、既に

はない。）

プルターク傳の時代は、紀元前四九四年から同四九〇年に亘ると言ひ、あるひは、劇の筋は同四八八年から同四八四年に亘り、舞臺面は、通計十一日であるといふことだ。さて、ローマの王政が倒れ（同五一〇年頃）共和政體が起こつた後には、貴族と平民との軋轢が激烈となつた。殊に凶年のために平民の困窮が一そう甚しくなり、貴族の經濟上の權利が强くなつたので、平民は遂に蜂起して貴族と雌雄を決しようとするに至つた。この時元老メニニヤス・アグリッパの調停によつて、內訌も大事に至らず、かつ平民は、その階級から選出する二人の代理者――保民官（トリビューン）と稱するものを元老院に列席せしめる權利を獲得した。

內訌後幾許もなくローマと隣國ヴォルサイとは戰を開いた。この時、ローマの將として出征した者はケイヤス・マーシャスといふ剛勇無雙の武人であつた。彼は幼少の頃に父に別れ、母ヴォラムニヤの手一つで養育された一人子であつた。この母たる人が普通の女性ではなく、武功を無上の名譽とする烈婦であつた。かの女が、嫁のヴァージリヤに向つて、

「あれがまだ極いたいけで、わたしのたつた一人子であつた時分にも、うるはしい若衆と生長して、だれの目をも自分の方へ振向けさせてゐた時分にも、たとひ諸國の王たちがたつた一日貸してくれと賴んでも、一時間とは傍を離したくないといふのが母の情であつた時分にも、あゝいふ人格に似合ふのは名譽だ、どんな立派な人格でも、功名で光り輝かない以上、壁に掛かつてゐる畫像も同樣だ。と斯う思つて、喜んで危險を冐させたのです。苟くも名譽を得られさうな場合には、殘酷な戰爭へも出してやりました。すると、槲の小枝の冠を戴いて歸つて來ました。むすめ、ほんたうにわたしは、あれが生れた時、男の子だと聞いて喜んだよりも、あれが男だといふ實證を見せてくれた時にこそ飛び上つて喜びましたよ。」（坪內博士譯、ふりがなを省いたのは私責任。以下同。）

と言つてゐる言葉は、かの女の氣質と敎育法とを明白に表示するものである。

この母にしてこの子ありで、マーシャスは母の理想通りに、體力絕倫、膂力拔群の武人となり、早くも少年時代に從軍し、その後、數度の戰に武名を轟かした。それほどの武人であつたから、ヴォルサイ軍に向つた時は、恰も羊の群に駈けこんだ獅子のやうに荒れ廻り、殆んど獨力で、コライオライの城市を陷しいれた。（コライオライはどの邊にあつたのか、今日、確證をもつて推定す

ることはできないが、ローマの南東方約二十マイルのアルバノ山中、アリチッア町に近い處にあつたらうと言ふことだ。さうとすれば、ローマから二十四五マイル位の地である。）彼はこの武功によつて、ローマ全軍から、コリオレーナスといふ名譽の異名をもらつた。

彼はすばらしい強い武人であつたが、傲岸不遜の貴族主義の人間で、平民共を嫌惡することは非常なものであつた。坪内博士の語を借用すれば、「彼れはわが戰國武士のそれの如き勇敢、義烈、剛毅、正廉、直情、徑行等の幾多の美所を具へて、國家の爲には其命を輕んずること鴻毛の如くなりしも、人を人として之を平等に好遇するが如きことに至りては其夢にだに思念せざる所なりき。若しニイチエに從ひて、基督教樹立後の倫理を奴隷道德となさば、コリオレーナスのそれの如きは、異教全盛期の超人道德を代表する者といふを得べし。」かやうな性質であつたから、彼は常に平民どもを野良犬のごとくに見てゐた。彼等は九頭蛟（ハイドラ）のやうな化物で、每分時に氣の變る奴だ、こんな奴等を甘やかして、多少でも政權を與へるのは、立派な麥の中へ雜草をはびこらせると同樣だ、と言ふのが彼だ。だから彼等は、彼の武勳を認めてゐたにもかかはらず、「吾々民衆の第一の仇敵」はケイヤス・マーシャスだと思ひ、機會あらば、彼を彈劾しようと狙つてゐた。

彼は武功によつて、執政官（コンソル）の候補に推されたが就任の間際になつて、平民階級の彈劾を受け、遂に市外へ追放された。と言ふのは、當時、ローマ市民は凶作と戰爭とのために食料品の窮乏を感じてゐたから、穀物配給といふことが重大問題であつた。ところが、コリオレーナスは、平民に不利な條件をもつて、この問題を解決する意見を懷いてゐたから、平民は日頃の憎惡の念の火の手を一そう強くして、彼をローマ市外へ放逐したのである。彼は猛者であつたが、思慮分別を缺いてゐたために、せつかくの武功を臺無しにしてしまつたのだ。

平民の橫暴と貴族の無能とを怒り、復讐の念に燃えてローマを去つたコリオレーナスは、多年の敵であるヴォルサイの猛將オーフィディヤスに身を寄せた。この猛將とコリオレーナスは、今までに數度、一騎打の戰ひをやつたが、何時もコリオレーナスの方が優勢であつた。オーフィディヤスはローマに向つて復讐戰をやらうと計畫してゐる所へ、コリオレーナスが捨身になつて來たので日頃の怨みを忘れて彼を歡迎した。兩將は直ちに結託して兵を進め、行くゆくローマ領を蹂躪し、遂にローマ市外に迫つた。この時、コリオレーナスはローマ市民を屠り、全市を焦土とする意氣ごみであつた。市民は顛倒せ

んばかりに驚き、かつ防戰の效なきを知つて和議を申しこんだ。コリオレーナスはこれを拒絶した。市民はコリオレーナスの親友でもあり、先輩でもあるメニニヤスを派遣して再び和を乞ふたが、なんの效果もなかつた。ところが、三度目には、コリオレーナスの母と妻と子と一貴族の夫人とが、みな喪服を着て、彼を說きおとしに來た。この時のヴォラムニヤの諫言こそ、明らかに母子の神祕的參同の無意識的心理を自然に表白したものである

「これ、倅、わしは決して此役の終るまで運命を俟つてはゐません。若しわしの力で、そなたにどちらにも偏らず、義理を立てさせることが出來んとなりや、そなたはすぐさま本國を攻めようとするであらうが、そりや、取りも直さず、そなたを産んだ此母の胎を踏みにじるも同然ですぞ、よもやそなたはそんなことはすまいけれど。」

「此世の中に男で彼れほど母の恩を荷うてゐる者はないのに、わしを足枷はめられた罪人のやうに歎願させをる。……(コリオレーナスに)そなたはつひぞまだ此母に孝行をしてくれたことはないぞよ。此みじめな母には、外に可愛い雛鳥とてもないのだけれど、そなたをわれから勸めて役に出し、恙なく手柄をして歸るのを歡んだことが何度あつたと思ふ! わしの此賴みが無理か? 非道か? 非道なら、わしを追ひ返しなさい。……」

かやうな詞は、コリオレーナスの無意識にある母コムプレクスそのものから發して、彼自身をさいなむものに外ならぬと見て宜しい。生まれ故鄕と母とは同じ物であるといふ心理がおきれば、いかに「大膽なことは惡魔以上」の猛者でも、腕力を振ひうるものではない。コリオレーナスは遂に和議を容れ、ローマは戰禍を免れた。彼自身は、

「おゝ、おつかさん、おつかさん! おゝ! あなたは羅馬に取つては幸福な勝利を得なすつた。けれども其倅に取つては、おゝ、此あなたの勝利は、たとひそれが致命傷でないまでも、限りなく危險なものだといふことを御承知なさい。」

と言つてゐるやうに、なんとなく危險を感じたが、事實は豫感以上となつて現れた。漸く彼を嫉視するに至つたオーフィディヤスは、和議成立の機會を捕へ、コリオレーナスはヴォルサイ國の叛逆者であると言ひ觸らし、かつ暴言をもつて彼を激怒せしめ、群衆を煽動して、不意に襲擊せしめた。さすがの勇士も防禦に遑なく、遂に斃れた。コライオライの貴族をはじめ、オーフィディヤスまでも「古今の最も尊貴な死屍の前例に則つて、鄭重な

葬儀」を營まうといふ所で最後の幕がおりるのである。（他の傳說によれば、彼の最期は自殺であると。この方が群衆の双に斃れるよりも、一そう悲劇的であるやうに思ふ。彼は母の諫言を容れて講和を承諾したとは言ふものゝ、もはや、母の懷に抱かれるやうな具合に、ローマに居住することはできない人となつてゐるのだ。つまり母子一體といふ神祕的關係は破れてしまつたのだ。だから、彼の前途には死滅あるばかりで、その死が、彼自身の手によつて選まれる方が、他の手によるのよりも、劇的に、また心理學的に見て悲壯であるやうに思ふ。ただし、これをもつて、作者がプルタークに據つたことを咎める意味ではない。）

コリオレーナスの特異な性格については、多くの批評家が、種々の方面から解說してゐるが、その中で、ミドルトン・マリー Middleton Murry の說はおもしろい。

「コリオレーナスは、プレトオの言ふ衝動の人が活きて來たものである。」「彼は自身を知らない。彼の意識も、記憶も、所存も、みな母ヴォラムニヤか、メニニヤスかが保管してゐる。彼の心が銳敏で、眼識が明晰であるのは、戰場にある時だけである。」「彼等自身の性が野蠻人であることを知らない」（マリー著ディスカヴァリーズ』中、コリオレーナス論。以下同）

彼は、コライオライ戰の後、論功賞の場合、多くの褒美を斷つた後に、改めて請求する所があつた。

「嘗て此コライオライで、ある貧家に泊つたことがありましたが、其家の主人はわたしを深切にしてくれました。其男はけふ擒になつた。（中略）どうか、あの可哀さうな男に自由を與へて下さい。」

と懇願しながら、其男の名を聞かれると、

「しまつた！　忘れた！　疲れたので、記憶力が疲れツちまつたのです。葡萄酒はありませんか、ここに？」

マリーは言ふ、この言葉ほど能く體力の人を示すものはあるまいと。「忘れッちまつた」と言ふ詞は、第一幕第一場、彼が平民選出の役員の名前を語る時に用ひられてゐる。彼はその或者の名を忘れてしまつたのだ。體力は絕倫であるが、心理の働きの微弱である豪傑の面目は「忘れた」「忘れッちまつた」の言葉に躍如としてゐる。

マリーは、さらに解剖を進め、この作中、特に注意すべきことはコリオレーナス母子の關係である。作者は、ここに性格描寫の妙技を見せてゐる。第一幕第一場の初めに、一市民の詞がある。「いゝえ、奴が名譽の功勞をしたつてのは、つまり、威張りたいが爲にしたんだ。氣の好い連中は國家の爲にしたんだなんて賞めてゐるんだが、其實、奴は、半分は阿母を嬉しがらせるため、半分

は威張りたいが爲にしたんだ（下略）」といふのがある。

「われ〳〵は、今日、これをエディポス・コムプレスと呼ぶ。しかし、驚くべきことは、シェイクスピアがコリオレーナスとヴォラムニヤとが一體であることを傳へる遺方である。ヴォラムニヤは心と所存とであり、コリオレーナスは肉體と力とである。（中略）眞の存在と結合一致とは母子の間に在る。シェイクスピアは、同樣な場合に、同じ詞を二人に用ひさせてゐる。コリオレーナスが追放された時、ヴォラムニヤは、怒り猛り、街頭で保民官等をつかまへてわめき立てる。

あゝ、今、倅がアラビヤの沙漠にゐて、よく切れる劍を持つてゐて、さうして汝らが其鼻の前にゐればいゝのに！

コリオレーナスは、アンチャムで窮地におちいつた時にまた叫ぶ、

おゝ、あいつ、あいつの六人分を、あいつの一族こと〴〵くを、此劍で誅戮する事が出來たらなア！

この繰返しが殊更に目論んだ技巧であつたか、どうかは分からないが、それは構ふことはない。なぜなれば若しこれが目論まれたものでないとすれば、ここにシェイクスピアの驚くべき直觀が、氣質の血つゞきを感得したことの證據が、もう一つあるといふだけであるからだ。」

マリーの說を聞くまでもなく、この母子が本來一體であることは、諸處における詞に現れてゐる。母が「わしはお前同樣、死ぬのを何とも思ひません。（中略）その勇敢な根性はわしの遺傳だ、わしから吸ひ取つたのだ」と言つてゐるところは、特に明らかに母子一體を示してゐる。

一體のものが、智慧と體力との二つに割れて、ヴォラムニヤとコリオレーナスとに成つたと見ればよからう。彼が執政官に推薦されるために、市民の歡心を買ふのを嫌つた時に、母は諫めて、かう言つてゐる。

「これ、そりやあんまり頑固過ぎますぞ。もつとも、斯ういふ切迫した場合でなければ、立派な態度だといへるのだけれど、これ、お前さんがよく言つたことだ、戰の時には、名譽と策略とが莫逆の友のやうに一しよに生長すると。それが眞理なら、平和の時にだつて、其二つが一しよになつてゐない爲に、互ひに損をすることがありやせんかい？」

この武人としての名譽を重んずる心だけが、コリオレーナスに傳はり、策略といふ方は、母の方に居殘つてしまつたのだ。母は「一旦の怒りの爲に事を誤らんだけの分別を持つて」ゐる女性である。

ヴォラムニヤは普通に言ふ女性であるかと言ふに、決

してさうではない。かの女は心理學的に見て、一種の變成男子である。コリオレーナスが放逐された後、ローマ街頭で保民官等をつかまへ、呪ひの詞を放つてゐる母に向ひ、保民官の一人が「あなたは男か?」と言つたのは能くこの女性の本質を告げるものだ。これに對するヴォラムニヤの詞、

「阿呆、それが恥にでもなるか?これ、よく聞け、阿呆、わしの父も男であつたぞ! 汝は狐か、女狐かよ?……」あるひは、嫁のヴァージリヤに向つて、

「えい、めそ〳〵と泣くのはおよし。泣くなら、わしのやうに怒つてお泣き、天妃神(ジュノー)さんのやうに、さ、さ、さ、」

と言つてゐる所は、かの女の面目をよく表はしてゐる。

ユングの說くところによれば、男子の性格の奥には、女性的アニマがあり、女子のそれには、男性的アニマスがあるのだ。どういふことから、東西ともに、女子に服從、溫順、謙遜、柔和、貞淑などの德を持たせるやうになつたのか、これは特別の研究を要することであるが、とにかく女といふものは、おとなしく、控目にして、餘り智慧などを働かせないやうにしろ、と言ふのが世界の傳統的敎育法である。これがために、女子にもある突進壓制、爭鬪、智謀、推理、剛毅、粗暴等、すべて男性的と見なされる心理過程は、幼少の頃から抑壓される。從つて、その無意識の內には、かやうな心理傾向を有する男性的性格が築かれる。この性格あるひは靈魂をアニマスといふのだ。この反對に、男子は幼少の頃から女々しい心理を抑壓するから、その無意識の內には女性的靈魂アニマが發生する。このアニマス、アニマは、男女の生活狀態が平坦無事である時には、强く動きもせず明らかに現れもしないが、行路艱難、前途闇黑といふやうな場合には露骨に顯出する。一家破滅といふ時に男子よりも女子の方が活路を見出す例は、多くの人が知つてゐる。

ヴォラムニヤは、まさにこのアニマスの權化である。本來ローマ人の剛毅な性質を受けついだかの女は、夫に早く別かれたために、一そう男性的になつたのだらう。

「眞實の事をいひますが、わたしは、よしんば男の子が十二人もあらうと、それがどれも〳〵同じやうに可愛く、お前(嫁のこと)同樣またあのマーシャス同樣に可愛からうとも、其うち十一人は寧ろ國の爲に立派に討死を遂げさせたいと思ひます、酒色に耽つて、ぬらくらと一生を過させるよりも。」

「ヘクタアに乳を飲ませてゐた頃のヘキュバ媛の胸部だつて、希臘兵と劍をまじへて血を流した時のヘクタアの前額ほどにはうつくしく見えなかつたのです。」

これらがこのお母さんの見方である。コリオレーナスがコライオライ戰から、名譽の負傷をし、三度目の槲の冠を戴いて凱旋した時に、

「長生をしたお庇で、日頃の念願が成就しました、わたしの空想が事實の建物となりました。」

と言つてゐるヴォラムニヤの詞は、その心の奥底から發したものである。かやうに、かの女は名譽、武勇を生命とする婦人であるが、智慧の策略を缺いてゐるのではない。「不名譽とならん限り」本性にたがつたことをも言ふ女である。ここがその子と異なつてゐる所、また、マリーの言ふやうに、子の心理の一面の働き方を預つてゐるところである。

女性的性質を代表するものは、コリオレーナスの妻ヴァージリヤである。言ひ換へれば、かの女は、ヴォラムニヤから女性的性質だけが飛び離れて結晶したやうな性格である。寡默、溫淑、その夫の言ふ「なつかしい無口どの」こそ、コリオレーナスを靜穩ならしめる役廻りにあるのだ。本來ならば、母のヴォラムニヤがこの役を勤めなければならぬのだが、女丈夫は猛者をたきつけるだけである。ところで、この母子は異體一心であるから、その間にヴァージリヤが積極的に割りこんでみようがない。生きがひありといふ存在感は母子結託にあるのだから、妻たる者は、もみ出された形である。しかし、夫はかの女を眞心をもつて愛してゐるのだ。これはかの女が消極的態度をとつて、彼の生命の流れに投じてゐるからである。作者は、この女性を寡默、溫順な良妻として描き出したところに、觀察と技巧との妙を見せてゐる。さて、古來、ヴォラムニヤの役を演じて好評を博した俳優は、例のシッドンス夫人くらゐのもので、その他、特に稱すべきほどの例はないといふ話だ。いかにもヴォラムニヤの役はむづかしいものであらう。同時に、ヴァージリヤの役も、またむづかしからう。溫淑といふ態度をもつて、覇氣に滿ちた剛愎な母子一體の生命の流れに和するさまを見せようとするのは、なか／＼の難事であらう。

ヴォラムニヤのやうな性格は、わが國の歷史譚や、講談物や、小說脚本中には珍らしいものではない。殊に、武士道といふ精神に基づいて作られた文學には、そのやうな女性の姿が多い。もちろん男性的性格の現れ方は、さま／＼に異なつてゐるが、アニマスの動きといふ點においては、みな一つ物である。すこぶるポピュラーの例を擧げて見れば、巴御前、板額、政岡などだ。春日局に至つては、代表的といつてもよいくらゐの特種女性である。わが國の創作家は、精神分析的見地から、かやうな女性を新らしく取扱つて見てはどうか。(をはり)

女 性 論（フロイド）

——„Die Weiblichkeit" (1933), S. Freud——

大槻憲二 譯

『象形文字の帽子を被つた頭が、僧帽と黒の學帽を被つた頭が、假髪を被つた頭が、その他幾千の愍れな、汗する、人間の頭が考へた。』——(Heine, Nordsee)——

女の謎に就いては、詩人ハイネならずとも、何時の世にも、右のやうに考へたものである。諸君の內男子の方々はやはり、かう云つた風に考へることに於いて、御多分に洩れない方でありませう。併し諸氏の內御婦人の方々は、御多分に洩れる方であらう。何となれば、御婦人方自身が謎であるから……。諸氏が凡そ人間にお會ひになると、それが男であるか女であるかと云ふことの區別が、まづ第一に問題になる。さうして諸氏はこの區別を相當の確信を以て下されるのが普通になつてゐる。解剖學的の知識も或る點に於いてその確信に與つてゐるのであるが、それ以上には出でない。男子の性的所產、精蟲及びそれの保持者は男性である。卵子及びそれの保有者は女性である。男女兩性に於いて、專らその性機能を果すべき器官は、どうやら同一性質のものから二つの別々の形態となつて發展してをるやうである。それ以外にも兩性に於いて、他の諸器官、體形、體質などに、性の影響が現れてゐるが、併しこの影響は常に必ず現れてゐると云ふわけではないし、その程度も區々である。卽ち、第二次的の性的特質である。然るに科學の教ふるところは全く諸君の期待に反してをり、そして恐らく諸君は當惑の感じを覺えられるであらう。卽ち科學は、男子的性裝置が（萎縮した狀態に於いてゞはあるが）女子の身體に於いても存し、またその反對に女子の性裝置が男性に於いても存するものであることを敎へるのである。この

事實に於いては科學は人間が兩性（Bisexuatilät）であつて、個人は男でもなく女でもなく、常に兩方であつて、只片方が他方よりも多いと云ふだけであることの徵證を見るのである。そこで諸君は、個人に於ける男性と女性との混合率が非常に違つたものだと考へねばならぬやうにお思ひになるであらう。ところが併し、極非常に稀な場合以外には、一人に於いては一種の性的所產――精子か卵子か――しかないのであるから、諸君はこの要素の決定的意義に就いて迷はれることであらう。さうして男性と女性とを構成するところのものは、解剖學では把握することの出來ない未知の特質であるとの結論に達せられるであらう。

男女の別を構成するものは、多分、心理であるだらうか？　我々は男性的と女性的とをやはり心理的性質として用ひ慣はしてをり、同樣に兩性と云ふ見地を精神生活の上に移して來たのである。我々は、或人が（男であらうと女であらうと）この點では男のやうに振舞ひ、あの點では女のやうな態度であつたと云ふやうに語る。併し諸君も直ぐに氣付かれるであらうが、かくの如きは單に解剖學と常識とに從順なるものに過ぎない。これでは男性的と女性的との概念に對して何等新しい內容を供することは出來ない。この區別は何等心理的でない。諸君が男性的と云ふ場合には、大抵の場合、それは『能動的』„aktiv“ の意味であり、また女性的と云ふ場合には、大抵それは『受動的』„passiv“ の意味である。ところでさう云ふ關係の存してゐることは、正しい。男性細胞は能動的に活潑であり、女性細胞を求めて行き、女性細胞卽ち卵子は不活潑で、受動的に待受けてゐる。性的元素的組織のこの態度は、正に性個人が性交に際しての態度をさながらに彷彿するもので、男子は性的結合の目的のために女子を追及し、これを捕へてその中へと侵入して行く。併しそのやうに云ふことは、つまり心理學のために、男性と云ふ特質を攻擊慾と云ふ契機に歸したことになるのである。併し或る種の動物に於いては、女性の方が强く、攻擊的で、たゞ男性は性交時にのみ能動的であることを知ると、以上の考へ方は果して事實の眞相を的確に傳へたものであるかどうかを諸君は疑はれるであらう。女性の方が强いものとしては、例へば蜘蛛がある。雛を世話したり育てたりする働きは如何にも女らしい事のやうに我々には思へるが、動物に於いてそれが常に雌の方に具はつてゐるとは限らない。非常に高等の動物に於いては、育兒の任務は兩性が分擔してゐるか、或は男性の方が專らそれに當つてゐるのさへ見受けられる。人間の性生活の分野に於いてさへも、男性的態度を能動とし、

女性的態度を受動ときめてしまふことの如何に不都合であるかを、諸君は直ちに氣付かれるであらう。母は、その子に對しては、あらゆる意味に於いて能動的である。哺乳行爲に就いてさへも、母は子に乳を吸はせると云へると共に、自分でも子供を吸取つてゐると云ふことが出來る。狹い性的分野から離れて行けば行くほど、男性＝能動、女性＝受動、の一概的な考へ方の誤りであることが判然して來る。女性は種々な方向にその偉大な能動力を發展させることが出來る。男性はその受動的順應力を高度に發展させなければ、その能動力に於いて女性に比肩することは出來ない。そこで諸君はこの事實からして男女とも心理的意味に於いては兩性的であることの證據を發見し來ると云はれるであらうか、それならば諸君は能動を男性に受動を女性にきめて了つてゐられるのだと私は推定する。併しさう云ふ結論はお控へになるがよろしい。そんな結論では何の役にも立たない。それに依つて我々は何等の新しい認識を得るものではない。

そこで我々はかう考へることが出來るだらうと思ふ。――女性は心理的に、受動的な目的を好んで追及するを特質とすると。さう云つたからとて何も受動性そのものと同じと云ふわけではない。一つの受動的目的を貫徹するためには、多大の能動力を必要とする。で、多分かう云ふことになるのであらう、即ち女に於いてはその性機能に於ける役割からして、受動的な態度及び受動的な目的追及を好むことがやゝ根深く（性生活のこの原型に從ふことが多いか少いかに應じて多少とも根深く）生活の中へ喰込んでゐるのだと。併しそれに就いて我々が注意しなければならないことは、社會的秩序の力が同時にまた女を受動的な立場に追遣つてゐるのを輕視すべきでないと云ふことだ。それ等は總てまだ極めて漠然としてゐる。女性と本能生活との間に特に不斷の關係あることを、我々は看過したくないと思ふ。女は素質的にもその攻擊慾を抑制するやうに定められてゐるが、また社會的にもさう云ふ風に强要せられてゐるので、愈々そのマゾヒスティッシュな感情を强めることの教育をなすことになる。さうして實は、そのマゾヒスト的感情亢奮と內向した破壞慾とが、色情としてうまく結びついてゐるのである。で、マゾヒスムスは、人々も云ふ通り、眞に女性的である。ところが男に於いてもそのマゾヒスムスが隨分屢々見られるとすれば、これ等の男は甚だ判然と女性的特徴を示すと云ふより外はあるまい。

そこで諸君は既に、心理學もまた女性の何たるかを解明し得ないと考へようとしてゐるであらう。この說明はもつと別の方面から下さなければならない。さうして凡

そ生物に於いて男女の別あるは抑々如何にして生じたのであるかを知るまでは、その說明を下すことは出來ない。それに就いては我々には何も分つてゐないが、この男女の別あることは凡そ有機的生體の最も著しい特質で、これに依つて無生物と截然區別せられるのである。併しながら、女性器を具へてゐるために明かに、或は主として女性として認められる人間の個體に於いて、我々は研究すべきことを十分に發見するのである。そこで精神分析はその本性にふさはしく、女とは何であるかを記述しようとはせず（そんな事は精神分析で解決出來る問題ではない）、寧ろ女が、本來兩性なる子供から如何にして發展し來るかを探究するのである。吾人はそれに關して二三の事を經驗したのである。それは我々の仲間の婦人分析者の或人たちが、この問題を調べ始めたからである。この問題に關する討議のある時に、兩性の別が特別な興味となつた。何となれば、兩者を比較して女性の方が步が惡くなりさうな事になると、いつでも婦人分析者たちは、我々男子分析者たちが何等かの根强い先入見を女性に對して抱いてゐてそれをまだ克服してゐない、そのために男子の分析は偏頗不公平となつてゐるのは當然の罰であると云つて、その疑ひを洩した。それに對して男子分析者の方は、人間はみな兩性だからと云ふ建前で、總ての失禮を回避してゐた。我々は常にかう云つてゐた。――それは貴女がたにはあてはまらない、貴女がたは例外だ。この點に於いては、女性的よりは寧ろ男性的だから・・・と。

我々はまた女子の性的發展を研究するに、二つの期待を以て臨んだ。第一は、女性の素質を以てしても多少の努力を拂はねばその機能を果すやうにはならないのであらうと云ふこと。第二は、決定的の轉向は既に思春期以前に伏在してをるか、或は完成してゐるのであらうと云ふこと。この二者は、やがて確證せられた。それのみならず男女の子供の發達の樣子を比較して見ると、いろ〳〵の事が分つて來る。卽ち、少女が一人前の女に發育するのは一層むづかしくもあり複雜でもある。何となれば、女子の發育には男子の發育には見られない二つの問題が含まれてゐるからである。兩性の發達を始めから平行的に辿つて見よう。實は既にその材料からして男兒と女兒とでは違つてゐる。それを確めるには、精神分析を俟つまでもない。性器の構造が違ふ通りに、他の肉體上の相違もこれに伴つてゐる。その相違は一々擧げるまでもなく、諸氏にお分りの通りである。また本能の性質に於いてもその相違は顯著であつて、それに依つて後年の女性的本質を豫知するに足る。少女は概してあまり攻擊的、

反抗的、自立的ではなく、男兒よりも感傷愛を大人から併せられることを必要とするものゝ如く、從つてより從屬的であり、從順であるやうである。排泄物のしまりをするやうに躾けることがより容易であり、より速かであるのは、どうやらこの從順さの結果たるに過ぎないやうに思はれるのである。大小便は子供が自分を世話してくれる者に與へる最初の贈物である。その贈物を引込めておけと云はれて引込めておくことは、子供の本能生活に於ける最初の妥協である。我々はまた女兒の方が同年齡の男兒よりも知力も勝れ、生々としてゐるやうに感ぜられる。さうして外界に對してよりよく順應し、同じ頃に於いて對象に向つて一層力強くリビドーを纏綿する。このやうに發達の早いことには何か確たる根據があるか、それを突きとめることが出來るかどうか私は知らないが、何れにもせよ、女兒が劣つてゐるものでないことだけは確かである。併しこの性別的差違はあまり問題にはならない。それは個人の相違に依つて償ふことが出來る。我々がこれから追及しようとする意圖のためには、それを無視することが出來るのである。

早期幼兒時代に於いては、リビドーは兩性に於いて同樣の發達をなしてゐるものゝやうである。女兒に於いては既に虐待・肛門期に於いて攻擊慾の滯留があるやうに思ふであらうが、併し事實はさうでない。女流分析者が子供の遊戲を分析して知つたところに依ると、女兒の攻擊衝動はその豐富さに於いても激しさに於いても男兒のにヒケをとらないものである。男根期に入ると共に、性の區別は退いて完全に性の一致となる。そこで我々は、少女は少男であることを認めざるを得ない。この期に於ける男兒の明かな特徵は、彼がその小さな男性器に依つて快感をとることを覺え、それの亢奮狀態と性交の觀念とを結び付けることである。同じことを女兒もまたその陰核に依つて爲すのである。女兒は總ての自慰的行爲をこの男性器に等しきものに依つてなし、女子本來の膣は兩性ともにまだ發見してをらぬやうである。併し時々にはまた極早期に膣の感覺があるやうに思はれることもあるが、それを肛門又は外陰部の感覺と區別することは容易でない。何れにもせよ、それ等が大きな役割を果す場合はあり得ない。で、女兒の男根期に於いては陰核がその主要なる性帶域であることは確かだと云つていゝ。併しそのまゝでいつまでもあるわけはない。一人前の女になると共に陰核はその感覺と、從つてその重要さとを、全部的に或は部分的に、膣に讓渡することになる。で、これこそは、少女から一人前の女となるに就いて果さるべき課題の一つである。併し男の方は幸にしてそれほど

の難問を解くに及ばず、早期に於ける性的開花時代に用ゐ慣はしたものをそのまゝ性的成熟期にまで持ち越せばよいのである。

我々はまだ陰核の役割に就いて云ふべき事が殘つてゐた。第一の課題（性的感覺を陰核から膣に轉ずること）に就いては既に述べたが、今や、少女が一人前の女に發達するために果すべき第二の課題に就いて語らねばならない。少年にとつて第一の戀愛對象は母である。否、男の一生涯、母はエディポス・コムプレクスの形に於いて、根本的には戀愛對象として殘つてゐる。また少女にとつても母——並びに母と混同せられたものとしての乳母、世話する女——は最初の對象となるわけである。最初の對象纒綿は實に、偉大にして單純なる生活必需の滿足に依憑して行はれる。で、子供が母に於いて哺乳されると共にこれに愛情を纒綿させる事情は男女ともに同じである。併しその後、エディポス期に入ると共に、少女にとつて戀愛對象は父となる。で、少女等は平常の發展を閲した場合には、對象としての父から出發して窮極の對象への道を發見することになるのであると期待される。このやうに少女は時期の移行するに從つて、性的帶域と對象とを轉變させなければならないが、男兒に於いては、二つともさう云ふ必要がない。そこで、どうしてさう云ふ事が起るかゞ問題となる。細かく云へば、如何にして少女は母への愛を父へ移すやうになるのであるか。換言すれば、その男性期から、その生物學的に決定せられたる女性期へと轉向し行くのであるか。

で、これを解決する理想的に簡單な一つの方法としては、或る一定の年齡からして、異性の魅力が始めて感ぜられて、少女は男性化して來るが、同じ法則は男兒をして母に固執させておくことになるのだと考へることである。實際、子供は兩親の性的寵愛が與へる暗示に從つてその性を發展させるのだと云つて差間へなからう。併しそれほど確かな事を云ふべきではないかも知れないが、我々は、詩人がよく夢想するやうな、かの神祕な、分析してその原因をつきとめることの出來ないやうな力の存在を、眞面目に信用してよいものかどうか、分らないのである。我々はそれとは全然別種の見解を、孜々たる研究の結果に依つて得たのである。その見解への材料だけは、少くとも、容易に供することが出來るのである。つまり、諸氏も慥に御存じの筈だと思ふが、相當の年齡になるまで父親型の男に、否、實際、現實の父親に、感傷愛を寄せてゐる女が隨分多いのである。父親に對して愛着を激しく、永く持續してゐるそれ等の女たちに於いて私は驚くべき確證を認めたのである。我々は勿論、その

以前に母への愛着の時代のあつたことを承知してゐたが、併しその愛着がそれほど內容豐富で、それほど持續的であり、それほど定着や性向への契機となるものであるとは、知らなかつたのである。この期間に於いては、父親はたゞ厄介な競爭者に過ぎない。母親への愛着は、多くの場合に於いて、四歲を超えて持續する。後年に於いて父への關係に於いて我々が發見する殆ど總てのものは、既に女兒等に於いて存在し、それが後になつて父親へと轉向せられるのだ。約言すれば、エディポス前期の母への愛着（Präödipale Mutterbindung）の時期を十分に考慮しなければ、我々は女性を理解することは出來ないとの確信を持つのである。

そこで我々の知りたいと思ふことは、女兒の母に對するリビドー關係は如何なるものかを云ふことである。それに對する答へはかうだ。——その關係は多種多樣である、と。ところで女兒のリビドー關係も幼兒性感の三期を總て通過するのであるから、それ等個々の時期の特質を具へてをり、それが口唇的、虐待・肛門的、及び男根的の願望となつて現れる。これ等の願望には能動的な亢奮と受動的な亢奮とがある。これ等の願望と、後に擡頭する性別とを關係させるならば（併しそれは出來るだけ避くべきことであるが）、それ等を男性的願望及び女性的願望と呼ぶことが出來る。それに、それ等の願望は完全に相反性（アムビヴァレント）を並存してゐて、感傷愛の性質を具へてゐると共に、敵對的・攻擊的性質をも帶びてゐるのである。後者の方が屢々先に出て來るが、その時その攻擊慾は不安の觀念に變つてゐるのである。これ最早期の性的願望を明確に云ひ表はすことは必ずしも容易ではないが、併し最も判然と現れる願望は母に子供を與へようとの願望と、母との間に子供を生まうとの、彼にふさはしい願望とである。これ等二つは、共に男根期に屬するもので、甚だ突飛な願望のやうであるが、併し分析觀察して見ると、疑ふ餘地のない確然たるものである。これ等の探究をして見て非常に面白いことは、それに依つて驚くべき個々の發見をすることである。例へば、人に殺されるとか、毒を呑まされるとか云ふ不安が、後には妄想症の根源となることがあるが、この不安が既にエディポス前期に於いて母に關係してゐることを、我々は發見するのである。また別にかう云ふ場合もある。——私が永年の間、いろ〳〵苦心して分析研究した間に興味のある挿話のあつた事を、諸氏は想起せられるであらう。主要興味が幼兒の性的な夢の發見に向けられてゐた時分に、私のところへ來た殆ど總ての婦人患者は、父親に誘惑されたことを話した。で、私は遂にこの報告は本當でないのだらう

と睨み、彼女等のヒステリー症狀は現實の出來事から來たのではなく、空想から來たものだと理解するやうになつた。その後やうやく私は、父親に誘惑されると云ふこの空想を、婦人に於ける典型的なエディポス・コムプレクスとして認識することが出來た。然るに今や我々は、女兒のエディポス前史に於いて、再び誘惑の空想を發見するのである。併しその誘惑者は屹度、母親である。こゝに於いて併しながら、この空想は現實の根柢に觸れてゐる。何となれば、肉體の世話をしてゐて性器に快感を呼醒ますやうにしたものは、恐らく必然的に呼醒ますことになるものは、實際に於いて母親であるからだ。

このやうに論じて來ると、諸氏は多分、女兒の母親に對する性的關係をあまりに複雜であるやうに、あまりに强烈であるやうに誇張するものではないかと、疑はれるであらうと私は思ふ。人々は女兒を見る機會は持つてゐるが、一向そのやうな關係は見られない。併しながら、この抗議は當らない。諸氏が女兒をよく觀察することを心得てゐるなら、さうして幼兒はその性的願望を前意識にまで齎し言葉に表すことが出來ないことを認めようと欲するならば、それ等のことは十分に見えるのだ。で、我々としてはかゝる感情の世界がやがて成人(かゝる發展過程が特に判然たる、或は大袈裟な形態を示してゐる成人)に於いて如何なる殘形と如何なる結果とを示してゐるかを研究することだけが、當然の權利となるのである。常態的な場合に於いては匿されてゐるやうなことでも、病的な場合にはそれだけが孤立し誇張されて見えるので、その意味に於いて病理もまた我々には都合のいゝものだが、我々の研究は決して重病人に就いてなされたのではないのであるから、その成果は信用するに足ると考へるのである。

今や我々の興味は一つの問題に向つて行く。――一體女兒のこの力强い母愛着は、何處にその根據を有するのであるか? 我々はそれが多くの女兒に於いて普通の事であると承知してゐるが、併し母への愛着はやがて父への愛着に移つて行くべき運命にある。そこに於いて我々は一つの事實に逢着する。さうしてその事實に依つて我々は百尺竿頭更に一歩を進めることゝなる。女兒の發達途上に於けるこの一歩は、單なる對象の轉變と云ふことのみの問題ではない。母からの離反はこれを敵視すると云ふ形で起るのである。母への愛着は憎惡となつて消失する。そのやうな憎惡は非常に强烈で、生涯の間保有せられてゐるが、後には非常に骨を折つてそれに對する超過補償がなされるものである。即ちその一部は感傷愛を以て克服されるが、なほ他の一半はそのまゝ憎惡として

殘つてゐる。それに對しては勿論、後年の出來事が强い影響を與へる。けれども我々は問題を限定して、父への轉向がなされる時にこの憎惡がどうなつてゐるのかを研究し、その動機を尋ねて見よう。ところで我々は、子供がその敵對感情を尤と思はせる種々な不平や嘆息を、聞かされるのである。その云ふところの價値は區々であるが、我々はそれ等を一通り承るだけは承りおくのである。が、多くは見えすいた理窟づけであつて、我々はその敵愾心の眞理の根源を發見しなければならない。で、私はこれから或る分析探究の話を諸氏に細々として聞かせるから、それに依つて諸氏も我々と見解を同じうせられるやうになるであらうと思つてゐる。

母へのこの批難は、その最も根源まで遡ると、母が子供にあまりに少しゝかお乳を呑ませなかつたことになるのだ。その事はつまり、母に於いて愛が不足してゐたと云ふことに解釋されるのである。ところでこの批難は現代の家族生活では、多少尤な點があるのである。母は多くの場合、子供のためにあまり多くの營養を持合せないので、數ケ月か、半年か、或は一年の四分の三位の間だけしか、乳を飮ませない。ところが、野蠻民族の間に於いては、子供は二歳から三歳頃まで母乳を吸つてゐる。乳母と云ふものはまた、母親と混融せられる。かゝる混融が起きない場合には、この批難は形を變へて、乳母は諾々として乳を飮ませてくれるのに、母があまりに夙く乳母を追返して了つたと云ふことになる。併し凡そ實際の事情がどんなであらうと、我々の出會ふだけの子供の批難が恐く尤であると云ふことはあり得ない。乳兒が哺乳への熱望は決して滿すことの出來ないほど激しいもので、乳離れの嘆きは遂に醫せられることのないものゝ如くである。原始人は既に走つたり喋舌つたりすることが出來るやうになつても、まだ母乳に吸付いてゐることが出來るが、それでもこれを分析して見れば同じ批難を抱いて居ることが分るであらうけれども、私は敢て驚かぬであらう。離乳と云ふことゝまた、毒を服まされることの不安とが結びついてゐるやうである。毒は、これを服む者を病人にする食物である。多分、子供はまたその早期の病氣をこの哺乳拒否に歸する。今では學校の知的敎育のために偶然と云ふことを信ずるやうになつてゐるが、敎育のなかつた原始人は（子供もその意味では原始人であるが）何でも凡そ起きた事には根據があると考へてゐる。多分、萬有に心靈ありとした野蠻人の世界觀、（アニミスム）は、さう云ふ意味であつたのであらう。現代人の間でも或る階級の間では、人間は誰かに殺されなければ死ぬものではないと信ぜられてゐる。それが醫

者に殺されたとなれば、まづいゝ方であるが、多くの神經症者に於いては、自分の近親者が死んだ場合には、それは自分の所爲となり、自分がその死の原因であると云ふ風に考へられるのが常である。

ところが母に次の子供が生れると、母に對する第二の不平が燃え上るのである。この不平は離乳期と結びつくことがある。母は新しい子供に乳を與へねばならないので、自分にはもお乳を呉れることは出來ないし、呉れようとも欲しない。二人の子供があまりに間をおかずに生れ、第二の懷姙に依つて哺乳期が縮小された場合には實際この批難は一つの現實的の根據を持つことになる。さうして次の赤兒との年齡差が僅か十一ヶ月位の子供でも、這般の事情を認識するに幼過ぎはしないのである。併し子供が歡迎出來ない新來者、新侵入者に對する不興は、母乳を奪はれた事のみに依つて生ずるのではない。一體、自分の母が自分以外の子供の世話をしてゐると云ふことが既に癪にさわるのである。そこで子供は王座を引摺り下されたやうな、自分の位置を奪はれたやうな、權利を侵害されたやうな感じがして、新來の同胞に對して嫉妬的憎惡を起し、母の變心を怨むやうになる。さうしてその怨恨は態度の變化となり、可愛くなくなることに依つて表現される。卽ち、『氣むづかしく』、怒りつぽく、剛情になり、排泄物を適宜に處置することの折角に得た能力を退行せしめるやうになる。これ等のことは既に前から分つてをつたし、また自明の事として誰しも容認するであらうが、併しこの嫉妬的感情が如何に力强いものであるか、それが如何に執拗に殘るものであるか、またそれが後年の生活に如何に大きな影響を及ぼすものであるか、などに就いて正しい觀念を持つことは稀である。殊に、この嫉妬はその後の幼少時代に段々と培はれる。次の同胞が生れる度にその感情が全的に震蕩せられるからである。その子供がいつまでも母親の特別の寵兒である場合とても、這般の事情に變りはない。子供の愛情慾求は度がない。他の子供と分配することは斷然不滿である。母親の愛を一人で壟斷しなくては承知しない。

子供の母親に對する敵視の一つの豐富な源泉をなすものは、子供の多樣な（そのリビドー發展の樣相に應じて變轉する）、而も大抵は滿足させられることのない、性的願望である。かゝる拒否の最も力强いものは男根期に起る。その期に於いて母親たちは子供が性器に於いて快樂的な活動をなすこと――實はそれへの誘導を自らなしたものは母親であるのだが――を禁斷する。屢々、嚴しく脅かし、あらゆる不興な樣子を示しつゝ……。から數へて來ると成程、女兒が母親から離反するには、十分過

ぎる理由のあることが分る。そこで、この分離は幼兒性感の本性から、愛情慾求の無制限から、性的願望の不可充足性から、不可避的に結果し來るものであると、判斷することになるであらう。實際、人々は多分かう考へるであらう、子供のこの最初の愛情關係が破滅の運命にあるのは、それが最初のものであるからだと。何となればこの早期の對象纒綿は常に必ず高度の相反並存性を具へてゐるからだ。强烈な愛情の裏に、常に力强い攻擊的傾向が存在してをり、子供の對象への愛が情熱的であればあるほど、この對象から與へられる失望と拒否とは愈々ひどく應へるわけである。遂に、愛情も、重なる敵意に屈伏しなければならなくなる。或はまた、愛情纒綿に本來的な、そのやうな相反並存（アンビヴァレンツ）は承認しないで、かう考へることも出來よう。卽ち、抑々、母子關係なるものは、その特殊性から云つて、遂に子供の愛情が損はれると云ふ結果になるのが等しく不可避であるのだと。何となれば、躾けは如何に優しくしたところで多少の强迫と制限とを加へることにならざるを得ないし、また凡そそのやうな自由干涉は、子供に於いて必ず反動として反抗と攻擊との傾向を生ぜざるを得ないからである。このやうな問題を討議することは誠に興味あることと私は惟ふが、併しそれをしようとすると、忽ち一つの抗議が提出せられて、それが我々の興味を別方面に導いて行く。總てこれ等の契機――母親の冷遇、愛の報いられざること、嫉妬、誘惑しておいて後で禁斷すること、など――は、男兒の母に對する關係に於ても生ずるが、併しそのために男兒は母なる對象を離れることは出來ない。女兒に於いて特殊であつて、男兒に於いては起らないか、或は女兒の場合のやうには起らないか、何れかであるところの何事かを發見しない以上は、我々は、女兒に於いて母親への愛着が消失する所以を說明したことにはならないのである。

我々はこの特殊なる契機を發見した――而も期待した通りの個所に於いて（併し固より驚くべき形に於いてではあるが）――と私は考へてゐる。期待した通りの個所に於いてと、私は云つたが、何となれば、それは去勢コムプレクスに於いてであるからだ。解剖上の相違はやはり、心理上の歸結となつて現はれねばならない。併しながら女兒が男性器の缺如に就いて母親にその責を歸し、この不足に對して母親を寬容しないことを分析に依つて知つて、驚いたのであつた。

諸氏は旣に御承知の通り、婦人にはやはり去勢コムプレクスが存すると我々は云ふのである。併し女兒の去勢コムプレクスは男兒のそれとは、その內容が同じである

わけがない。それは當然の理由がある。男兒に於いては彼が女性器を瞥見した時に、去勢コムプレクスが起るのだ。卽ち、彼がそれほど高く評價してゐる男性器は人體には常に必ずくつ付いてゐるとは限らぬものだと云ふ事が分ると共に、一つの脅威を感ずることになる。その脅威は彼が自分の性器を弄することに依つて自らに招いたものなのだ。そこで彼はその脅威を信じ始め、それ以來去勢不安（Kastrationsangst）の影響を被り、この不安が彼の向後の發達の最も强勢な動力となるのだ。女兒の去勢コムプレクスもまた、異性器を瞥見することに依つて始まる。卽ち、女兒は直ちにその相違を認めると共に、その相違の意味をも認める。（その事は誰しも承認せざるを得ない。）こゝで女兒は非常に心持を傷められ、自分も『あゝ云ふのが欲しい』と口に出して云ふことさへ屢々ある。かくして女兒は今や男性器羨望（Penisneid）に陷り、そのために彼女の發達と性格構成上に拂拭すべからざる痕跡は殘され、また最も具合のよい場合と雖も、相當な心的勞苦を支拂つてゞなければ、この嫉妬を克服することは出來ない。女兒が自分にペニスの缺如してゐることを容認すると云ふことは、彼女がその事實に容易に屈從したことを意味しない。それどころか、自分もさう云ふのを持ちたいとの願望を永い間保有し、いつかはそれが得られるとの信念を意外の後年に至るまで失はないでをり、やがて現實を知悉すとことに依りかゝる願望が到底遂げられ得べからざるものであることが分つて、その願望を放擲した後にも、これを分析して見ると無意識の內にそれが保留されてゐて、驚くべき多量のエネルギーがそれに纏綿されたまゝになつてゐる事が證明される。憧憬の男性器を有ちたいとの願望は、やがて成人後の婦人を分析にまで驅り立てる動機の一部分をなすことがある。さうして賢明にも彼女が分析から期待するものは――卽ち、知的な職業に從事する能力を持たうとすることは――この抑壓された（男性器への）願望の昇華せられた變形として認識せられることが屢々である。

女性心理にとつて男性器嫉妬が如何に重大な意味あるものであるかは、疑ふまでもない。婦人の心理生活に於いては、羨望と嫉妬とは男子のそれに於けるよりは大きな役割を果すとの主張は、男子の不公正の一つの實例として諸氏はお聽きになるであらう。この羨望と嫉妬とは男子に見られないとか、或は婦人に於ける羨望と嫉妬とはペニス羨望以外に何等の根源を持たないとか主張するわけではないが、併し我々としては、婦人に於ける嫉妬羨望の大部分は、これをやはり男性器羨望に歸せざるを得ないのである。ところが、或る分析者たちは、男根期

に於ける男性器羨望の初潮の意義を輕視しようとする傾向を示してゐるのである。婦人に於ける嫉妬羨望は、その主要な様相から見ると、第二次的に構成されたもので後年の葛藤を契機としてはゐるが、それがかの早期幼兒時代の感情へと退行することに依つて生じたものであると。ところで、かうなると、問題は深部心理學全般の大問題となるのだ。多くの病理的な――或は單に異常的な――本能の態度（例へば、あらゆる性的倒錯）に於いては、その本能の幾何が早期幼兒時代の定着に配分され、その幾何が後年の經驗や發展に配分されるかと云ふことが問題になる。それに就いて殆ど常に眼目になるのは、吾人が神經症の病源を論ずる場合に假定したところの、兩者が相互に補充して一全體を構成すると云ふこと（Ergänzungsreihen）である。兩方の契機が交互的な割合でその原因としての役目を受持つてゐる。一方が少いと、他方が多くなつて、丁度釣合がとれてをる。幼兒的契機はあらゆる場合に於いて、方向を決定する。常に確實に決定するとは云へないが、併し大抵の場合に決定する。では、ペニス羨望の場合はどうかと云ふに、私は斷然、幼兒的契機の方が有力であるとするものである。

　女兒が自分にペニスの缺如を發見することは、その發達上に於ける一つの轉向點をなす。三つの發展方向がこの發見から始まる。第一は性的禁制、卽ち神經症へ。第二は、男性コムプレクスとの意味に於ける性格變化へ。第三は、正常の女性へ。これ等三つの外にも相當澤山の方向がある。尤もそれ等が全部我等に分つてゐるわけではないが……。第一傾向の本質的內容をなすものは、これまで男性的に生きて來た女兒が自分の陰核の亢奮によつて快感をとることを知り、この自慰的活動と母に向けた性的願望とを關係させるが、男性器羨望に依つて男根的性感の享樂を腐らせてしまふ、と云ふにある。自分よりは遙かに惠まれた事情にある男兒と比較することに依り、女兒は自尊心を傷けられ、陰核自慰などは情なくなつて斷念して了ひ、母への愛を放棄すると共に、性的活動一般の重要な部分をも抑壓して了ふことが稀でない。併し母からの離反は一擧にして成されると云ふわけではないやうだ。何となれば、女兒は自分の去勢（男性器缺如）を最初は自分一人の不幸だと考へるが、やがて他の女一般にもこれを押擴めて行き、最後に母もやはりさうなのだと知るのである。彼女は實は、母には男性器があると思つたればこそ、これを愛したのであつた。然るに母にもやはり男性器はないのだと分ると共に、母を愛の對象として落第させることが出來るやうになる。かくて永い間かゝつて集積してゐた母への敵視はその點晴を得

たこととなる。で、つまり、男性器缺如が發見されると共に、女は（女兒にとつての如くに、また後年には成男子にとつての如くに）女兒にとつても、全く無價値のものとなるのである。

諸氏はみなよく御存知の通り、我々の神經症者たちは彼等の自慰が如何にもその重要な病源であると考へてゐるのである。彼等はその自慰を以て自分の一切の病苦の原因であると考へてゐる。で、我々は彼等をしてその考への誤りであることを知らせるに非常に骨が折れる。併し本來我等は、彼等が正しいのだと云ふことを承認してやらねばならないのだ。何故ならば、こゝに云ふ自慰とは幼兒性感の實施であつて、その幼兒性感の發達不善のために彼等は抑々、惱んでゐるのだからである。たゞ神經症者たちは思春期の自慰にのみ責を歸するが、實は早期幼兒時代の自慰の方が問題なのであるが、その方は彼等に於いて忘れられてゐる。早期自慰のあらゆる實際の細事が（それ等が見つけられやうと、られまいと）個々人の後年の神經症や性格に對して如何に重要なものとなるかを、また兩親がそれをやめさせようとして如何に骨を折り、或は（それを自分で抑止することが出來たならば）放任したかを、彼等に詳細に示してやる機會を、いつかは持ちたいと、私は思つてゐた。總ては不磨の痕跡を、彼の發達の中に殘してゐるのである　併し私はそれをするに及ばないことを寧ろ喜んでゐるのである。それはなかなか困難な、そして長く掛る仕事に違ひないからだ。で、遂に諸氏は私を困らせるであらう。何となれば諸氏は兩親として或は教育者として、子供の自慰に對して如何に處すべきかの實際の相談を私に持掛けるであらうからだ。私が諸氏にお話する女兒たちの發達に於いて、諸氏は、子供が自分で自慰を廢さうと骨折る一實例を、今や御聽きになる。が、その骨折りは、子供に於いて常に失敗に終る。男性器羨望のために陰核自慰に反對する強い衝動が呼醒まされ、而も陰核自慰の方ではその反對に屈しようとはせぬ場合に一つの激しい解放戰が勃發する。その戰ひに於いて女兒は、今や自分で愛想をつかして捨てた母親の役割を自ら買つて出、劣等なる陰核に對する不滿の全部を、陰核に於いて滿足をとることへの反抗といふ形で表現するやうになる。なほ幾年もの後に、自慰的活動は既に抑壓されて久しくなつてゐる時にまだ一つの興味が存續してゐる。その興味は依然恐れられてゐる誘惑の防禦として、我々は觧釋せざるを得ない。その興味は、自分と同樣な苦惱を經て來たと思はれる人々に對する同情となつて現れる。その興味は結婚への動機となる。實際それは結婚又は戀愛の相手の選擇を

決定することさへある。早期幼兒時代の自慰を清算することはなか／＼容易ならぬ、卽ちなか／＼重大な事柄である。

陰核的自慰の廢絕と共に、能動性の一部分は放棄せられる。今や受動性が主勢となり、父への轉向は多く受動的な本能感情の助力に依つて完成せられる。諸氏も認識せられるであらう通り、そのやうに男根的活動を追拂ふことが發達を推進めることになり、かくて女性は完成して來るのである。その際、抑壓に依つてあまりに多くが失はれることがなければ、この女性は常態的に出來上ることになる。女兒が父に向つて轉じ行く時に抱く願望は、恐らく本來は男性器に對する願望であらう。その願望を女兒は母に依つて滿たされなかつたが故に、今や父に依つて滿たされやうと期待するのだ。女兒が男として父親に向ふのでなく女として向ふ心持になるのは、男性器への願望が子供への願望に依つて置換へられた時（子供が男性器の等價の代償であることは昔からの象徵に依るのだ）に於いて始まる。女兒は既にもつと夙く、その男根期が障害されない時分に、子供を願望したことがある。彼女等が人形を弄玩するのはその意味である。併しこの弄玩は本來、彼女等の性心理の表現ではなかつたのだ。これは能動を以て受動に代へんとの意圖に於いて母に同一化せんためである。彼女等は母の役割を演じ、人形は自分自身であるのだ。今や彼女等は、母が自分等に常々してくれたことを、人形等に向つてなすことが出來る。この人形と云ふ子供は男性器願望が這入り込んで來ると共に始めて、父親の子供となり、それ以來は最も力强い女性的な願望目的となる。この幼兒的願望が、後に始めて現實的に充足せられると、その幸福は非常に大きくなる。殊にその幸福の大きいのは、その子供が憧憬の男性器を具へてゐる男兒である場合だ。父親の子供と云ふ觀念の併置に於いて、强調は屢々子供の方に置かれて父親の方には置かれない。そこで、男性器を所有したいとの早期男根期に於ける男性的願望は、今や完成したる女性の中になほ閃き貫いてゐる。併し、我々はこの男性器願望を、多分、微妙な意味で女性的な願望と認めるべきであらうと思ふ。

子供・男性器・願望を父に交付することに依つて、女兒はエディポス・コムプレクスの立場に這入ることになる。母への敵視（これは必ずしもこの時始めて生ずるものではないが）は、今や非常に强められて來る。何となれば女兒が父から與へて貰はうと思つてゐる總てのものを、母は父から受けてゐるので、母は彼女にとつて競爭者となるからである。女兒のエディポス・コムプレクスは、

エディポス前期に既に母への愛着――あれほど力強く、あれほど執拗な定着を殘す母への愛着――あることを、長い間我々の眼から掩ふてゐた。女兒にとつてはエディポス的立場は、永き困難なる發展――一種の豫備的段階、休息狀態――の始まりである。この休息狀態を人々はなか〳〵簡單に棄てはしない。何となれば、その理由は外でもない、性的潜在期は既に程遠くないからである。然るに今や我々の思ひ及ぶのは、エディポス・コムプレクスの去勢コムプレクスに對する關係が男女兩性に於いて自ら別あることとである。この別は及ぼすところ、重大であるやうに思はれる。男兒はそのエディポス・コムプレクスに於いて母を求め父を競爭者として排擊しようと欲するが、このエディポス・コムプレクスは勿論、男根的性感期から發達し來るのである。併しながらエディポス・コムプレクスは去勢脅威に强迫せられて、父の敵視と母への追求を放棄せしめられる。男性器を失ふことになるかも知れぬとの危險感のために、エディポス・コムプレクスは放棄せられ、常態的な場合に於いては根抵的に破壞せられ、その代りにその遺物として峻嚴な超自我は確立せられる。女兒に於いて起るのは、これと殆ど正反對のものである。去勢コムプレクスはエディポスを破壞せず、却つてこれのために準備の道をしつらへる。男性器羨望の影響のために、女兒は母への愛着から追出されて、エディポス的立場の中へ、宛も港の中へ逃込む舟のやうに、逃込む。去勢不安の消失と共に、男兒をしてエディポス・コムプレクスを克服せしむるやうに追迫してゐた主要動機はなくなる。女兒はエディポス・コムプレクスの中にやゝ永く低徊してゐて、たゞ遲く、且つ不完全にこれを脫却するに過ぎない。さう云ふ事情のために、超自我の構成もなか〳〵困難となり、超自我が依つて以て文化的意義を發揮すべき力と獨立性とを獲得することが出來ない。で、さう云つてはフェミニストたちに叱られるであらうが、超自我がやゝ低く、文化的能力に於いて弱いと云ふのが大體に於いて婦人の特質であると云ふことになるのである。

さて話を元に戻して、婦人が自分に男性器のないことを發見して後に、起り得べき第二の反動として、强き男性コムプレクスの生ずることを、吾人は擧げておいた。と云ふのはつまり、女兒は云はゞ、不愉快な事實を承認することを自分に拒み、反抗的にこれまでの男性的な傾向を保持し、自分の陰核自慰を持續し、男性器を持つてゐると考へられた母又は父親との同一化の中へ逃込むことになる、と云ふわけである。かう云ふ事になるのは、抑々何に依つて決定されるか。それは一つの素質的な要

素（卽ち普通に男性の特質であるところの、より高度の能動性）以外には、吾人には何も考へられない。この過程の本質をなすは、發達のこの邊のところで、（女性への轉向を開くべき）受動性を推進しないで、これを避けておくことだ。この男性コムプレクスの所業を最も外部から見ると、明かに同性愛の意味に於ける對象選擇の影響と思はれる。ところが、分析的に調べて見ると、婦人の同性愛は滅多に、或は決して、幼兒的男性傾向をそのまゝ眞直に持續してゐるものでないことが分る。つまりその間に、女兒もやはり、暫時は父親を對象にとり、自分をエディポス的立場に置くものであると思はれる。やがて併し、彼女も父親に就いて滿足を得ることが必然的に出來ないとなると、今度は自分の早期の男性的コムプレクスに退行せねばならないことになる。この場合、父親に就いて滿足を得られないことの意義を、あまり大袈裟に考へてはならない。同じことは（男性的コムプレクスに退行せず）女性的となる女兒に於いてもやはり殘つてはゐるのだが、唯同じ結果を伴はないだけである。その間、素質的契機の優勢であることは、疑義を挾む餘地はないやうであるが、女性的同性愛の發展に於ける二つの段階は、同性愛者の實際爲すところの中に美事に反映してゐる。彼等は、男女間に見られると同じ程屢々、また同じほど判然と、御互に母と兒との役割を演じてゐるのだ。

私がこれまでお話したことは、云はゞ、婦人の前史である。併し、これ等の事は最近研究の成果であつて、分析が如何に細かいことを穿鑿するものであるかの一證として、諸君にも興味があつたであらう。婦人自身が主題となつてゐるのであるから、今度は、これ等の研究に對して重大な貢獻をなした二三の婦人の名前を擧げておくことにしよう。ブルンスヰック女史 Dr. Ruth Mack Brunswick はそれらの內最初の人であつて、エディポス前期の段階の定着に退行し、エディポス的立場にはまだ達しなかつた神經症の一患者を、同女史は記述してゐる。その患者は嫉妬妄想の形式を具へてゐて、治療を受付けた。ジャン・ラムプル・ド・グロート女史 Dr. Jeanne Lampl de Groot は女兒の母に對する殆ど信じ難い程の男根的能動性を確實に觀察し、研究した。ヘレーネ・ドイチ女史 D. Helene Deutsch は、同性愛的婦人の戀愛行爲が、母子關係の再現であることを明かにした。

女性心理がその後、思春期を經、成熟期に達して、如何になるのかを細かく跡づけることは、私の意圖ではない。我々の觀察も、未だそれをなすに十分ではないやうである。たゞ二三の特徴を、私はこれから纏めて擧げて

見よう。女性前史の話に固執して、私はこゝで唯かう云つておきたい。女性の發芽はそれ以前の男性的傾向の殘存的現象のため障害に曝されるのだと。かのエディポス前期の定着への退行は、甚だ屢々起るものである。大抵の人間の生活に於いては、男性が主勢となつた時代、女性が主勢となつた時代が、交互に反覆されて現れるものである。我々男子が『女の謎』と名付けるのは、右の事實の一部分であつて、これは多分婦人に於ける男女兩性傾向のかゝる表現から生じ來るのだと云ふことが出來よう。併しこのやうな探究をしてゐる間に、今一つの問題の決定がつくやうになつたと思ふ。吾人は性生活の本能力をリビドーと名付けた。この性生活は男女兩極に依つて支配される。で、この相反に對するリビドーの態度を明に把握するのは容易である。總て性感にはその性感に特殊なリビドーが指定されてあると云ふことは、從つて或る種のリビドーは男性的性生活を、他のリビドーは女性的性生活を追求すると云つたとして誰しも敢て驚かないと思ふが、併し事實はさう云ふわけではないのだ。實は、リビドーにはたゞ一種しかなくて、それが或は男性的、並びに女性的の性的機能を果すのである。我々はリビドーそれ自身には、何等性別を認めない。時に、能動を男性とする習俗的な考へ方に從つて、リビドーを男性的と名付けんと欲する事もあるが、その場合にもリビドーはやはり受動的な働きをもなすものであることを忘れてはならない。それにしても『女性的リビドー』と云ふ言葉は、何としても是認し難い。リビドーが女性的機能をなさしめられる時には、そこに一層の無理があると云ふ感じがする。で、またその場合には、男性的の場合に於けるよりは、――目的論的に云へば――その本性がより少く主張されてゐると云ふ印象を受ける。さうして、その事の根據は――再び目的論的な考へ方をするならば――次の一事に存するのだ。卽ち、生物學的目的の貫徹は男性の攻撃慾に一任せられてあつて、女性がそれを協贊し應援するとせぬとは或る程度まで無視されてゐると云ふ一事である。

婦人に性的冷感者の多いのは、この協贊と應援との無視を確證するものゝ如くに思へるが、それにしてもこの冷感と云ふことはあまりよく了解出來てゐない現象の一つである。冷感は多くの場合、心理的に發生するものでそれから他の影響も受け易いが、また他の場合には、素質的な條件、のみならず解剖的要素をさへ、假定したくなり易いのである。

成人した女性を分析觀察して如何なる心理的特質を發見したか、私はその二三を諸氏にお話するお約束をした。

これ等の主張の眞理價値に就いては、あらゆる場合に妥當すると云ふわけではない。また何を性的機能に歸し、何を社會的陶冶に歸すべきかを、相互に辨別することも必ずしも容易でない。で、我々は婦人性には一層高度のナルチスムスが對象選擇に影響すると認める。從つて、婦人にとつては愛することよりも愛せられることの要求が、男よりも一層强い。婦人が風姿に就いて虛榮的であるのは、男性器羨望の補償としての意味が含まれてゐる。婦人は自分の魅力を本來の性的劣等感の後からの埋合せとして、愈々高く評價しなければならないからである。羞恥心は婦人の特性とされてゐるが、併し人々が考へるであらうよりはもつと後天的なもので、我々としては性器の缺陷を掩はむとする本來的意圖のために羞恥するのだと考へる。羞恥心が後には、別の精神を果すやうになつてゐることを、我々は忘れない。婦人は文明史上の發見や發明には餘り多く貢獻してゐないと考へられてゐるが、併し編物と織物との技法を發見したのは多分婦人であつた。果してさうだとすると、我々はその無意識的動機を洞察せんとの誘惑を感ずる。自然それ自身が手本を示してこれに見倣へと云つてゐる。卽ち、性的成熟と共に性的に發毛せしめて、これを隱蔽することの手本を與へてゐる。で、この上なすべき事とてはたゞ、皮膚に生えた編み合はさつてゐる毛の絲を互に密着せしめるだけの事である。諸氏はこの思ひ付きはあまりに空想的であるとして排け、男性器缺如が女性心理構成上に影響を及ぼすと云ふは固定觀念であると云ふかも知れないが、勿論さういはれても私は防禦の途はないのである。

　婦人がその對象を選擇するに如何なる條件に據るかは、社會的關係のために、一見不明にされることが屢々である。さう云ふ社會的關係に依つて拘束されないで、自由に好き勝手の對象を擇ばせたならば、婦人は屢々自分が女兒としてかくの如き男にならばやと思つた、さう云ふ男のナルチスティッシュな理想に從つて相手を擇ぶ。その女兒が父への愛着に囚はれてゐると、つまりエディポス・コムプレクスを有つてゐると、卽ち彼女は父親型の男を擇ぶ。母から父への轉向の際に、母に對して相反並存的（アムビヴァレント）感情關係の敵對感が殘つてゐるから、そのやうな結婚は確にうまく行く筈である。併し相反並存的葛藤一般のそのやうな解除は屢々、危くなつて來るものである。抑へられてゐた敵意は、積極的愛着の後に現れて來、この新しい對象へと移つて行く。始めは父親の後繼となつた夫は、時が經つと共に母親の後繼ともなる。だから、妻君の生涯の後半はその夫に對する戰ひを以て充たさるゝこと、宛もそのより短き前半が母親に對する反

抗を以て滿さるゝのと一般であることが、えてしてありがちである。一通りそのやうな反抗を濟まして了ふと、第二の結婚生活は遥に滿足の行くやうに進んで行くことがあるものだ。婦人の本性に於ける今一つの變化（そんな變化が來ようとは戀愛者同志は思ひも寄らない）は、結婚生活に入つて後、その第一兒が生れた後に起る。自分が母親になつたと云ふ感じがすると、自分の母親との同一化（それに對して婦人は結婚するまで抗爭するものだが）再び起つて來ることがあり、總ての（自分に引揚げてよい）リビドーは自分に引揚げられ、かくて反復强迫的傾向のために兩親の不幸な結婚をそのまゝに寫し出すことになる。男性器缺如と云ふ幼兒時代からのコムプレクスが今なほその餘勢を失はないでゐる證據は、母親が男兒を生むか女兒を生むかに依つて、その反應を異にする事の内に見られる。母親は男兒に對する關係に於いてのみ、無制限の滿足を感ずる。母親と男兒との關係は最も申分のないものであり、凡そあらゆる人間關係に於いて最も相反並存性（アムビヴアレンツ）のないものである。母親は、自分に於いて抑壓しなければならなかつた名譽慾を息子に轉嫁し、自分の男性コムプレクスの殘物であるものゝ一切の滿足を息子に期待する。結婚生活それ自身さへも、細君が夫を自分の子供にし、夫に對して母親として臨むことが出來るやうにならなければ、無事に納まらないのである。

婦人の母親への同一化には、二層あることが認識される。その一つはエディポス前期的同一化で、これは母親への感傷的愛着が基となり、母親を手本にとつてゐる。第二は、母親を排斥し、父親に對してその後釜に据らうとするエディポス・コムプレクスから來るものである。これ等二つから多くが將來に殘る。將來に於ける發達中にこれ等二者が完全に克服されると云ふことはないと云つて、恐らく過言でない。併しエディポス前期の感傷的愛着が婦人の將來にとつて決定的である。婦人が成熟後にその性的機能に於ける役割を果し、またその立派な社會的な仕事を爲すところの性質を持つやうになるのは、この時期に於いてゞある。この同一化に於いて、婦人はまた、その男性に對する魅力（男性のエディポス的母愛着を惚込みにまで燃上らせるところの魅力）を獲得するのである。たゞ若い男はその魅力を俟つまでもなく、自分で求めたものを、自分で得る場合が屢々だ。で、男の戀愛と女の戀愛とはその心理的時期がチグハグになつてゐる。

婦人には正義感に於いて缺くるところがあると認めざるを得ないが、それは恐らく、その精神生活に於いて羨

望が重きをなしてゐること〻關係がある。何となれば、正義の要求は羨望の變形であつて、人々は自分の羨望を醫するためには、正義的要求に依つてまづその條件を立て〻か〻るのである。我々はまた、婦人の社會的興味が男性のそれよりも弱く、本能昇華力が男子よりも低いと云ふ。社會的關心が少いと云ふのは、恐らく非社會的性格から來るのであつて、この非社會性なるものはあらゆる性的關係の特質になつてゐることは明かである。現に戀愛する者同志は二人きりで滿足するので、それが家族となつても、なるべく水入らずを喜ぶものである。リビドーの昇華と云ふことも、最大の個人的不安の前には動搖する。他方、私は、分析者がその分析的活動の間に再三經驗する一つの印象をこ〻に語らずにはゐられない。男は三十歳位になつても、まだ如何にも青年らしく、と云ふよりは寧ろなほ未完成で、これに分析を施すことに依つて、彼の發達の可能性を開き、大いに有用であるとの期待を、我々は持つ。ところが女は、同じ年頃になれば、もうその心は固まつてゐて、なか〳〵改變を加へ得ないので驚く事が屢々である。女のリビドーは既に窮極の位置に到達してゐて、これを別の位置に動かすことが出來ないやうに見える。もうそれ以上發展の道はなくなつて了つてゐる。宛も全過程は既に辿り盡され、これ以上感化を受ける餘地はなく、女となるための困難のために人としての全可能性を消盡して了つたかの觀があるのだ。我々は治療者として這般の事情を嘆ずるものである。よしんば神經症的葛藤の除去に依つて首尾よく病苦を醫することが出來た場合に於いてと雖も……。

以上で私が、女性に就いて諸氏に語り得る總ては盡された。誠に至らぬ、斷片的なお話で、おまけに時々は憎まれ口も利いたやうだが、併し諸氏に忘れないで頂きたいことは、私が云つたのはたゞ、女性の本質がその性的機能に依つて決定されてある限りに於ける記述に過ぎないと云ふことだ。性的機能の影響は、勿論大きいが、併し個々の婦人は、その他の點ではやはり一個の人間であり得ると云ふことを、私は忘れてゐるものではない。諸氏が女性に就いてもつと知りたいと思はれるならば、婦人自身の生活經驗を尋ねて御覽なさるか、或は詩人に就いてお訊きなさるか、或はこの學問がもつと深い、もつと優れた、總括的な知識を供することが出來るやうになるまでお待ちなさるか、何れかにして頂くのである。

（完）

婦人の同性愛

高水力太郎

ギインの女流分析者ヘレーネ・ドイチ女史 Dr. Helene Deutsch は數々の婦人同性愛者を研究してゐるが、就中、次の如き特異の場合を報告し、それに關聯して婦人同性愛の一般的特質に就いて論じてゐる。

女史が最初に扱つた同性愛者は、實に二十年來の分析研究の對象であつた。その同性愛は實に顯著な特徴を示してはゐたが、別に實行に出ると云ふやうな事はなかつた。本人は自分の性的空想が全然同性にのみ向ふことを判然と知つてゐた。彼女は同性者を抱擁し、接吻する時、非常に性的亢奮を覺えるのであつた。相手の女にも自分と同じやうな變態的傾向があるのだと云ふことを知つた時と雖も、彼女の態度は忠實で、プラトニックであつた。彼女は特殊の型の女に、魅惑を感ずるとは云へなかつた。如何なる場合にも、相手の女達は「男性的(マスキュリン)」ではなかつた。而も彼女自身は完全に「女性的(フェミニン)」であつた。彼女は別に男嫌ひと云ふわけではなく男の友達も澤山にあり、彼等から譽められたり、愛を云ひ寄られたりすることを嫌ふわけではなかつた。彼女は同情から或る男と結婚したが、その男の外觀は著しく「男性的」であつた。彼女はこの結婚に依つて數人の子供を擧げ、子供等に對して彼女は情熱的な感情は持たなかつたが、母親らしい感情は持つてゐた。

彼女は、自分の同性愛が何故にもつと能動的な、急迫的な形をとらなかつたかを、説明することは出來なかつた。たゞ彼女自身の禁制があまりに强かつたことを承知してゐたが、それは世間を慮つたためとか、家族への義務にひかされたとか「理窟付け」をした。彼女は自分の同性愛を思春期にまで辿ることが出來た。その頃に、えてしてその年頃にあり勝ちなやうに、先生やその他、權威ある同性者との間に交渉があつた。それ等の先生の性

格が特別に峻嚴であつたかどうか分らないが、併しとにかく、本人は二つの愛情に支配された。一方に於いてその先生は確實な人だと云ふ感じがすると共に、他方に於いて恐ろしいといふ感じがした。彼女は實際に、男に戀愛したことはなかつた。彼女がその夫となつた男に最初にひかされたのは、その男が特に能動的で、男性的な人間と彼女に思へたからであつた。結婚後、間もなく、彼女は夫が思つたほどに男らしくないことを發見して失望したと、分析者ドイチに物語つた。特に彼は性的な情熱と能動力とに缺けてをり、彼女が夫から能動力を求めた時に、特に失望せざるを得なかつた。

その患者が分析を受けに來たのは、神經病苦のためであつた。幾年もの間、彼女は沈欝の發作と一定內容の不安感情とのために苦んでゐた。その不安の感情と云ふのは、彼女が雇傭してゐる女たちに對して起きるのであつた。雇女等に對して患者は主人らしい權威ある態度をとることが出來なかつた。彼女の吩咐はなか／＼嚴しく、その吩咐に從はない雇女等に對して焦々したけれども、その不都合を難ずることが出來なかつた。當然さう云ふ難詰を加へねばならない場合に、相手の女たちに對して羞恥を感じたり、不安を覺えたりするのであつた。殊に彼女の家庭に居る者に變動があつて、新しい女が來る時に彼女の不安と心的葛藤とは平素の二重になるのであつた。彼女の夫が彼女を能動的に庇護し支持してくれ方が足りないとて、夫を批難するのは、さう云ふ場合に於いてゞあつた。

最近數年間に於いて、沈欝の發作は益々頻繁となり、而も自殺衝動がそれに伴ふのであつた。實際、或る場合には、自殺未遂にさへ行つたことも一再でなかつた。遂にもう危く死ぬと云ふところまで行つた。その時、呼ばれた醫者がヘレーネ・ドイチの友人で、その友人の紹介でドイチが分析を引受けることになつた。

數ケ月の間、患者の分析は去勢コムプレクスが中心となつてゐた。その當時——今から十三年前——には婦人に於ける去勢コムプレクスと云ふことは、分析者仲間でも今日のやうにまだ一般的に承認されてゐなかつた。然るにドイチ女史は、この患者の神經症も同性愛も、みなこの去勢コムプレクスにその核心を有することを氣付いた。彼女の男性器嫉妬は非常に强烈で、自分の男兒に對してさへ起きる程で、例へば夢や空想の中で男兒等のペンを切斷すると云ふやうな事をする。患者のサディスト的傾向は相當强いに拘らず、自分では寧ろ能動的な性格者だとは考へてゐない。つまり感動的で、素直で、而もガッチリした性格であつた。分析者への轉嫁は非常に强

烈で、心服、敬愛の態度をのみ示してゐた。宛も自分の母に依つて與へられなかつた愛と理解とを與へてくれる母を、遂に私に於いて發見したかのやうであつた。彼女の實母は峻嚴な、冷やかな人で、患者は終生その母を意識的に憎んでゐた。母は分析の始まる數年前に、亡くなつたが、その直後には深い沈欝に陷つた。彼女が自殺しようとしたのは、その當時であつた。

分析期間中に、沈欝の發作が少しの間隔をおいて屢々襲つて來たが、その度每に如何にもその沈欝の特質を示す夢を見た。その夢に依つてその沈欝の內容がよく示されてあつた。それ等の內容は胎內空想と自殺觀念であつた。當時、本人は口癖のやうに、もし分析者に對してこれほどの信賴を持たなかつたならば、直ぐにも死んで了つたであらうにと云つてゐた。

夢の聯想の一つに、その實母が大手術を受けるために擔架に乘せられて、外科醫の手術室に運ばれるところがあつた。この聯想は自分が自殺未遂で繃帶に包まれて病床に橫はつてゐるところに關係して想起された。この聯想に依つて、彼女がその母の死を思ふほどに憎んでゐることが分つた。この事は、それまで抑壓されてゐたが、今や分析の焦點となつた。五ケ月間ほど分析操作をしてゐる內に、彼女の神經症及び變態同性愛の中心となつてゐるところの幼兒期記憶が浮上つて來た。その記憶は本人四、五、六歲頃の事で、本人は當時、とにかく母にとつては眼にあまるやうな風に自慰を行つた。この自慰が果して常態以上に出たかどうか、又必ずそれに伴つたに相違ない空想內容の何であつたかは、これを突きとめることは出來なかつた。何れにせよ、患者の云ふことに依ると、その母親は何とも他に方法がなかつたので、患者の手足をくゝり上げ、寢臺に縛りつけて、その側に立ち「さア、これでもおいたが出來るならやつて御覽!」と云つた。この事は患者に於いて、二重の反動を生じた。一方、患者は母に對して猛烈な憎惡を覺えたが、身體が縛られてあるために、その憤りを發散させることが出來なかつた。他方に於いて、そのために彼女は強い性的亢奮を覺えて、母の眼前であるに拘らず、臀部を蒲團にこすりつけようとの衝動を感じた。

この場面に於いて子供心にも最もなさけなく思つた事は、父親が呼込まれてそこへ來合せてゐたに拘らず、冷然としてたゞその場を客觀し、あれほどなつかしく思つてゐる子供を助けようともしなかつたことであつた。

分析に依つてその記憶が如何にして想起されたかと云ふに、それはやはり夢が手掛りとなつたのだ。その夢に於いて、患者は警察の審問所の前に立つてゐて、何か性

的不始末のために叱られてゐた。どうやら街頭で賣淫したゝめに、こゝへ投り込まれたやうな感じであつた。審問の巡査は親切さうな人であつたが、審問臺の上に立つてゐて、別に助けようともしなかつた。こゝに我々は、彼女の幼時の、母親に叱られたのとそのまゝの場面を見るのである。

この場面に於ける母親の詰責以來、彼女は自慰を廢止し、それと共に永い間、性感を抑壓してゐた。同時に彼女は母への憎惡をも抑壓し、これを現實生活に於いて漏すやうなことはなかつた。

母親の出て來るこの幼兒期場面が、この患者の後年の心的態度を決定する外傷となつたと、私は考へるものではない。たゞその事件が、彼女の性生活全體の特徴を集中する事になつたのみであつた。自慰を禁止された事に對する母親への批難は、この場面の事件がなくても起きたであらう。母への憎惡は彼女の幼兒期の他の事件に際しても表れてをる。この事實は彼女のサディスティックな素質から見て、如何にも相應しい。彼女を母親の難詰から庇護しなかつた父親への批難に就いても同じことが云へる。併しこの場面は、後年の出來事の原型となつた。

その時以來、總て性的亢奮は母の禁止と聯想され、最も激しい攻撃的衝動を母親に對して感じた。併しかゝる衝動は彼女の性格全體と相反矛盾するものがあつた。これ等の憎惡衝動への反動は母親への強き罪障感の形をとりそのために憎惡は變してリビドーの上ではマゾヒスティックな態度をとらしめることになつた。彼女がそれまで同性との戀愛問題を起さなかつたのは、そのためである。彼女が實際に恐れてゐたのは、母親へのマゾヒスティックな愛着であつた。彼女が雇女を恐れたことも、夫が正當な庇護を與へないと云つて非難したのも、みな右の事から說明がつく。

分析の進み行くまゝに、極端な男性器嫉妬が現れて來たが、それが患者の性格の中心點ではなかつた。彼女の性格を見ても、男に對する態度を見ても、彼女が「男性コムプレクス」を持つてゐる型の女でないことは明かであつた。とは云へ、時には男性的な面が見えることもあつた。分析して見て分つたのであるが、幼兒時代に於いても（さきに述べた運命的な經驗以前）、思春期に於いても、男性的傾向の能動性が著しく現れた。殊に思春期に於いて、彼女は同じ位の年齡や同じ位の社會的階級の女には珍しいほどの興味を外物に示した。彼女はこの男性的な要素を美事に昇華することが出來た。さうしてこれは彼女の生涯の間、昇華されたまゝに殘存してゐた。併しそれの相當量は、彼女の心的經濟の重荷として、劣

等感として、殘つてゐたことは夢や或る種の症候の中に明かに見られた。

患者の男性傾向が表れるやうになつたのは、彼女の同性愛のためであると考へたい誘惑を私は非常に感じてゐた。ところが、こゝまで來て、彼女は私の分析的期待を一向に滿してくれなかつた。そこで私は一つの問題に逢着し、それの解決はずつと後年に至るまで着かなかつた。

以上の分析を八ケ月掛つて行つた後に、患者の父親が分析劇の舞臺上に現れて來た。その登場と共に、患者のエディポス・コムプレクスも再燃して、父が患者を能動的に援助しないとの批難がまづ勃發して來た。患者の母への憎惡とリビドー的慾望とはそのエディポス・コムプレクスよりは遙かに古いといふことを、分析者ドイチは當時既に觀破してゐたと云つてゐる。

父親が現れたので、父親との關係を再燃させ、是正することに依つて、患者のリビドー狀態を好轉させ、その將來を開發することが出來るかも知れないとの希望を、この時分析者は持つた。で、ドイチは患者を父親型の男分析者の許に送つた。不幸にしてその計畫はうまく當らず、轉嫁は尊敬と同情との上に出でず、暫時にして患者は分析受療を中斷して了つた。一年程經つてドイチはその患者に會つたが、この時彼女は見違へるやうに華やかな、輝かしい女になつてゐた。沈鬱の發作は全然消失したと患者は云つてゐた。死の願望も今や全く遠のいて了つたやうに思はれた。が、遂に患者は或る同性者と性的關係を結ぶことに依り、何等の禁制なき、異常な浄福を覺えるやうになつた。彼女は非常に知識的で、分析學にも相當通曉してゐたので、自分と性的相手との關係は完全に意識的な母子關係であると、分析者に話した。或る時は一方が、或時は他方が、母親の位置に立つた。云はば、相互にその持役を交換するお芝居のやうであつた。その同性愛的抱擁に於いて、殊に口唇帶域及び外部性器に於いて彼等は滿足を得た。この關係に於いては、「男性的・女性的」の役割上の反對があるらしくはなく、たゞ能動と受動との相反が本質的な役割を演じた。どうやらその關係に於いて、彼等は互に二役を果す事の出來るためにそのやうな幸福が得られてゐるやうに、分析者には見えた。

分析の結果は明瞭であつた。分析中の轉嫁關係に於いて、あれほど明瞭に現れた一切の感情は今や女分析者から離れて、別の婦人たちへと轉向した。分析者に於いて遂げ得なかつた願望は、今やこれ等の新しい對象に於いて滿すことが出來た。婦人分析者への敵意を克服することに依り、患者はその不安をも克服することが出來、か

くて彼女の神經症候を生じたこれ等二感情(憎惡と不安)の代りに、彼女は或る婦人へと積極的なリビドー關係を構成し得るやうになつたのであることは明かだ。併しまづ、彼女の母代償に對する幼兒的な羞恥は、性的滿足を得ることに依つて一掃されねばならなかつた。分析處置を以てしても、その母定着を一層よく解消させること――つまり同性愛を棄てゝ異性愛へと向はせること――は出來なかつた。

こゝで一寸附言しておくが、患者は分析受療以來、自殺の試みはしなくなつたが、雇女等に對して羞恥を感ずると云ふ昔の病癖は、近頃になつて復活して來た。分析者の推察では、そこに何か戀愛上の惱みがあつて、それが神經症的反應となつて表れてゐるのであらう。とにかく、以前のやうな沈鬱の發作だけは、最早全然なくなつて了つた。

最近數年に於いてドイチ女史は數人の婦人同性愛者を處置したが、右に述べた例に於けるよりはそれ等の患者の同性愛ぶりはもつと顯著であつたが、いよ〳〵分析と云ふ段取になつて逃出すものが多く、徹底的研究の機會が比較的少なかつたことを、遺憾としてゐる。併し總ての婦人同性愛者等はその性的對象との關係が母子關係であつて、その事實を彼等は多少とも意識的に承認してゐたさうであつた。あらゆる場合に於いて、その性的滿足の形式は同じであつた。――ぴつたり互に抱き合つて寢ること、相手の乳頭を吸ふこと、相互にその性器を、殊に肛門を自慰し合ふこと、相手の陰核を吸つたり、相互に激しくこすり合つたりすること。こゝでは相互の二重配役が、特に明白であると云はねばならぬ。

或る患者はその二重配役を、二人の對象に配分してゐた。その一人はまだほんのおぼこの少女で、これはつまり子供の役割を仰せつかる方である。今一人はずつと年長の、能動的な、權威ある婦人で、この婦人に對しては患者自身が今度は子供の役割を承るのである。後者の關係は大抵は次のやうにして始められる。――患者は自分の仕事に於いては、なか〳〵野心的であり、能動的であるのだが、他の婦人と醇化せられた友情關係に入る。暫くの間は、彼女は殆どそれと見分けられないほどの競爭者的態度をとつてゐるが、それは分析に依つて纔かに意識化される。やがて明かに神經症的な樣子で、自分の仕事に於いて負けて來て、その友達に對して從屬的地位に下る。例へば、彼等が二人で何か共著を出すと云ふ場合に、二人の內では患者の方が明かにその才能に於いて優秀であるに拘らず、自分の方が祕書か助手のやうな役割に滿足する。彼女等がそのやうな共同の仕事に從つてゐ

る間に、性的な交情が生じて來たとなると、能動的な誘惑者の役割は常に他の婦人の方で受持つわけである。

この第二の患者の生活史と分析結果とをもドイチは相當細かく報告してゐるが、我々は只今それ等を全部紹介してゐる餘裕はないから、直ちに婦人同性愛一般の理論的考察に入るであらう。

男根期を過ぎた少女が、その男性的能動性を抑壓して受動性へと逃込み、而も他方に於いて男性器への自分の願望が到底協はぬことを自ら承知してゐる（そのくせ、父に依つて子供を持ちたいとの願望を現實的に諦めることは出來ない）時には、如何なる事が生ずるであらうか？到底遂げらるべくもない男性器願望のナルチスティッシュな刺戟を喪失し、拒否（父に依つて子供を得たいとの願望の）と失望と恐怖のために父に嫌ばれてゐるとの感情を持つてゐるところの女兒——從つてそのリビドーを纒綿するところがなく、而もそれを昇華させるにはまだ幼過ぎる女兒——の心理狀態を想像して御覽なさい。このやうな立場に於いて、彼女はどうするであらうか。彼女も亦、あらゆる動物が危險の立場に於いて爲すが如くに振舞ふであらう。彼女は自分が嘗て庇護を受けてゐが身の安全を覺えた場所、卽ち母へと遁れて行くであらう。彼女は母からも拒否を受けてゐることは（フロイド「女性論」參照）事實である。併し母親は拒否を與へてはゐるが、それ以前に嘗て滿足を與へた者であるからだ。

右はエディポス前期の母愛着の滿足とその（やがてその後に來る）拒否に就いての論であるが、次に男根期に入つても子供等に多少の男根器的滿足を供するものは母親である。この滿足はやがて後には同じ母に依つて拒否せられると共に、禁斷せられる。母親自身の幼兒的自慰が甚だしければ甚しいほど、それと同じ程度に、その母親の子供に對する自慰の禁斷は峻嚴であることが、多數の母親の分析に依つて明かとなつてゐる。一度自分から進んでその美果の味を敎へ、誘惑しておきながら、後にはそれを拒否し禁斷する、その不信なる態度に對して子供は反感と敵意とを覺えるのである。然るに他方、女兒はその男根的自慰を覺えると共に、自分の性器の「解剖的」缺陷に就いての發見をなし、非常な感動を經驗する。

男性器缺如の責めは母親に嫁せられることは、既にフロイドの說いてゐる通りである。かくて男根期のサディスムスは母親に向けられるやうになり、かくて對象の父への轉換の契機となるやうである。父への轉換は受動的マゾヒスムスの態度となるが、女兒の攻擊衝動の全部がこの態度となるのではない。攻擊衝動はやがて拒否する父親にも向けられると共に、他方、エディポス的立場に

於ける競爭者としての母親に對してもこの攻擊衝動が分配されてある。攻擊衝動の力は男根期の能動力に據るものであらう。それのみならず、女兒のマゾヒスト的傾向は、それが攻擊慾の源泉から養はれたものであればあるほど、愈々その激しさは甚だしい。去勢コムプレクスの特に強い婦人患者を分析して見ると、彼等にとつて受動的態度が如何に危險であるかが我々に分る。その母親に對する復讐慾の如何に猛烈であり、如何に殺伐であるかゞ我々に分る。殊に、母親が懷妊してをり、或は分娩した時にそれが顯著である。この態度のために、マゾヒスムスの中に道德的要素が這入つて來る。この要素の力は攻擊的傾向の力と正比例する。卽ちこの期に於ける女兒は、三つの危險に直面してゐる。一、父に依つて願望を充足して貰はうとの期待から來るマゾヒスト的リビドーの危險。二、新しい對象たる父からも、同樣に拒否されさうな危險。三、男性器缺如の發見のために自我のナルチスムスが被る危險。

これ等三大危險に直面して、リビドーはその以前の對象へと逆轉する。以前に母親への愛着の强かつたものほど、この逆轉は容易であり迅速である。それは、云はゞ嘗ての經驗への復歸である。と云ふ意味は、以前の幼兒的、アムビファレント的葛藤へ以て行つて、エディポス・コムプレクスの競爭慾からの攻擊衝動と、罪障感とが加はつてゐると云ふのである。

母への逆轉がリビドー經濟上からどう云ふ利益があるかと云ふと、それは罪障感を解放するにある。併しそれの最大の機能は、女兒が失ひさうな對象をそれに依つて庇護されると云ふことである。「お父さんも自分を相手にはしてくれず、さりとて自分で自分を愛するとしてもいろ／＼の危い打擊が加へられるとすれば、お母さんより外に自分を愛してくれるものはないのだ」と云ふのがこの立場に於ける女兒の無意識の聲である。

さて女兒が同性愛に轉向する決定點は奈邊にあるかの問題を考へねばならぬ。女兒に於いては男兒に於いてよりも、その幼兒性感の成人性感へと發達すること遲く、且つ根本的でない。愛對象の轉換は徐々に行はれ、思春期に至るまで殆ど不變である。性的潜在期に於ては、女兒は男兒より母への依屬は完全である。これは多分、女兒がその對象を失ふことを恐れる心が强いためであらう。また女兒に於いては、そのリビドー昇華の過程が多く對象關係に於いてなされるに對し、男兒に於いては寧ろ外界への能動的態度に於いてなされるからであらう。何れにせよ、ドイチ自身の分析研究の結果に依ると、後年に於いて同性愛者となるものは、既に極幼兒期に於いてその基礎が据ゑられてあることが明かであると。(完)

心理學（カェサリン・マンスフィールド作）

"Psychology"(1920)—Katherine Mansfield

岩倉具榮譯

彼女は戸を開けて、彼がそこに立つてゐるのを見た時今迄にない喜びを覺えた。そして男も亦、彼女について書齋に入つた時に、こゝへ來たことを大變幸福に思つてゐる樣であづた。

『忙しいんぢやないですか?』

『いゝえ、丁度今お茶を飲まうとしてゐた所ですの。』

『ぢやア、誰かを待つてゐたのぢやない?』

『いゝえ、誰も——。』

『さう! それはよかつた。』

彼はその外套と帽子とをしづかに、ぐづ〳〵し乍ら傍においた。それは宛かも彼が凡ゆることに割くことの出來る充分の時間を持つてゐるかの樣で、又外套と帽子とに永久の別れを告げてゐる樣であつた。それから爐邊に來て盛んに燃え上つてゐる焰に手を差しのべた。

一瞬間、彼等二人はその燃え上る光の中に默つて立つてゐた。けれども、云はゞ彼等は、互のほゝえむ唇の上に甘い感激の挨拶を味つてゐたのである。彼等の心は祕かにそれ〴〵さゝやいてゐた。

『何も喋舌るには當らないさ。これで充分ぢやないか。』

『充分すぎる。私はこの瞬間迄、この事を氣付かなかつた。』

『あなたと一緒にゐることが、どんなにいゝことだらう。』

『こんなにいゝ……。』

『それは充分すぎる。』

けれども突然彼はふり向いて彼女を見た。すると彼女は急いで行かうとした。

『煙草が要るでせう? 湯沸しをかけませうね。お茶は

欲しくありませんの？』

『いや、僕はほしくありません。』

『それでは、私が飲みますわ。』

『おゝ、あなたはね』彼はアメリカ風のクッションをポン／＼と叩いて、長椅子に身を投げた。『あなたは茶ばかり飲んで、まるで支那人だね。』

『えゝさうですわ』彼女は笑つた。『私は丈夫な男がお酒をほしがる樣に、お茶がほしいのです。』

　彼女は廣いオレンヂ色の笠のあるランプに火をつけ、カーテンを引いてからお茶のテーブルを引き寄せた。二羽の小鳥が湯沸しの中で歌つてゐる樣であつた。焰はひらめいた。彼はその膝を抱いて腰掛けてゐた。このお茶を飲むといふ仕事は嬉しいことであつた。そして彼女は始終、お美味い物を食べてゐた。――小さなピリッとするサンドウィッチ、短くて甘いあめんどうの指、それからラム酒の味がする黑い贅澤なお菓子などを。――が、その間二人の氣持は杜絕えてゐた。彼は早く濟ませてくれゝばよいと思つてゐた。テーブルはどけられ、彼等の二つの椅子は明りに向つて引き寄せられた、すると彼はそのパイプを取出してそれを詰めて煙草を雁首にきつく壓し込め乍ら云つた『僕はあなたがこの間云つたことについて考へてゐるのです。で、僕にはかう思はれるのだが……。』

　さうだ、それは彼が待ち望んだことであり、又彼女の待ち望んだことでもあつた。さうだ、彼女が熱く乾いた茶瓶を燃えるアルコールランプの火の上にかざして振つた時に、彼女は別の二人を、即ち後にもたれてクッションの上に安樂にしてゐる彼と、靑い外被の臂掛椅子に蝸牛の樣に身體を縮めてゐる彼女とを見た。その繪は大變明瞭であり微細であつて、宛もその靑い茶瓶の蓋に描いてある樣であつた。それでも、彼女は急ぐことは出來なかつた。彼女は殆ど『少し待つて頂戴』と、聲を出して云ひさうであつた。彼女は靜かになる餘裕を持たねばならなかつた。彼女はこんなにも生々と一緒に生活してゐる之等見慣れたもの凡てから逃れるには、時間が必要であつた。何故なら、彼女の身の周りの凡て之等の愉快なものは、彼女の一部分――彼女の子孫――であつた。そしてそれ等のものもそのことをよく知つてゐて、いつも彼女の注意を占領してゐなければ承知しなかつた。けれども今やそれ等のものも行つて了はねばならなかつた。それ等は一掃され、逐ひ拂はれ――子供達の樣に暗い階段を送られて寢床に押込められ、眠りにつく樣に命ぜられねばならなかつた。――即座に――一言の口答へも許されずに！

何故なら、彼等の友情の特別に强い感動的の性質は、彼等が完全に參つてゐる事に存在したからだ。何處か廣大な平原の眞中にある二つの明け放しの都市の樣に、彼等の二つの心はお互ひに開かれてゐた。で、彼は宛かも十分に武裝した征服者の樣に彼女の都城内に乘込むだりはしなかつた。彼女の方でも、花瓣の上をゆるやかに步く女王の樣に彼の城内に入込みはしなかつた。否、彼等は熱心な眞面目な旅行者で、そこに見られるものを了解し、又隱されてゐるものを發見するより外、餘念がなかつた。――彼としては彼女に全く忠實となり、彼女としては彼に全く誠實となることとの出來たこの異常な、絕對の機會を大切にすることの外、餘念はなかつた。

そして何よりのことに、彼等は二人とも、何等のくだらない感情的の葛藤なしに充分にその冒險を享樂し得るだけの年になつてゐたことであつた。もつと情熱的であつたら一切臺なしにして了つたかも知れなかつた。彼等はよくそれを知つて居た。その上凡てさう云ふ事柄は、彼等二人にとつて卒業濟みになつてゐた。――男は三十一、女は三十であつた。――彼等は經驗を積み、その經驗は大變豐富で變化に富んでゐた。併し今や收獲――收獲の時であつた。彼の小說は全く非常に大きな小說になるのではなかつたか? 又、彼女の戲曲も……。他の誰が、彼女の樣な本當のイギリス喜劇の巧妙さを持つてゐたらうか……。

注意深く彼女は菓子を厚い小片に切り、彼はその一片を取つた。

『まアあがつて御覽なさい、どんなにお美味しいか……。』彼女は賴むやうに云つた。『想像し乍ら食べて御覽なさい。出來れば目をつむつて一息に味つて頂戴。それは帽子商の鞄から出て來るやうなサンドウィッチぢやありませんのよ。――創生記にでも出てゐさうなお菓子ですの……かくて神「菓子あれ」と宣ひぬれば菓子ありき。又神はそをよしと見たまひぬ。とね。』

『そんなに云ふには及びませんよ』彼は云つた。『そんな必要はありませんよ。それは奇妙なことだが、僕はいつもこゝで食べるものを注意してゐるのです。他處で喰べるものにはそんなことはありません。僕はそれが非常に永い間の獨身生活と讀み乍ら食べる事から來てゐると思つてゐるのです。……正しく食物であるもの……その時そこにあるものを……その時そこにない……何かの喰べ物……と考へる習慣からです……』彼は笑つた。『驚きましたか。呆れたでせう……?』

『骨の髓まで……』と彼女は云つた。

『併し――まア聽いて下さい――』と、彼はコップを押

してやつて非常に早口に喋舌り始めた。『僕はまるで外的生活と云ふものを少しも持たなかつたのです。僕はもののの名前も少しも知りません。――樹木やさう云つた物の名前をね……。それから僕は場所とか、家具とか、人の顔付とか……にも全く無頓着であつたのです。部屋などは僕に取つては何處の部屋だつて同じです。――腰をおろしたり、話しをしたりする場所に過ぎないのです。――たゞ例外は。』と、彼はこゝまで來て急につまつて、不思議な素樸さで微笑しながら云つた。『たゞ例外は、この書齋です。』彼は自分の周りを見廻してから、彼女を見た。彼はハット思つたが、愉快さうに笑つた。彼は汽車の中で目を覺ますと、もう旅の目的地へ到着してゐたのでハツとした男の樣であつた。

『ところが、もう一つ奇妙なことがあるんです。僕は目を閉ぢさへすれば、この部屋が凡ゆる細部までありありと見えるのです。――凡ゆる細部までね……。今、僕はそのことを考へてゐるのです。――僕は以前にはこの事を少しも意識しなかつたのです。時々僕は遠くに居ながら心の中でこゝを訪れるのです。――あなたの赤い椅子の周りをさまよひ、黑いテーブルの上の果物の壺を見つめる。――そしてあそこに眠つてゐる少年の何となく可愛い頭を一寸輕く撫でるのです。』

彼はさう云ひ乍らその少年の方を見た。それはマンテルピースの隅に立つてゐた。その少年は頭を一方に傾しげ、唇をかすかに開き、宛も眠り乍ら何か甘美な音に聞入つてゐる樣であつた。……

『僕はあの少年が可愛いんですよ』彼はつぶやいた。それから彼等は二人とも暫く默つてゐた。

又もや沈默が彼等の間に生じた。少くとも彼等が會つて挨拶を交した後の滿足げな沈默の樣なものではなかつた。――今度のは『さて、こゝに吾々は亦一緒になつたが、吾々がこの前別れた時の處から進んではならないと云ふ理由はない。』と云ふ沈默であつた。その沈默は溫い、愉快な火と光との雰圍氣の中に保つておくことが出來た。小波が安易の岸邊にくだけるのを見守る面白さの爲にのみ何かをその中に投げることを、彼等は幾度しなかつたことであらう。けれどもこの見なれぬ池に、眠れる少年の頭が永久の眠りを落したので、小波は流れ去り、流れ去り、――限りなく遠くへ――深いきらめく暗黑の中へと流れ去つた。

やがて彼等は二人とも沈默を破つた。彼女は云つた、『さア火をおこさなくちや……』すると彼は云つた『僕は新しくやらうと思つてゐたのですが……。』彼等は二人とも逃げたのである。彼女は火をおこしてからテーブ

ルを押しやり、青い椅子を前の方へ引き寄せ、彼女は身體を縮めた。男は又クッションの中に身を横たへた。早く！ 早く！ 彼等は例の沈默がまた起きるのを止めねばならないのであつた。

『さう〳〵、私この間あなたが置いていらした本を讀みましたわ。』

『さうですか、どうでした？』

　彼等は始めた。そして凡てはいつもの樣であつた。併しいつものやうであつたらうか。彼等はその答へをほんの少し急ぎ過ぎ、手早くし過ぎ、お互ひに調子を合せ過ぎはしなかつたらうか。そこには本當に、他の場合を不思議によく模倣した以上のものがあつたであらうか。彼の心臟は鼓動した。彼女の頰は燃えた、そして馬鹿らしいことには、彼女は彼等が確かにどう云ふ位置にあるか、又、自分等がどうなりつゝあるかを見出すことが出來なかつた。彼女はふりかへつて見る暇はなかつた。そして丁度彼女がそれと氣付いた時に、沈默は再び始まつた。彼等はためらひ、震へ、くづおれ、默つてゐた。再び彼等は限りない疑問の暗さを意識した。再び彼等はその中に入つた。――二人の狩獵者は、火のそばによりかゝつてゐたが、突然向ふの藪から風のうなりと聲高な疑問の叫びとが聞えて來た。……

彼女は頭を上げた。『雨が降つてゐますわ。』と彼女はつぶやいた。彼女のその聲は、男が『僕はあの少年が可愛いゝ』と云つた時の聲と同じ樣であつた。

　さて何故彼等はそのまゝ氣持の成行きに任せて、どうなるかを見なかつたのであらうか。併し、否、さうでない。彼等は五里霧中ではあつたが、彼等の貴い友情が危險に瀕したことを感ずる程度には十分よく分つてゐたのだ。破滅するのは彼女の方であつて、彼等二人ではなかつた。――彼等はそこまで揃つては、行かなかつたであらう。

　彼は立上つて、パイプをたゝき出し、頭の髮に手をつゝこんで云つた。――『僕は近頃、未來の小說が心理的の小說になるかどうかをいろ〳〵考へてゐたんです。あなたは心理學が心理學として多少でも文學に關聯する所があつたと信じてゐますか。』

『あなたは、今日の若い作家達が――そんな連中てんで存在してもゐませんよ――精神分析學者の主張を簡短に飛び越さうとしさうだと云ふことを感じてゐられるといふわけなんですの？』

『えゝ、さうなんです。僕が思ふには、そのわけは、現代が賢明にも、自分の病氣であることを知り、その唯一の回復の機會はその症候の中に入つて行くこと――根元

的の研究を遂げること——それを追究し盡すこと——苦悶の根本に達しようとするにあるのを認めてゐるからなんですよ。』

『でもまあ』彼女は悲しげに云つた。『何といふ困つたことなんでせうね。』

『なアに、そんなことはありませんよ』彼は云つた。『だつて、さうぢやありませんか……』話はだん〴〵運んで行つた。そして今や彼等は本當にうまく行つた樣に思はれた。彼女は自分が相手をする間、彼を見るために椅子に歸つた。彼女の微笑はかう語るかのやうであつた。『吾々は打勝つたのです。』と。そして彼も自信ありげに笑みかへした『絕對的に打勝つた』と云ふかの如くに……。

けれどもその微笑は彼等を裏切つた。それは餘りに永く續き過ぎて、齒をむき出す程になつた。彼等は、二つの小さい操人形が齒をむき出して無用にはしやいでゐる樣な自分等を見た。

『吾々は何を話して居たのだらう』と彼は思つた。彼は全く參つて了ひ、殆ど、うなるばかりであつた。

『我々の樣子はどんな風だつたらうな』と彼女は思つた。そして彼を營々として眺めた。さう、營々と——。土地を開いて彼女自身驅けめぐり、こゝには樹を植ゑ、あそこには花咲く灌木をしつらへ、又こつちの池には一掬ひの鱗光美しい魚を入れると云ふ風に——。彼等は今度はたゞ茫然として默つてゐた。

時計は樂しげな可愛らしい六つの音を打つた、そして火はおだやかにひらめいてゐた。彼等は何といふ馬鹿者だつたらう——重苦しく、面白くもなく、大人ぶつて——いろ〳〵と心を飾り立てゝ……。

そして今、沈默は莊嚴な音樂の樣に彼等の心を捕へて了つた。それは苦惱であつた——彼女にとつてそれに耐ゑるのは苦惱であつだ。そして彼はやりきれないと思つた。——若しもその沈默が破られたなら、やりきれないと思つた。……而も彼は破らることを望んだ。言葉によつてゞはなく……。兎に角、彼等日常の腹立たしいお喋りによつてゞはなく……。彼等に取つてはお互ひに話しをするもう一つの方法があつた、そしてこの新しい方法で彼はつぶやき度かつた。『あなたもこの事を感じてゐますか。一體、あなたはそれを分つてゐますか』と……。

それにも拘らず、彼は自分乍ら驚いたことには、自分でかう云つてしまつた。『僕はもう行かねばならない。僕は六時にブランドに會ふことになつてゐる』と。

何といふ惡魔めが自分にこんなことを云はせたのだらう。彼女はとび上つた。——全く椅子からとび出した。さうして彼女の叫ぶのが聞えた。『ぢやア大急ぎで行か

なけりや駄目ですよ。あの人はとても時間がやかましいんですからね。そんならそうと何故あなたは前におつしやらなかつたのです?』

『あなたは隨分な人です。あなたは隨分な人です! 私惜しい事をしました!』彼女が彼に機嫌よく微笑みかけ乍ら帽子とステッキを渡した時に、彼女の内心はさう云つて居た。彼女はもう一言も云ふ時を彼に與へようとはしないで、廊下を走つて行つて大きな玄關の戸を開けた。

彼等はお互ひにこの樣にして、分れることが出來るだらうか。どうして出來よう。彼は踏段に立つてゐた。そして彼女は中から戸をおさへてゐた。もう雨は降つてゐなかつた。

『あなたは隨分な方です。——私を傷けました。』彼女の心は云つてゐた。『どうしてあなたは行かないのか。いや、行つてはいけない。居て下さい。いや——行つて了へ!』そこで、彼女は夜になつた外面を眺めた。

彼女は美しく降つて居る踏段や、キラ〳〵する常春藤で圍まれた暗い庭を見た。道の向ふ側には大きな裸の柳が見え、その上の方の廣々した空には星がキラめいてゐた。けれども勿論、彼は之等凡ての何ものをも見ようとはしなかつた。彼はそれ等凡てに超然としてゐた。彼は不思議な「精神的」幻覺を見て居た。

彼女は正しかつた。彼は全く何ものをも見なかつた。みぢめにも! 彼は得そこなつたのだ。今は、もうおそい。おそすぎたであらうか、そうだ、おそすぎた。冷いいやな風が一しきり庭に吹き込んだ。呪はしい人生! 彼は彼女が『さよなら』(au revoir) と云ふ聲を聞いた。そして戸はピシヤリとしまつた。

彼女は書齋に驅けもどつたが大分樣子が違つてゐた。彼女は腕を上げたり下したりし乍ら叫んだ『おゝ! おゝ! 何て馬鹿なんだらう! 何といふ愚かさだらう! 何て馬鹿なんだらう!』と。それから彼女は何にも考へないで敷蒲團に身を投げ出した。——怒りながらそこに身を横たへてゐた。凡てはおしまひだ。何がおしまひなのか。おゝ——何事かゞおしまひだ。そして彼女は二度と彼を見たくなかつた。——もう決して。永い永い時間(或ひは多分十分間)位がその眞黑な深淵の中に過ぎ去つた後、ベルが鋭い早い音をひゞかせた。それは彼であつた、勿論。そして彼女の方でも同樣に勿論、それに頓着などしないで、鳴らせるまゝにしておくべきであつた。が、彼女はやはり飛んで行つて見た。

戸口には年とつた獨身女が立つて居た。たゞ彼女を崇拜して(何のためだかとんと分らぬ)、やつて來てはベルを鳴らし、戸を開けるといつもかう云ふ哀れな女であつ

た。『御免下さい、玄關拂ひでも結構ですよ！』と。彼女は決してさうはしなかつた。大概、彼女は請じ入れて讃嘆の辭を云ふだけ云はせておき、そして少々土くさく見える花束を受取つた。――大層しとやかに、併し今日は……

『おや、大變殘念ですが』と彼女は云つた『只今一寸客が來て居るのです。私どもはある木版畫をやつてゐますのよ。今晩はずつと忙しいんですの。』

『いゝえ、そんなこと構ひませんですよ。そんなことちつとも構ひませんですよ。』と。善良な友は云つた。『私は丁度通りかゝりましたので、すみれの花をあなたに差上げようと思ひましてね。』彼女は、大きな古い傘の骨をまさぐつてゐた。『花はこゝにおきましたよ。こゝなら風に當らなくて丁度よう御座いますからね。さあこゝにおきましたよ。』小さなしをれた束を振り乍ら、彼女は云つた。

　一瞬の間、彼女はすみれの花を手に取らなかつた。けれども彼女が戸をおさへ乍ら丁度内側に立つてゐた時に思ひがけぬことが起つた。……再び彼女は美しい踏段を見、キラ〱する常春藤で圍まれた暗い庭や廣いキラめく空を見た。再び彼女は一つの疑問の樣であつたところの沈默を感じた。併し今度は、彼女はためらはなかつた。彼女は前に進み出て、大變やわらかく、又おだやかに、その限りない靜けさの池に小波を立てるのを恐れるかのやうに、彼女は腕をその友の身のまはりにかけた。

『おゝ』この感謝に全く恐れ入つて了つて、幸福な友はつぶやいた。『ほんのつまらないものなんですよ。極く一寸したやすものゝ花束なんですのよ。』

　けれども彼女がさう云つてゐた間に、彼女はいよ〱やさしくいよ〱美しく抱きかゝへられた。この樣な甘い永い抱擁にあつたので、哀れな友の心はフラ〱して襲へ聲で云ふ力もやつとだつた。『では、あなた樣、本當に餘んまり私のことを心にかけないで頂戴ね。』

『さようなら』若い方はかすかな聲で云つた。『またその中にいらつしやいね。』

『えゝ參りますとも。參りますとも。』

　今度は彼女はゆつくりと書齋に歩いてかへり、そして半ば目を閉ぢて部屋の中央に立ち乍ら、宛かも彼女は子供らしい眠りからさめた樣に氣輕く氣安く感した。息を吸ふと云ふ行ひさへも喜びであつた。

　敷蒲團は大變だらしなかつた。クッションはみんな『恐ろしい山の樣』――と云ふ言葉を彼女は用ゐた――であつた。彼女はそれを片づけてから、書き物のテーブルの所へ行つた。

『私は心理小説について話合つたことを考へてゐたのだつた。』彼女は突然云つた。『それは本當に興味の深いことだ。』‥‥等々と、彼女は考へて行つた。

しまひに彼女はかう書いた。『さようなら。又その中にいらつしやいね。』（完）

現代の英國女流心理派作家に就いて

安藤一郎

過去にわたる英文學史に於いて、閨秀作家として大きい業蹟を印してゐる人々を想起するならば、小説の方面では、まづ、ヂェイン・オースティン（Jane Austen, 1775—1817）とヂョーヂ・エリオット（George Eliot, 1819—80）の二人に指を屈し、更に日本へもひろく紹介されてゐる『ヂェイン・エア』"*Jane Eyre*" と『嵐が丘』"*Wuthering Heights*" の名作をもつて夫々立派な足跡を遺したシャアロット（Charlotte Brontë, 1816—55）とエミリ（Emily Brontë, 1818—48）が記憶に昇つてくるであらう。又もう少し専門的に細かくなるが、浪漫派時代の魁けをなして『森林物語』"*The Romance of the Forest*" を書いたアン・ラッドクリフ（Ann Radcliffe, 1764—1823）があり、もつと近世になつて、ブロンテ一族と同時代に並んだエリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810—1865）の如きは、夙くも勞働問題を取り扱つた『メァリ・バートン』"*Mary Barton*" のやうな作品をものしてゐる。元來イギリスには、かく女流小説の傳統が流れて居り、ラッドクリフとかギャスケルに徴してみるときも、彼等が新しい時代精神を感受するに頗る鋭敏なことを忘れてはならぬ。そして現代に輩出した婦人作家たちも、確かにこれら同性の先輩が照していつた炬火の榮光——殊にオースティンとブロンテの——を強く意識してスタートしたものに相違ない。

現代閨秀作家のピカ一と目されるヴァジニア・ウルフ

(Virginia Woolf, 1882—) に『わがひとりの部屋』"A Room of One's Own" と題する、辛辣な詭辯と萬丈の紅い氣焰に滿ちたエッセイがあつて、その中で彼女は婦人と小說の問題を論じ、男性の家長政治に隷屬して婦人の生活が窮乏に追ひつめられてゐる間は、女性にあつても優れた文學が生れる筈がなく、たとへば沙翁に妹があつて小說や演劇などに趣味を有したとしても、結局周圍に容れられず自殺して了つたであらうと言ひ、オースティンは普通の茶ノ間(シッティング・ルーム)でペンを執つてゐた故に、誰か入つてこないうちに、自分の原稿を吸取紙などで匿さなくてはならなかつたし、又シャアロット・ブロンテにしてさへ、靴下を繕つたりするやうな家庭の瑣事に係はらざるを得なかつたが爲、人生經驗は頗る狹いのだから、女性が男性に劣らぬ作品を創るのには、少くも一年五百磅の收入とひとりの獨立した部屋をもたねば駄目だ、と主張する。

所が果してウルフの要求するやうな經濟的餘裕が出來たかどうかは分らないが、歐洲大戰前後から、英國に一群の女流作家が相次いで現はれたのである——これはたゞにこの時代があらゆる意味に於いての過渡期になつてゐる許りでなく、ヴィクトリア朝の狹苦しいブルジョワ的ピュリタニズムに重壓された因襲から彼等が漸く脫すると共に、あらたに婦人參政權を獲得して政治意識に目覺め、社會的に一段と地位が高くなつて、而もかういふ解放と進展の道程に必ず起るべき煩悶・不安・期待といつた內省的な經驗を浴びた爲だらうと思ふ。就中、戰後急激に動搖變化してきた社會機構にあつて、家族制度の崩壞、アメリカ的文化に伴ふ新時代の職業、活潑な國際主義などの現象に刺激されて、婦人の視野と教養が益々向上して、近代の自由な世界に伸びのびと呼吸することが出來るやうになつた過程は、全く想像するに難くない。そこで彼等のうちから、このひとゝきに對した複雜な思惟を、敢然と文學に盛る女流作家が殆んど時を接して續々と出てきた。

いま、こゝに私の念頭に浮んでくる若干の名前を擧げてみよう——やゝ古いところで、心靈學的材料に依る短篇で名高いメイ・シンクレァ (May Sinclair)、シンクレァのやうにフェミニストであり、諷刺的傾向を多分にもつロウズ・マコーリ (Rose Macaulay)、チエホフ的な作風から出て、英國に稀らしく垢拔けした澄明珠玉の如き佳品を殘して、年若く花散つたキャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield)、サセックスの地方色のみを背景として連作するのでも知られてゐるシェイラ・ケイ=スミ

ス（Sheila Kaye-Smith）、ミリアム・ヘンダスンといふ女主人公ひとりの人生巡歴を、その孤獨な自己意識に映して描寫し、既に十巻に達する叢書（シーリーズ）を成したドロシー・リチャドスン（Dorothy Richardson）、十八世紀文學の研究で著名だつたレズリ・スティーヴンの娘といふ風に、名門に誕れて、特異な作品を幾つか發表して、ヂョイスの影響を受けながらもみづから信念を明かにして常にアバルガンドな形式を開拓してきた、先に一寸觸れたところのヴァジニア・ウルフ、ウルフと親交がある、貴族出の詩人で『エドワド朝の人々』"*The Edwardians*" で一躍名聲を馳せた、ヴィクトリア・サックヴィル＝ウェスト（Victoria Sackvill-West）、アブノーマルな同性愛を大膽に取材して一時センセイションを惹き起した『孤獨の泉』"*The Well of Loneliness*" 以後、なほ頻りに長篇を發表してゐるラッドクリフ・ホール（Rabcliffe Hall）、男勝りの頭腦をもつて、フロイディズムを採り入れた小說を書いたり、又强靭な論調で『ユリシーズ』を攻擊したりするリベッカ・ウェスト（Redecca West）、『離婚法案』"*A Bill of Divorce*" とか『ウィル・シェイクスピア』"*Will Shakespeare*" 等の戲曲で評判をとる一方、多くの長篇をものしてゐるかのクレメンス・デイン（Clemence Dane）、その他、ロウマ・ウィルスン（Romer Wilson）やイー・エム・デラフィールド（E. M. Delafield）やステラ・ベンスン（Stella Benson）などがあり、尙大衆文學に動いてゐる人々も尠からず、眞に多孃濟々といつた狀態である。

これらの一人一人に詳しく言及する紙數は到底ないから、最近に於ける英國文壇の主流に最も重大な關係を有する三人の女流作家に就いて、極めて簡單ながら述べてみたい。——

キャサリン・マンスフィールド

ウルフに據れば、人間性格の描寫は一九一〇年頃から變化したといふのだが、確かに英國の文學はサミュエル・バトラ（Samuel Butler, 1835—1902）の後を承けて、バーナッド・ショオの戲曲が數多く出るに及び、人間再檢の氣運が生じてきたことは誰も認めるところである。モダニズムの新心理文學もかゝる轉期から進展したのであらうが、ベルグソンの哲學とか、二十世紀初頭に至つて愈々集大成され始め、遂に英譯で紹介されるやうになつたフロイド派精神分析學とかゞ、小說に於ける心理解剖の系統的背景をなしたと言へる。ヂョイスが醫學を収める目的で巴里大學に籍を置いたことは注意すべき事柄で、フリッツ・ウィテルス（Fritz Wittels）は、フロイド

が一八八五年頃こゝに赴いたとき、彼の時代に最も有名な神經病學者シャルコーがヒステリーの講義をしたと書いてゐる點から察すると、ヂョイスがいつた折も、何かこの方面に關して興味を魁くやうな研究材料が未だ殘つてゐたんではないかとおもはれる。『若き日の自畫像』"*A Portrait of the Artist as a Yanng man*"は一九一四年に完成されたのだが、その一部分は同年から翌年にかけて「エゴイスト」誌上に發表されてゐる。併し實際に纒められて、世に出たのはそれより二年後であるから彼が柔軟で粘り强いスタイルをもつてスポット・ライトをあてた「意識の流れ」といつた世界に、文壇一般の注視が向けられたのは、もはや一九二〇年に近附いてからだと考へられる。ヂョイスの影響を受けても受けないにもしろ、かゝる傾向下にある重要な作品は、略々その頃に現はれてきたのだ。

それ故一九二三年にフォンテンブローで、三十四歳の女盛りで死んだキャサリン・マンスフィールドはヂョイス的文學の圏外にあるとはいへ、早くもさうしたムーヴメントへの轉移に、無意識的に先驅したのであるまいか。一九二〇年に出た短篇集『幸福』"*Bliss*"中の一つなる「心理學」'*Psychology*'は、二人の男女に、心理學と文學の關係を論じさせながら、而も兩者の內面的交流を反映させ、特に女性のゼラチン膜みたいに震へ易い氣持の動揺を瞬間瞬間に寫し出させた面白いもので、これを見ると、明かに當時の青年作家がもつてゐた意慾を、彼女は諒解し得たことが分る。が、マンスフィールドの試みは心理解剖に接してゐるもの〻、その出發はもつと別な基點からだつたのである。彼女は、モウパッサンとかチエホフの築き上げた短篇形式に沿うて最初の一歩を踏み入れて、現實をみつめる靜觀的な狙ひを次第に深めると共に、少女めいた感傷を脱ぎ棄てゝ、更に新しいフォルムの發見にもがきながら、あの澄徹した文體をみがき出したのであつた——彼女は何よりも先に、對象の事實を素直に正しく享けて、これが微妙な感受性に投ずる波紋を、平衡のある落着いたコンポジションに整へようとする。彼女のあとに現はれた新心理主義の作家に於ける如く、記憶とか聯想とかを重んじてゐるけれども、ウルフやリチャドスンのやうに、單にそれらだけ追究して、一つの輪廓をなすとはなく、さういふものを全體に對する模様の或る部分として挿入するやうだ。併し、後期の未完成な作品などには、獨白（モノロウグ）だけで一篇に纒めようとしてゐる痕跡があり、又作中の人物が抱いてゐる心理を、あまり說明することなく、作者自身の共感を極めて簡潔な而も突如とした數語で嵌めこむといつた手法を

早くから使つてゐる。マンスフィールドの文章が平明のやうで、所々分り難いのはかゝる點にある。

マンスフィールドを讀む樂しさは、何といつても、彼女の美しい眞劍味——つまり悲哀も歡喜と同等量のうるはしい光澤に輝いてゐる處しやかな華麗さで、そこに芳香ある藝術的匂ひが漂うてゐる。そして、たとへ規模は小さくとも、水々しいリズムをもつ散文は、眩しい心象と比喩を一行一行織り交ぜながら、凡てが終つて了つたときも、何か大きい、無窮に繋がるひろがりを暗示させる。子供や少女の世界を取材するものにいゝ作品があり「人形の家」'*The Doll's House*' や「園遊會」'*The Garden Party*,などはその代表と見るべく、ニュージー・ランドで過した幼時の經驗を透明に再現したものが多く、傑作として知られてゐる「入江のほとり」'*At the Bay*' など第一に擧げられるべきだらう。その他、「一杯の茶」'*A Cup of Tea*' とか「風が吹く」'*The Wind Lloews*' とかの人生味豐かなスケッチ風の小品は、「序曲」'*Prelude*' や「幸福」'*Bliss*' の如く、やゝ長いものと共に、永く人々に親しみ愛されると思ふ。ヂョイス、ウルフ、リチャドスンなどがあのやうに幅廣い仕事をしてきた今日に再びマンスフィールドの功績が顧みられてゐる際、彼女の早世は眞に惜しき極みであり、最近カサミアン教授は彼女の文學的眞價を强調してゐる。かつての彼女の夫であつたミッドルトン・マリ（Middleton Murry）の盡力で、死後出版されたものをも併せて、短篇集は六卷に及び、詩集、批評、日記、書簡も纏められ、マンスフィールド研究家のマンツ女史（R. F. Mantz）とマリ共著の『キャサリン・マンスフィールド傳』'*The Life of Katherine Mansfield*" も昨秋に刊行された。

ヴァジニア・ウルフ

ヂョイスが『若き日の自畫像』で試みた『意識の流れ』、又それを發展せしめて、更に『ユリシーズ』の構成に驚くべき精密な探索をひろげた「內面の獨白」——この劃期的な文學方法から影響を反映したり、又略々類似したテクニックを用ひたりして、心理分析的作家の位置を占める二人の重要な女性がある。卽ちヴァジニア・ウルフとドロシー・リチャドスンだ。いつたい、かういふやうな領域に婦人作家が根强い制作を進めていつたことは興味ある問題で、マンスフィールドに於ける如く、女性本來のデリカシーを備へた銳敏な感受性に原因があることは勿論だが、前時代の傳統と因襲に束縛されてきた結果、堅い遺殼の奥で極端に內省的な習性を、彼等の

精神に植ゑつけてゐたことも看過出來ない——更に、既述のやうな解放の過渡期に面して、反抗と批評の自己意識がハッキリと生長するに至つたからであらう。これはウルフのやうに、文明批評家的色彩の濃い作家が辿つていつた跡を見れば、おのづから首肯出來ることゝ思ふ。

ウルフはこの十年間に、實に花々しい活躍を續けてゐる。最初に出した二つの作品『航海』"*The Voyage Out*"(1915)と『夜と晝』"*Night and Day*"(1919)は未だ問題とすべき要素に乏しい——殊に後者はヂェイン・オースティンの投影を受けて、見事に失敗した。が、『夜と晝』には、婦人參政權運動へ殉じようと決意する女性が點ぜられてゐることは、ウルフの時代性を證するものだ。彼女が新しい形式へ一轉したのは、『月曜日か火曜日か』"*Monday or Tuesday*"(1921)といふ短篇集に於いてゞ、こゝに收められた習作的素描はどこかマンスフィールドに通うた特性をもつて居り、マンスフィールドと同じくチエホフ風な構圖を作つてゐる——マンスフィールドがこの中の一篇で、先に發表された「キュー植物園」'*Kew Gardens*' にかなり好意ある批評を「アシニーァム」誌(1919)でやつてゐることは面白い。一九二四年に出した『ベニット氏とブラウン夫人』"*Mr. Bennett and Mrs. Brown*" と題するエッセイで、彼女は新しい文學への昂然たる意氣込みを示して、老大家のゴルズウァージー、ウェルズ、ベニット等に挑戰し、又『普通讀者』"*The Common Reader*"(1925)といふ敎養豐かなエッセイ集中の名高い一文「近代小說論」'*Modern Fiction*' で、ゴルズウァージー、ベニットなどの作品は餘りに物質的(マテイリアル)だと難じ、これからの小說はもつと精神的(スピリチユアル)でなければならぬことに及んで、その意味からヂョイスに尊敬を拂つてゐる——こゝからよく引かれる彼女の言葉：：：「普通の日の普通の心を暫らく調べてみよ。心は無數の印象を受けるのだ——些細の、風變りな、消え易い、或ひは鋼(はがね)の鋭さをもつて彫まれた印象を。それらはあらゆる方面から來る、數限りない微粒子の不斷な雨となつて降り頻る。そして落ちかゝるとき、月曜日か火曜日かの生活となつて現はれるとき、アクセントは以前と異つて置かれる。重要な瞬間はこゝではなくかしこにある。だから作家が自由人で奴隷でないならば、彼が書かなくてはならぬものでなく、自分の好むところを書くことが出來れば又自分の作品を傳統にでなく、感情に基礎づけることが出來れば、在來の型に於けるプロットも喜劇も悲劇も大團圓もなく、多分たつた一つの釦でさへボンド街の洋服屋がさうしたいと思ふやうには附けられてゐないだらう。」は、小說が精神的領域へ解體すべきこと

を宣言してゐるが、更に私は『わがひとりの部屋』に見出される文句も想起する――「事實は、ミスタ・ゴルズウァージーにしてもミスタ・キップリングにしても、自分の中に女性の閃きを少しも持たない。それでかく彼等の特質が或る婦人にとつて、いやこれを一般の婦人と考へても、ぎごちなく、未熟におもはれる。彼等は暗示的な力を缺いてゐる。そして作品が暗示的な力を缺くときには、いかにそれが精神の表皮を衝いても、內部へ滲透することは出來ぬ。」と言ふ。このやうにウルフは、心理の世界から抽出する新しいロマンの構成に着手して、次々に、『ヂェイコブの部屋』"*Jacob's Room*" (1922)、『ダロウェイ夫人』"*Mrs Dalloway*" (1925)、『燈臺へ』"*To the Lighthouse*" (1927)、『波』"*The Waves*" (1931)といつた特種な作品を書いた。

『ヂェイコブの部屋』には『若き日の自畫像』、『ダロウェイ夫人』には『ユリシーズ』、夫々彼女に及ぼしたヂョイスの影響が窺はれる――卽ち、前者は、映畫的手法をとつて年代順に幼時から廿歳過ぎまでの短かい生涯を、流動する感覺的印象を點綴して描き、後者は六月の中旬、ロンドンに住む代議士夫人の朝から夜までを內面生活のひろがりに掘り下げて、環境への關係と五十二歳にわたる經驗を微細に張りわたしてゐる。ヂョイスを追ひながら、『ダロウェイ夫人』に至つて、彼女は遂に獨立した方向を見出してゐる故に、新しいテクニックたる「意識の流れ」も、こゝに通俗的な意味で著しくモダンな衣裳を着けられたと言へよう。更に『燈臺へ』をなすに及んで、單に技法上のみでなく、作者は一先づ頂點に達して、人生の悲愁といふものを濃淡ある幻像に溶かしこんで、ひとつの精神的理念を具現したやうである。『波』ではもつと野心的になつて、これまで用ひてきた「意識の流れ」を純然たる「內面の獨白」に更へ、男女三人宛のグループが老年期まで歩んでゆく樣々な盛衰を各々の獨白許り並置した相互間の交錯に依つて、各々の性格を浮き彫りしようとする。併しこれはさう成功してゐないやうだ。たゞ形式に、戲曲的な要素を附加して、一日の段々に移り變る海景を、平凡ながら人の世の象徵として添へてゐるやうな趣向の凝つたところもある。兎に角、これら三つの小說はその代表作で、散文も極めて流麗で詩的韻律に富み、人間の內面に脈々と曳いてゐるリズムの輝きを、速力のある文體に審美的に具現したことが感じられる。この點、マンスフィールドと同樣に、ウルフも婦人の資質を思ふ存分に伸ばしたのだ。

併しウルフは評論などでも知る如く、男性を凌ぐ聰明な知性を武器として、文化した社會に於ける「性(セックス)」の區

別を無視せんとする、頗る進歩的見解に立つてゐる。彼女は、偉大な精神は必ず女性的に男性であり、叉男性的に女性であつて、たゞ純然とした男か女であることは不幸であると言ひ、人間の個性といふタクシーの內側に乘つた男性と女性の兩つは、相互に敎へ合ふことが出來ると主張する――そこでウルフの觀方に從へば、彼女の奧にひそむ男性が露骨に顏を出してゐるやうにおもへる、『オーランドウ』"*Orlando*"(1928)なる、「傳記」と銘打つた奇怪な物語がある。これはオーランドウといふ主人公が三十年の經歷に三百年にわたる文化を交叉せしめ、「時」のカラクリを行ふと共に、途中で男性から女性に轉身させて、兩性と人間の「自我」に冷諷的な批評を下してゐる。最近、再び「傳記」と稱する『フラッシュ』"*Flush*"(1933)といふものを書いたので讀んでみると、やがてかのブラウニング夫人となつたエリザベス・バレットの愛犬フラッシュを中心として、ブラウニングとバレットの戀愛事件を配し、「犬の心理學(キャナイン・サイコロジー)」に觸れた、この上なく面白い作品で、文學史に據る事實と作者の奔放な想像がぴつたり混和して、單に物語としてもいゝ。傳記の新しい素材であり、叉人間の精神分析から動物心理にまで及んで、人間と動物の內面的交流を寫し出すと同時に、人間批判を試みることは非凡な着想ではなからうか。ウルフは今年五十三歲、ペンの仕事に沒頭する一方、夫君レナッド・ウルフと一緒にホガス・プレス(The Hogarth Press)の出版業に從事して新しい文學の開拓に盡してゐる。而も彼女は未だ容易に沈默しさうもない。これから何をやり出すか、期待すべきであると思ふ。

ドロシー・リチャドスン

ドロシー・リチャドスンの處女作たる『尖れる屋根』"*Pointed Roofs*"は一九一五年に出たのだから、彼女はウルフとデビューの機を一にしてゐる。それから一年か二年每に、次々と作品を發表し、『曙の左手』"*Dawn's Left Hand*"(1931)に至るまで、いはゆる「巡歷叢書(ピルグリメヂ・シーリーズ)」は總計十卷の大部に達したのである。彼女はかういふ方向を定める際、恐らくヂョイスなどは知らなかつたであらう。勿論、現代の文學に近附いてきた精神分析學には關心をもつたかも分らぬが、一方英文學古典のロレンス・スターン(Laurence Sterne, 1713—68)とかサミュエル・リチャドスン(Samuel Richardson, 1689—1761)とか、すべての現代女流作家と同じくヂェイン・オースティンなどの作品からヒントを得たやうにも考へられるのだ。フランスのウルフ研究家デラトルはウルフにもスターンやリチャドスンの傳統があると言ふが、ドロシー・リチ

ャドスンに就いては尙强く言へるかも知れぬ。ヂョイスの作品よりも幼稚で單色のやうにおもへるが、兎に角、『尖れる屋根』には「意識の流れ」的手法が相當にこなされてゐる故、リチャドスンは期せずして、ヂョイス、ウルフと平行線を引くに至つたのだらう。殊に『隧道』"*The Tunnel*"（1919）はウルフの『夜と晝』と同年に、而も同一の書肆ダックウァス（Duckworth & Co.）から上梓されたのだから、ウルフは確かに讀んだ筈で、マンスフィールドもこれと次の作『合同』"*Interim*"（1919）をレヴューしてゐる。その頃リチャドスンは餘り問題となつてゐないし、ウルフにもマンスフィールドにも直接影響したところはないが、同性のことには神經質になり易い女流作家へ全然刺激を與へなかつたとも言へまい。いづれにせよ、リチャドスンはマルセル・プルーストもよく紹介されてゐない時代に、もうプルーストめいた計畫を立てたのであつた。

　彼女の「巡歷叢書（ピルグリメヂ・シーリーズ）」はミリァム・ヘンダスンといふ、たゞ一人の女主人公にかゝはる。その徹底的な女らしさに溶けこんだ自己意識、孤獨に息づくたましひが近代生活の「現實」の中へ押し進められてゆく過程に於けるあらゆる經驗――二十に滿たない少女がドイツの女塾に入り、異國の同性に接觸し、歸國してから戀愛、職業、結婚等の問題に突き當りながら、みづからの歷史を築く內的生活の記錄である。インテレクチュアルな思惟、刻々漂うてゆく氣分、神經を傷める外界の刺激、又赤裸々な奧底の意識、そして解き難い謎のやうに不可解な衝動――さうした樣々な心理解剖は、一個の統體たる性格を複雜極りない織地に示して、主人公を圍繞する、色々な階級に屬する多數の人間群像が浮び上つてくる。新心理主義作家は大抵かういふ效果を摑んでゐるが、ヂョイス、ウルフ、リチャドスン夫々に瞭然たる距離があつて、ヂョイスはスティーブンとブルームを對照せしめながら、わざわざ抽象的類型を創造し、正確無比に見える科學的描寫も「現實」そのものでなく、「現實」の備へる條件を悉く說明しようとすると共に、作品の機能を音樂へ移してゐるし、ウルフは始終主觀を廻轉させ、自分の掌中に載せた世界を突放して、デフォルマシォンにまで仕上げなければやまない。二人に比較すれば、リチャドスンはずつと古いのであらう。彼女は「現實」に柔和しく追從することを第一義としてゐるから。その點、ミリァムものは退屈で物足りないことも多い。スタイルに關して言つても、ヂョイスのは强靭で、暗黑に重なつた複雜な陰影のやうに入り亂れ、ウルフのは飽くまで明るく、白晝のかげらふみたいにチカチカ映え、一語一語脈うつ線

條の如く滑つてゆき、リチャドスンのはかういふスクールで最も寫實的な平明さをもち、微細なアトムを丹念に集めては縫ひかゞつてゆく。

ドロシー・リチャドスン論を書いたヂェー・エフ・ポイス(J. F. Powys)は、ミリァムもの丶優れた特質としては、この若き女性を一般人間經驗の象徴となした才能と少女の實際的及び知的ドラマを形成する數多い人々の確かな眞實性と、ミリァムの女らしさに就いて吾々が知ることが許された祕密――これら三つの項目を擧げて稱揚してゐる。何を置いても、私は先づミリァムの性格に興味を惹かれる。ヂョイスのブルームとかウルフのクラリーサ(ダロウェイ夫人)に於いては、從來の作家が常に或る性格の戲曲發展を行つていつたのに――近い例はハーディのテスであるが――むしろ、性格が隱してゐる過去の蓄積を解いてゆくとも見られる。リチャドスンもやはりこの範圍に屬して、重要な役割を演ぜしめる爲に、「記憶」をもつてしてゐる。記憶を選擇整理することに依つて、どんなに平凡な瑣事でも活々と輝き始めるのだ。殊にこの叢書を通讀すると、外面的經過は『ユリシーズ』や『ダロウェイ夫人』よりも長期にわたつて、年若い婦人の纖細で清い感受性をとほして、次第に變化形成されてゆく性格を面白く眺めることが出來る。ミリァムは近代人である故に、寒々しい孤獨の叛逆が燃えみなぎつてゐるけれども、スティーブン程虛無的分裂を負うて居ず、又クラリーサのやうに疲勞を極めてゐない。どこか抑へに抑へた理性的自制の下に、人間の溫かい心髓を藏めてゐて、アンティ・ヒュマニスティックな性向にも初々しい意慾が躍り、悲哀と歡喜、苦痛と反撥が鬪ひ合ふ――「自我」の活動が烈しくなるに伴れ、傳統・因襲・習慣に對する批判的目覺めが訪れ、宗敎に就いて漠然と不滿をもつたりする一方、身震ひするやうな好奇と快さで無理に煙草を飮んでみたりする。恐らく作者の自傳的經驗であらうが、ハッキリとした根據たるべきことをリチャドスンは、これまで決して洩らしてゐない。少女の思春期を硏究したものとして、初期の數卷は興味深い材料であらう。第四作の『隧道』以後になると、かゝる心理分析小說に、倫理的の、審美的の、精神的人生の哲學味が愈々濃くなつてゐる――つまり、リチャドスンの眞價は、男性と平行した世界を飽くまでも女性の巡歷に依つて開いたことに於いて、尠からざる社會性を胚生してくるところにあるので、文學形式としてはヂョイスとウルフと同列に置くことは出來ないかも知れぬ。婦人がリチャドスンを讀んで嫌惡する事から見ても、女性硏究の作品としては忘れてはならないものと信じる。(完)

時評

時言數題

大槻憲二

一、博士號賣買事件の意義

長崎醫大の博士號賣買問題は、大分世間の耳目を聳動したが、さうしてこの問題に就いては、諸方面から種々の論議は既にし盡されたやうであるが、無意識心理的見地から、學位――殊に醫學博士號の意義に就いて、一考を費しておくことも、この際無意義ではなからう。

學位は學問上の功績に對する推讃の意味に於いて當局から與へられるものである。これは與へるものから見れば當人への賞讃であると共に、學問の奬勵を意味してゐる。受ける者から見れば、それは名譽であると共に、社會的地位の確立である。第三者から見れば、それは信頼と尊敬との標準である。嘗て、博士號の所有者某が社會的に不徳な行爲をした廉により、その稱號を當局が剝奪したに對して、學位は學問に對する折紙を意味し、人格に對する保證を意味しないから、かゝる剝奪は不當であると論じた人があつた。この論は、もしその人の鋭い皮肉でなかつたならば、甚だ非心理學的な屁理窟である。何となれば、かゝる稱號は、これを贈與する者の意識的動機と目的との如何を問はず、學位所有者の學識のみならず、人格をも保證するものとして、事實上世間に通用して了ふからである。通用させるものが惡いと云つたとて、それが事實である以上は、事實は事實として扱ふより外はない。何故にかゝる事實が生ずるかと云へば、それは世人がかゝる稱號所有者に對して父コムプレクスを起すからである。エディポスに於ける相反並存（アムビヴアレンツ）の陽性面たる善父は、必然的に偉大であると共に善良でなければならない。優秀なる學識あるものは、必ずその人格も高潔でなければならないと、コムプレクス的に幼兒的に彼等は認識して了ふ。學位授與の責任者は、この事實をよく辨へてゐなければならない。

故に、學問に關する仕事をなす者として、民衆又は學

生から父コムプレクスを起させる必要のある位置にある者は、學位なるものを寧ろ必須條件とするのである。つまり、その學位に依つて父コムプレクスを起させなければ仕事が仕難いのである。更に別言すれば、コムプレクスを起させることに依つて、仕事が仕易くなるのである。醫者には殊に仕事が仕易くなる。醫者に學位所有者の（他との比較を絶して）多いのは、醫學が他の學問よりも比較を絶して進歩してゐるからだとはよもや醫者たちも公言し得まい。それは職業的に必要だからだ。宛も學校教師に必要なる如く……。

では、如何に仕事が仕易くなるか。醫師又は分析者の場合には、そこに患者が轉嫁愛を起すからである。この事を充分に意識せず、またかゝる轉嫁愛を處理する方法を心得ずして、かゝるコムプレクスを起させる如き學位稱號を所有することは危險である。嘗て患者の少女を姦した某醫學博士の如き例は、實は意外に多いのであらうと思ふ。何となれば、かゝる心理過程に對して全く用意を缺いてゐる醫者を、患者の方が轉嫁愛に依つて必然的に誘惑して來るからである。軍旗は敵を威壓し、味方を鼓舞するばかりのものと思つてはならない。それは必然的にまた敵からの砲撃の目標となる危險をも、その裏面に含んでゐることを覺悟せねばならぬ。

長崎醫大の事件も、皮肉な見方をすれば、かゝるコムプレクスを民衆から多少は分析解消せしめるに就いての價値はあつたらう。人生の事、如何なる事件にも、行動にも半面の善と半面の惡とがある。

二、日本人の罪障感

本誌前號に於いて、古澤平作氏は『ユダヤ民族は今尙思想上復讐の途上にあるが、日本民族は已に復讐を克服したと云ふべきか。』と云つてゐられるが、その根據の奈邊にあるかを私は知らない。併し、私惟ふに、日本人は民族としてユダヤ人ほどの苦勞を知らない、幸運なお坊ちやんである。未だ復讐をしなければならないほどの大きな迫害を受けたこともなければ、侮辱を被つたこともない。高々、日清役後の三國干渉くらゐのところだ。地の利に依つて守られて、全く溫室育ちの坊ちやん民族である。却つて先住他民族をこの島國から追拂つたり、先輩大陸國を併合したりして、寧ろ××感をさへ持つてゐるのではないかと私は思ふのである。その故にこそ、大震災のやうな場合に際しては、その罪障感は發して他民族への××となり、不安症者の攻擊衝動の如き××を敢てするやうにもなるのではないかと思ふ。現今の非常時意識とても、××××××感に基く不安が、症候的に

反動して、自分で造り上げて居る緊張――それへの反映として諸外國の緊張も必然的に結果し來るが故にこの緊張は倍加し來る、――ではないかと思はれる。古澤氏も『……克服したと云ふべきか。』と云つて、斷定を避けて居るが、もしこの『か』の一字が缺けてゐたならば、私はむしろ氏のナルチスムスの表れであると解釋したい。すると氏は、それは私の父コムプレクスであると云ふかも知れない。併し私は公平に見て、日本人が未だユダヤ人よりも、盲點解決に於いて深いとはどうしても信ぜられない。日本人の分析學への理解のこれほど遲れてゐる事に徴して、氏も辯解の餘地はあるまい。日本人は自力に依つてゞなく、地の利に依つて幸福過ぎたと云ふことを、我々は十分に自省せねばならぬと思ふ。

三、勘の問題

去る十二月二十八日、朝日新聞の『臨床餘談』の中で瀨川昌世氏が、『一概には云へないが、子供の病氣は專門家から見ると、いはゆる勘（感）で判ることが多い。』と云つてゐる。

本誌創刊號で、私が精神分析を實施するには『勘』（フロイドの所謂ファインヘーリヒカイトの譯語として）が必要だと云つたところ、某々氏等は、私が精神分析學そのものを『勘』であると云つたかのやうに曲解した。精神分析學そのものは、嚴然たる科學であるが、これを實地に適用する場合には、他の如何なる科學の場合に於いても然るが如く、勘が必要である。勘とは、知識や經驗（嘗て意識化されたもの）が一度無意識化されたもので、それが理知の命令を待たずして、必要に應じて迸出して來るものを云ふのである。

私は自分では寧ろ理論的な頭腦の所有者であると思つてゐるが、それだけに、勘はあまりいゝ方だとは決して考へてゐない。活動映畫などを見ても、少しでもカットがあつたりすると、なか〳〵判然頭に這入らない。いつも身邊の者に敎へられてハヽアと點頭するやうな有樣。何事にも理論と實際とを混同してはならない。瀨川氏も流石に實際家であるだけに、勘の必要を認めてゐる。私は寧ろ自分自身のために勘の必要を認めてゐるので、自分が勘に就いて自信がある故に、かく主張したのではない。

四、非心理學的な醫師觀

同じく『臨床餘談』の中で、石原忍氏は『學問と實際』の題下にかう云つてゐる。

『私の敎室に非常に頭のいゝ、學問のできる助手がゐた。そ

の人は誠によく勉强をして、熱心に患者を診るのであるが、どうも患者の受けがよくない。聞くとその助手は小兒の眼を診る時、常にその兒をおさへつけて、器械で眼を開けて診る。母親は憤慨して、これまであちこちで診てもらつたが、こんなひどい事をする醫者は一人もなかつたといつて、涙を流してゐる。助手のいひ分を聞くと、子供は泣くのは當り前で、おさへつけて診なければ、十分に診察ができないからよく診てよく治した方が親切なのだといふ。成る程一理ある。親切を盡して不足をいはれてはつまらない事である。これ等は學問と實際とが一致しない所であらう。左傾思想なども、恐らくあまり學問に偏して世情に疎いといふところに過誤があるらしい。』

併しこの見方はあまり常識的（非心理學的）である。その助手の遣り方は實際にうといと云ふだけで片付けられるだらうか。私はその助手の抑壓されたサディズムに着眼しないのはあまり醫者らしからぬ見方だと思ふ。助手は子供をかく殘酷に扱ふことに、或る快感を覺えてゐるのだと解釋しなければならないと思ふ。『子供は泣くのは當り前で：：よく診てよく治した方が：：』などゝ云ふのは所謂ラショナリゼイション（理窟づけ）である。かう云ふ助手は眼科醫や小兒科醫などになつたのが抑々の間違ひだ。彼は外科醫になればよかつたのだ。さうなれば思ふ存分切つたりはつたり（サディズムを滿喫）出來たわけだのに：：。

左傾思想とてもこれを單に實際に疎いと云ふだけで片付けようとするのは、甘い見方だ。人間の行動は總て一度はその無意識動機に遡つて、何等かの人間的慾求の充足として見なければ、正當な解決は下せない。

五、常識的な精神病名

昭和五年四月、世田ヶ谷經堂で實弟と老婆とを殺した谷口富士郎は、數年間の拘禁のために、その精神狀態に變動を來し、以前には『道德的痲痺症的精神障碍』と診斷されたのが、今度は『拘禁性精神異常者』と別診斷されることになつたと、新聞紙は報道してゐる。診斷者は帝國大學教授、松澤病院長三宅鑛一博士と、某醫學士とである。私は、併し、この病名を見て、そのあまりに常識的（非學問的）なるに、不審を抱いたのである。被告が『道德的痲痺症精神障害』の患者である位の診斷ならば、敢て專門學者を俟つまでもなく旣に萬人の認めてゐるところである。その故にこそ、被告は不道德的な行動を敢てしたのである。放火常習者に「放火性精神障害」と云ふ名を與へたり、萬引常習者に「萬引性精神障害」と名付けたりしても、少しも學問的意味はない。かゝる命名は單なる『結果の記述』に留まつてゐて、『原因の

說明』にはなつてゐない。常識は結果を記述し、學問は原因を說明するものでなければならない。『拘禁性精神異常』と云ふ名稱とても同樣、全く結果又は條件の記述であつて、原因の說明にはなつてゐない。拘禁と云ふことは、「精神障害」から「精神異常」への轉變の契機となつた條件に過ぎなくて、その原因は別に存せねばならない。何となれば、あらゆる被拘禁者が斯る轉變を示すとは限らないからである。勿論、一切の人間は、一室に拘禁されて社會との交渉を杜絕されゝば精神はその常態を、程度の差こそあれ、逸して來る。精神分析學はこの過程を「退行」と呼んでゐる。被告は元來、精神薄弱者であるが故に、彼をかゝる拘禁の條件下に置いたことが契機となつて、精神異常を來したのである。被告をかゝる條件下に放置せしめてその裁判を不可能ならしむるの結果を招致したとすれば、醫師も多少の責任を遁れないのではなからうか。が、それはそれとして、問題は、被告が如何なる種類の、また如何なる原因に基く精神薄弱者であつたかと云ふことゝ、今や如何なる種類の精神異常者となつてゐるかと云ふことゝでなければならぬ。この說明がなければ學的診斷と云ふことは出來ない筈である。私はさきに本誌昨年十月號本欄において、現在の犯罪學が如何に常識的（非學問的）であるかを論じたが、現在の犯罪學が現今の精神病學に基くものである以上、これは當然精神病學の責任となるかも知れない。

それに、「拘禁性」と云ふ語は、失禮ながら、語をなしてゐないのではなからうか。「拘禁」は、前にも云ふ通り、精神轉變の單なる契機であつて、その原因でもなければ、その特質でもない。原因や特質を表はさず、單に條件や契機を表はす語に「性」の語を附加することは正しい語法とは云へないと思ふ。何等の豫備知識なく、卒然この語を示されたならば何人も、この病者は、「自己を又は他人を一室に拘禁して外界に出づる（出す）ことを好まざることを特性とするところの精神病者」と云ふ風に理解する。私は單に言葉の揚足とりを目的とするものではない。ゾマティシズムに偏した精神病學に多少の無理があるのでなからうかとの平生の疑ひの一端を洩さうとしたに外ならない。先輩に對して甚だ恐縮ながら學問進歩のために、敢て直言させて貰ふ次第。多謝。

六、英語教育者に望む

『英語青年』一月十五日號には、『誤り易い』"quite a few" に就いて』(S・K・H生) と云ふ一文が揭げてある。—"The enemy's guns apened on us and killed and wounded quite *a few*." と云ふ文を、或人は『敵は我に

向つて砲火を開いたが、死傷は極めて少數であつた』と誤譯したが、この場合の "quite few" は、辭書にある通り、"a considerable number" の意であると筆者は云つてゐる。それからも一つ類例として "We have no servant now and I am helping quite a few" を擧げ、この場合にも "quite a few" は同じ意味であると說いてある。それは結構であるが、たゞその理由としては、それが『一種の colloquialism』であると云ふだけであるのは、我々には物足りない。"quije a few" は直譯すれば『全く少し』である。それが colloquialism (俗語習慣)に依つて、その正反對の『多大に』と云ふ意味に轉ずると云ふだけでは、學生に對して、あまりに殘酷であると思ふ。俗語の習慣であるとの宣言は、これには理由がない、偶然である、從つてたゞ棒暗記するより外に途はない、と云ふに等しい。我々は學生時代に屢々かゝる宣言を下されて、萬一これを忘れた場合には間違ふだらう。語學と云ふ奴は絕對に難物だと思つて、如何に若い胸を苦しめたことであつたか。併し考へて見れば、俗語だとて、全然理由なくして、正反對の意味になると云ふことは滅多にあるものでないと思ふ。右の二例の如きも、私はその意味逆轉の理由を心理的に(敢て精神分析的にとは云はず)說明せんとすれば出來ないことはないと思ふ。第一例は『敵は我に向つて砲火を開き、我の死傷は多大であつた』と云ふのが正直なところであるが、殊更に、『少々』と書くことに依つて、その正反對の『多大』を意味せしめたことは、そこに筆者の口惜しさの感情が表現せられむがためであつたと私は解する。かく解釋することに依つてこの文の心理的機構は明瞭になるし、修辭的の味ひも深くなつて來る。第二例とても『わが家には只今召使の者が居りませんので、私は少々(大いに)手傳つてゐます』と云ふのは、この逆表現に依つてそこに筆者の相手に對する遠慮や禮儀の神經が見えると、私は考へるのである。かく說明しなければ、この文の味は分らぬし、またかく說明することに依つて、學生は將來も類似の文が出て來た時に、自信を以て解釋出來るやうになると思ふのである。これをたゞ colloquialism で片付けることは、如何にも從來の語學教授の缺陷ではなからうか。文法でさへも近頃は大分心理學的になつてゐるやうだが、語學教授に心理的說明を多くしたらば、隨分教授上の效果は上がると思ふ。自分が苦しんで來たから、敢て今の學生諸君に代つて一言陳べて見た。

思へば、日本語に於いても、これと全く同じ用癖はいくらでもあるのである。『少々やられた』と云へば、『大いにやられた』と云ふ意味であるが、たゞ少し負惜しみ

の感じが付加はつてゐる。『少々馬鹿だ』と云へば『大馬鹿だ』よりは、同じ意味ながら、少し控へ目になつてゐて、言葉の味が細かい。

七、再び餅の問題

私は本誌前號本欄に於いて『餅の問題』の題下に、柳田國男氏の餅の說に對して分析的見地から多少の示唆を試みたが、內に、『心臟の形が三角形であることを日本人が知つたのは恐らく西洋醫學が這入つてからの事ではないかと私は考へてゐる』と書いたが、去る十七日研究會席上で、中山太郎氏に、日本人が內臟の構造を知つたのは極めて古代の頃からであることを教へられて、私は自分の推定（敢て斷定でなかつた）に對して玆に改めて一言附加しておくことの必要を感じた。私は杉田玄白が『解體新書』を讀み、それを實際の腑割りに照し合せて悉く符合するのに驚いたと云ふ記事を讀んだ記憶があるので、德川時代の醫家にして猶且、內臟についてかく無知であつたとすれば、それより以前の一般庶民の知識程度は推して知るべきのみと思つたのだが、事實はさうでないさうである。古代に於いても死者は、その臟腑を取出して後にこれ葬つたといふ話である。

併し、古代人が內臟、殊に心臟の形を知つてゐたとしても、それが今日我々の考へるやうに重大なものと考へられてゐたかどうかに就いては、柳田氏はまだ證據を擧げてゐられぬし、またそれがよしんばそれほど大切なものと知られてゐたとしても、何故にそれが喰はるべき餅などの形に及んだかの心理過程に就いても何等の示唆が與へてない。柳田氏は、餅やニギリ飯の三角形が或るものに傚つたのではないと考へたがつてゐられたところ、丁度そこへ心臟が出て來たので、これは丁度いゝものがあつたとそれに飛付いて行つたのではなからうか。もしさうだとすれば、それは學問に於ける感情や趣味の干涉（分析的に云へば抑壓現象）であつて、これは學問の公正を期する上から面白くないと思つて一言批評を試みやうとしたのが眞の動機である。併し念のために斷つておくが、私は餅やニギリ飯の三角形が、或るものゝ形の象徵であると考へたがつてゐるわけでもないのだ。私は全く白紙である。私は何でも、成程と首肯させて下さりさへするならば、何でも首肯すると云ふ、全く客觀的態度を常に持してゐるものであることを、念のためこゝに斷つておく。（完）

講座

女心の分析

大槻憲二

婦人は昔から謎であると云はれてゐます。菩薩の如く優しいかと思ふと、夜叉のやうに恐しい他面を具へてゐると考へられて來ました。天人のやうに朗らかであると云はれるかと思ふと蛇のやうに執念深いと難ぜられてゐます。婦人の本質が果してこのやうに矛盾したものであるかどうかは姑く疑問としまして、何故にこのやうに考へられるやうになつたかを私は精神分析の立場から説明して、婦人並びに男性双方の反省と參考とに供し度いと思ひます。何となれば、鐘の音の好し惡しは撞木の打ち方の如何にも因ります通り、婦人を天女にするか夜叉にするかは、その責任の一半は男性にあるからであります。

併し、男女の別なるものは、普通に考へるほどさう明白なものではなく、生理的にも心理的にもこれを科學的に定義する事は甚だ困難であるとされてゐます。即ち、女性にも男性的女性ある如く、男にも女性的男性があつて、甚だしく女性的な男性は、甚だしく男性的な女性よりも、却つて、一層女性的な感を與へるほどであります。

併し常識的に考へますと、男性とは能動的に働きかけることを喜ぶものであり、女性とは受動的に他から働きかけられることを好むものであると云ふことが出來ませう。これを性慾學上の術語を用ゐてサディズムとマゾヒズムとに別つことも出來ませう。

元來サディズムとは、譯して加虐性(虐待を性的相手に加へることに依つて亢奮を感ずる性質)と申してゐます。マゾヒズムとは譯して被虐性と申してゐます。共に性慾學上一種の變態者を形容するために出來た術語でありますが、元々サディズムとはフランスのサドと云ふ誠に性慾的に奇妙な癖のある人の名から來た名稱であります。このサドと云ふ人は相手を虐待しないと性的亢奮を感じないのでありました。遂には澤山の婦人を殺すやうなことにさへなつたのであります。またマゾヒズムの方はドイツのマゾッホと云ふ、これまた性慾上奇妙な癖のある人の名から取りました學名で、この人は婦人から虐待され侮辱されることに依つて亢奮を感ずる人でありました。併しサドと云ひマゾッホと云ひ、一見誠に變つた

人物のやうでありますが、これは彼等に於いて特に徹底した純粋な、誇張された形でそれ等の性向が現れてゐるが故に目立つばかりでありまして、かゝる傾向は程度の差こそあれ、何人も多少ともこれを持たないわけに行かないことになつてゐるのであります。即ち、サドやマゾッホのやうな變態者でなく、常態者はサディズムとマゾヒズムとを混合させて持合せてゐるわけであります。まづ男が普通にサデズィムを六分か七分、マゾヒズムを四分か三分の割合で持合せてゐるとすれば、女はマゾヒズムを六分か七分、サディズムを四分か三分か持合せてゐるわけであります。この兩方矛盾した性癖をカクテルにしてゐますので、人間としての味が誠に具合がよくなつてゐるわけであります。勿論男であつてサディズムを四分か三分、マゾヒズムを六分か七分持つてゐる人があるかと思ふと、その反對に女であつてマゾヒズムを四分か三分、サディズムの方を六分も七分も持つてゐると云ふ人もありませう。それが前に申しました女のやうな男、男のやうな女と云ふことになるのであります。

　ところでこのサディズムとマゾヒズムとは單に性生活の上に現れますばかりでなく、その人の職業、交際、趣味その他一切の生活の上にも現れてをります。そこでサディスト的な人は實業家、軍人、政治家などに適してをりませうし、マゾヒスト的な人は學者、詩人、宗教家などに適してをるわけであります。ところで、サディズムとマゾヒズムとがやはりまた、人々の精神生活にも現れてをるのであります。肉體上の愛に對立させて、假りに精神上の愛と云ふものが區別されると致しますれば、精神上の愛にもやはりサディズムとマゾヒズムとが存在してゐるのであります。存在せざるを得ないのであります。愛情と云ふものは必ずこれ等二要素のカクテルとして現れるより外に現れ方はないのであります。

　精神上の愛に於けるサディズムは嚴格、命令好き、監視好き、惡くなつては壓制、我儘、無理押し、横紙破りなどゝなつて現れますが、マゾヒズムの方は服從、温順、世話好きなどゝなつて現れます。平たく云へば、力強く取扱ふことを好むものと、力強く取扱はれることを好むものとであります。崇高偉大な人格の力は精神化したサディズムの美であり、自制隱忍謙讓の德は、これまた精神化したマゾヒズムの美であります。肉體上のサディズム、マゾヒズムが精神化した以上は既に加虐性、被虐性などゝ云ふ名稱は不適當で、力強く相手を取扱はうと欲する性質、力強く扱はれようと欲する性質と申すのが適當でありませう。併しいづれにもせよ、これが性慾的なものから起源してゐることは否むわけにり參ません。

それでこれを精神分析では性心理（プシコセクシュアリテート）と申します。

さきに、愛情と云ふものは、サディズムとマゾヒズムとのカクテルとなつて現れるからよい味ひになると申しましたが、その通りで、もしこれが何れか片方だけであると自分自身の周圍の者も誠に苦しくもあるし迷惑もすると云ふわけであります。あだかも、お砂糖ばかりで煮た、或ひはお醬油ばかりで煮たお惣菜のやうなものであります。勿論、お菓子や佃煮は片方ばかりの味のものでありますが、間食やツマになるもので、常食とするに足りません。

常食とするに足りる愛情には、常に必ず砂糖と醬油が適度に這入つてゐます。夫の方でお醬油を七分とお砂糖を三分とをお鍋に入れますと、妻の方ではお醬油を三分に砂糖を七分ぐらゐ入れます。これがまづ常態的な夫婦生活であります。と云つてもそれが作りつけではなく、どうせ生きた人間の生きた日々の生活のことでありますから、今日は夫が意外にお砂糖を多く入れることもありませうし、明日は妻君の方が却つてお醬油をふんだんにぶちこむこともあります。さうすれば、相手の方はその足りないところを適度に入れておけば申分がないのでありますが、どうもこの味の付け方には上手下手がありまして、相手が醬油をそんなに入れるなら私の方だつて負けるものかと云ふので、無暗に醬油をぶちこみますと、とてもからいお料理が出來上つて、とう〳〵犬までも喰はないで逃げて行くやうになります。

世に男女の相性と云ふことを申しますが、これは星や干支にあるのではなく、精神化したサディズムとマゾヒズム、卽ち力強く取扱ふことを好むか、力強く扱はれることを好むかに在るのであります。愛情のお鍋に於いて醬油と砂糖の出し合ひの調子がうまく行くか否かにあります。片方が無暗に醬油をぶち込むのに對し、こちらはそれに相當する砂糖を入れる方だと問題はありませんが、自分の方でも時々には醬油を入れて見たいと思ふ人であると、永い間には我慢が仕切れなくなります。この時、相手の醬油の出し加減を時々は遠慮させてやらうと思ふには、自分の方で時々大量に醬油をぶち込んで相手を面喰はせたり、また時にはチツとも砂糖を入れてやらないで、にがい思ひをさせてやつたり、いろ〳〵手をかへ品を更めて見るのがいゝのであります。いつも一本調子に苦しみながら相手の醬油に適當なだけな砂糖を入れてゐたのでは、相手はつけ上つて來るばかりでなく、その上單調でつまらながつて參ります。これは男子操縱の祕傳であります。

右に縷々申述べて參りましたやうに、婦人は概してマ

ゾヒスト、即ちお砂糖、甘黨の方でありますだけに、相手からはお醤油を注いで貰ふことを期待してゐるのであります。ところが、相手が適量の醤油、滿足に行くだけのからさを以て應じて來ないと、ぢれつたくなつて自分の方で無暗に醤油を注ぎ込むやうになることがあります。お醤油お砂糖の例でなく、蚊にさゝれて痒ゆい狀態にたとへて見ますと、婦人はどちらかと云ふと痒ゆがられる方、男子はどちらかと申しますと搔いてやりたがる方であります。ところが、自分は蚊に喰はれて痒ゆくてたまらないのに、相手の者が爪を立てゝは可愛さうだなどゝ云ふのでそつと指先で撫でたりしてをりますと、痒ゆい方ではいら〳〵して參ります。さうぢやないのよ、かうするのよ、などゝ金切聲を張上げて相手を引搔き廻すやうになります。それを見てあの女は邪慳だ。きつい、氣が強いなどゝ云ふのは、云ふ方が寧ろ間違つて居ります。男はいつでも心の爪を用意してゐなければなりません。心の爪のないものは男の資格がなく、女に滿足を與へず、夫婦の仲は面白くなく、女が從つて自分で爪を延ばさなければならなくなります。

皆さんは、あの英國詩聖シェイクスピヤの『じやじや馬馴らし』"The Taming of the Shrew" と云ふ喜劇を御存知ですか。これは以前には『悍婦馴らし』と譯し慣はしてゐたものですが、坪内博士が新しい譯名を與へられて以來『じやじや馬馴らし』で通るやうになりました。最近では一昨年の六月頃に、ダグラス・フェバンクスとその愛妻メァリ・ピクフォードとが共演した映畫が上演されましたので、皆さんの御記憶に新たなところであらうと存じます。――この喜劇の筋はどう云ふのかと申しますと、昔々、イタリーのパデュアにバプテスタと云ふ大金持が住んでゐました。彼は二人の娘を持つてゐましたが、妹のビアンカの方には隨分大勢婿の候補者がありましたのに、姉のカサリンは稀代の悍婦でありましたので、美貌と莫大な持參金があるに拘らず、求婚者がありません。父親は、姉の方が片付かぬ内は、妹の方を先に嫁にやる事はせぬと宣言しました。それを聞込んだ、ヹロナと云ふ町の貴公子ペトルシオは『それこそ自分の望み通りの花嫁だ』と云ふので乘込んで來て、到頭この悍婦を猫の如く優しい女にして了つて、目出たく結婚すると云ふ筋でありますが、この劇に於いて興味のあるのは、何故にカサリンが悍婦になつたかと云ふことゝ、この悍婦を勇敢なるペトルシオが如何にして手馴付たかの方法とであります。

カサリンは元來、氣の強い、即ちサディズムの傾向の強い女であつたに相違はありません。併し後にあれほど

優しくなつたところを見ましても分る通り、マゾヒストの要素をも多分に具へてゐたのであります。然るに兩親始め身邊の者等は、何しろ貴族の大金持のお孃さんと云ふので、無暗に砂糖づけにして育てたものでありませう。云ひかへますれば、痒ゆいところがあつても引搔いては可愛さう、萬一キズをつけては惡いと云ふのでそつと撫でゝおいたのです。これでは氣の强いカサリンでなくても、誰しも焦々して來ます。貴族のお孃さんに疳癖の强い人の多いのは、一つには慥に周圍の者がマゾヒズムの要求に答へてやらなすぎるからであります。あまり甘やかすから本人は辛味を注いで來るのであります。それにも一つの原因は妹ビアンカの存在です。

ビアンカの方が元來圓滿な性格で人々に可愛がられますので、カサリンは嫉妬も加はつて餘計に八當りするやうになるのであります。

以上は、女心の一般的特質に就いての、ほんの一通りのお話に過ぎません。

（昭和七年九月九日、「婦人講座」ラヂオ放送草稿。）

精神分析語彙（八）

一、自我の核――知覺意識區劃を云ふ。（フロイド「快不快原則を超えて」）

一、自我機能――自我の要求を果すための機能。例へば性機能食事、運動、職業など。

一、自我本能――無意識性本能に對立し、意識的自我に即する本能が假定される。極めて大雜束に云へば、生物學の自己保存本能と同一概念と云ふも可。性本能はエスに向ひ、自我本能は現實に向ふ。生物學の自己保存本能のみを假定するのが、如何に單純な考へ方であるかゞ、明白になる。『勿論、生物の始めには、性感と異性同性の差別とは存在してゐなかつたが、併しながら將來性本能として敍述されることになるべき本能は、最初から活動してをり、これが「自我本能の働きに對して反對する作用は決して後の時期になつてやうやく示されるやうになるのではないと考へることが出來る』（フロイド「快不快原則」）

一、自己（固有）關係 Eigenbeziehung――自己の個人的コムプレクスに關係して、我々は事物を考へるのが人間心理の必然である。先號に出た新渡戸博士のお吉地藏の話の如き、その一例である。

一、自己色情 autho-erotism ――ハヴロック・エリスの造語。

幼兒的性生活の第一段階に於いては、滿足は自己の身體にあつて、外的對象は問題にならない。

一、自己分析——分析者に依らず、自ら自己を分析すること。

一、自己保存本能——精神分析より見れば、自我本能に外ならぬ。（自我本能の條參照。）『精神分析はまづ自我本能（自己保存、食慾）とリビドー的本能（愛）とを對立させたがやがてナルチステイツシユなリビドーと對象リビドーの新たな對立を以て、これに置換へた。併しこれでこの本能論の問題が片付いたわけではない。生物學的見地からするとたゞ一種だけの本能を假定して滿足してゐることは禁ぜられてゐる。』（フロイド「自傳」）

一、熟視——は間接の接觸である。視覺の印象は、リビドーの亢奮が最も屢々覺醒される途である。肉體を被ひ隱すことは文化と共に進歩して、愈々性的好奇心を誘發した。』（フロイド「性説三論文」）

一、受動的——性生活は性器前期に於いて、既に相反對立が形成せられてゐるが、併しその對立はまだ男性的、女性的と名付けらるべきものではなく、能動的、受動的と名付けらるべきものである。（フロイド「性説三論文」）

一、實際神經症（現實神經症）Aktualneurose ——精神神經症に對立するものと認められる。『多くの神經症的狀態——典型的神經衰弱や純粹の不安神經症などの如き所謂實際神經症は明かに性生活の身體的要素に依憑してゐるが、併し我々はそこに心理的要素や抑壓が役割を果してゐるか否かに就いては、何も確定な考へを持つてゐない。』（フロイド「療法論」）併しステーケルは心理的要素の働かぬ神經症の存在を否認してゐる。

一、自由聯想法——意識的聯想でなく、無意識の聯想を、意識の拘束から出來るだけ自由にして想起せしむる方法を云ふ。精神分析は、患者の無意識を探るについて、自由聯想法を以て催眠法に換へたのである。

一、人肉嗜喰——「カニバリスム」に同じ。

一、崇物症（心醉）——常態的性對象が、それと關係はあるが常態的性目的を果すには全く不適當な他の性對象に依つて代償される場合を云ふ。『性對象の代償は、一般に性目的に對しては甚だしく不適當な身體の一部分（足、髮）、或は愛してゐる人物の性と明かに關係のある無生物（衣服の一部分、肌衣）である。この代償は野蠻人が自身の神の具現と見た崇物（Fetisch）と比較しても、敢へて不當ではない。』（フロイド「性説三論文」）

一、スコトミザチオン——「明盲症」に同じ。

一、性格（Charakter）——『我々が人の性格と呼ぶところのものは、大部分は性的亢奮の材料から構成され、また幼兒時代から定着されてゐる本能から、昇華に依つて得た構成から成立つてゐる。』（性説三論文）

一、性器前期——性感が發達して遂に性器に統裁せられる以前

の時期、卽ち口唇性感期、及び尿道性感期を總稱す。

一、精神神經性――心理的要素に依る神經症で、實際神經症に對照するものと考へられてゐる。ヒステリー、强迫症、神經衰弱と誤つて名付けられてゐるもの、精神分裂症、妄想症など。

一、精神的不能症――種々の精神的禁制に依る性機能の障害。

一、精神分析學――オースタリーの神經醫家ジグムント・フロイドに依つて創始せられた無意識の心理學、及び無意識機制に依る神經症に對する、獨特の分析法に依る治療法。

一、精神分析の根本規定――『何でも頭に浮び上つて來ることは一切合切喋舌つて了ひなさい。例へば、旅行者が汽車の窓邊に坐つて內側に坐つてゐる者に對して、只今窓前の景色は如何に變化してゐるかを語り聞かせるやうな風になさい。最後に、忘れてならないことは、貴方は全然正直である約束をしたことである。で、何かの理由のために、それを語ることが不快だからとて、それを飛ばしてしまつてはなりませぬぞ。』(フロイド「療法論」)

一、性的開花――人間の性的開花に二期ある。第一期は三歲乃至六歲の頃、第二期は思春期、その中間を潜在期と呼ぶ。なほ精しくは本誌作年九月號、「幼兒性感の生物學的吟味」參照。

一、性的買被り――『性對象が本能の願望目的として享受する精神的評價は、それの性器に限られることは稀で、寧ろ性對象の身體全部に擴がり、また性對象から起るあらゆる感覺をも含めようとする傾向がある。同樣な買被りは、精神方面にも及んで來て、性對象の精神的行爲と美點に面して論理の混消(判斷力の低下)を示し、また性對象が下す判斷を信じ易く、且つこれに服し易くなる。』(性說三論文)

一、性的潜在期――性的開化の條參照。(未完)

藤原定氏が雜誌『作品』新年號の『ペンクラブ』欄に書いてゐた感想文(題を只今記憶してゐない)は、精神分析學のエスの概念を明白に語つてゐた。あの一文は、さう云ふ意味からでなくとも、相當推稱すべき好文である。(巢)

母性衝動

長崎文治

科學的でなく、哲學的な云ひ方をすれば、女の最高目的は母となることにある。如何なる理想を說き、如何なる經綸をめぐらすと雖、凡ての女は母となるに非れば、まこと人間たることは出來ない。母となることの總てが人間となることを意味するとの、逆命題は眞理ではないかも知れないまでも……。『妻であり母である前に先づ人間でなくてはならぬ』とて家庭生活に反旗を飜へしたノラの言葉は軈て婦人運動の機運を釀成して、所謂目覺めかけた婦人のモットーとなつた。成る程、この言葉は名言ではある。併しそれは決して至言ではない。歌ふべくして行はるべきモットーではない。何となれば、凡そ婦人にあつては、母性となることそれ自體が人格の完成であり、母性の營なみを離れた人間の姿はあり得ないからである。妻であり母であることゝ、人間であるといふことゝは決して別物ではない。妻たらうとし、母たらうとすることそれ自身の中に女の人間のまことの姿が有る。この說は如何にも道學者的口吻に陷つてゐるかの如くであるが、人生から一切の色と性とを拔き出してしまはうと目論む道學者先生輩の神經症的な思想は、勿論私の採らぬ所である。私の言葉に對して反對を唱へやうとする人達に先んじて、母性の正しい意味、精神分析學的見地からの新らしい解釋を試みることによつて、右の誤解への備へとするであらう。

男性の象徵が一般に突起とか尖鋭とか棒狀をとつてゐるに對して、女性のは凸陷とか彎曲とか圓を以て表はされてゐることは、原始藝術や表章の中に見られる所であり、精神分析學は、人間精神の無意識的表現として、この象徵を殘酷な程明瞭に解釋してしまつたのである。斯かる女性の象徵の示すが如き凹陷、彎曲、圓などは、吾々はこれから包容、柔軟、圓滿といふ樣な感じを受けるし、これが又女性に與へられたまことの性質である。從つて女性が內向的であり、保守、柔和、從順がその德性であることは當然である。

女性の象徵は、畢竟するに女性々器の象徵であり、曳いては母胎は一切の創成所であり、發育所である、又收容所であり、安息所でもある。從つて人間の一生涯の生活は、母胎から母胎への道程であると嘗て私は本誌第六號に、「棄て鉢の心理」を說いた時に述べたが、この偉大なる『胎』は女にのみ與へられたのものであつて、女が母となつて、この『胎』を滿し、子を持つことに依つて最高の目的は遂げられるのである。それ故に凡ての女は、母たらんとする願望を持つてゐる。母たらんとの衝動は一切を自己に向け、これを收容しやうとする傾向として表はれる。

母性衝動の最も妥當な表はれは子の親

卽ち肉身の母性となつた場合である。これは生物學的に女性の本然である。分析學的には去勢の補償である。母性衝動は愛育養護となつて限りなく子供の上に注がれる。子の無い家庭の淋しさは、他の理由もさることながら一つには母性衝動の滿たされない不安であり、リビドーの遣り場のない苛立たしさである。『子無きは去る』と云つた昔時の定めは、この意味に於ては異つた解釋が與へられるのである。女性は母となることによつて人格が完成するのである。母となることは子の奴隷となることを意味するのではない。子の奴隷となつた母性は子の指標たる事は出來ない。たゞ子の爲めに奴隷となることは有り得る。これは却つて尊とい犠である。こゝでは飽く迄、母性は自主的である。自己を沒却した母は、眞の母たり得ない。古代社會に於て、母權制度は極めて自然的であつた。金澤庄三郎博士は言語を通じて我邦の婦人の位置の高かつたことを說いて『主に』、『重し』『面（オモテ）』、『表（オモテ）』、『母屋（オモヤ）』は何れも『母（オモ）』といふ語頭を持つて主要な位置を示してゐると云つてゐる。母性であるが故に婦人は極めて高く評價され、理想化されてゐた。女神は嘗て男神の上にあつた。又、吾々の理想的人格は必ず母性の性質である處の包容とか寬大とか慈愛とか圓滿に歸着せしめるし、事實これは人の上に立つ者の具ふべき德である。斯くして女性は子を持つことに依つて眞の人格に到達し、附言すれば男性も亦女性となることに依つて理想的人格者となり得るのである。

生物學的に見れば、女性の母性衝動は以上の如く子を生み育てる事にのみ依つて滿たされる筈である。然るに進化の階梯は人類に至つて、これの代償を、夫に對する『世話女房』ぶりとか、自分の、『趣味』や『事業』の中に見出した。世話女房は明らかに、少くとも自己の權限內に於ては、夫を子供と同一化して、搔い所に手の屆く程迄に夫の一擧一動に關與するのである。そして夫が妻のこの好意を快く受容れてゐる間は、子供の無い家庭であつても、そこは極めて長閑である。又、それでなくとも夫が性格的に妻の下位に甘んじて、寧ろ樂しみを持つてゐる場合、卽ち嬶天下の家庭は亦天下泰平である。そこでは、夫自身が妻を母性化してゐるのである。次に事業に獻身し或は趣味に生きることの出來る婦人は、事業とか趣味を子の代償として、母性衝動は創造、發展、成功等に於いて昇華されるのである。

母性衝動が肉身の子に依つて滿たされる事が出來ず、又夫とか趣味、事業に子の代償を見出す事の出來ない婦人の行衞は何うなるかと云へば、一は症候を自らの中に形成してこの中に遁入して了ふもの、他は歪んだ形——非社會的な行動——に於て、鬱勃としてゐた母性衝動を吐き出さうとする者である。前者は神經症者であり、獨身婦人に見る如き偏頗な性格、ヒステリカルな感情動作などを特徵とする。後者は悖德的な行爲で、就中性的遊戲は、性そのものが生物の根本的慾求である以上、況して事業とか趣味に向ふべき高尙な素養の無い婦人に在ては、

金と閑暇と雰圍氣に惠まれさへすれば、誰しもこれに弃ることは極めて自然である。

母性衝動は斯くして、女性にのみ與へられた德性であり、その衝動の正しい流出こそ、完全へ向ふべき人間の姿である。母性となることを忌避して人格の完成はあり得ず、子の愛を知らぬ經綸は空虛である。人の親である事が世間の親であることであり、一切を包容するグレート・マザー・シップである。いさゝか自分のマザー・コムプレクスを精神分析的に整理することに依り、哲學化して見た。かゝる哲學化もまた分析學の一應用として意義と必要とがあると私は信じてゐる。

チビの悲劇

田内長太郎

『聯想法』と題するユングの講演の中から――。もつとも、この講演は一九〇九年九月、クラーク大學の開校二十周年記念祭に當つて述べられたものであるゆゑ、さう新しいものとは言へない。そのかはりに、サイコ・アナリシストとしてのユングの活動は、この時代が絕頂であつたとは言へよう。

これは或種の神經症患者が、それぞれ異なつた刺戟語へ斷へず同一の反應を示す好適例として擧げられたものである。すなはち、こゝでユングの用ゐてゐるのは、自由聯想法ではなく、試驗的聯想法で、例の彼が用意してゐる百の刺戟語を順次に發してみて、その語から被試驗者の頭に浮ぶ聯想に要した時間を測定したり、そこに生ずる各種の反應を檢査したりする方法である。

さて、この患者は實に何回となく、また何らそんな意味を持たぬ刺戟語の場合に、「チビ」"short" といふ語を連發するのであつた。當人にも、さうする理由は直接說明できなかつた。しかし、經驗によつて、かうした敍述が、常に彼自身もしくは、彼の最近親者に關係してゐることは判つてゐた。そしてこの場合は、その「チビ」が彼自身のことを指してゐて、さうしてその語を發することにより彼は自分にとつて何か非常に苦痛に感ぜられることを、暗に表現してゐるやうに見られた。彼は頗る小作りの男であつた。四人兄弟の末つ子で、兄達は彼とちがつて皆丈が高い。で、彼は家庭では何時も「お坊ちつやん」だつた。「チビ」といふ渾名を附けられて皆から「子供」扱ひにされてゐたのだ。

この一事が、彼の自信をすつかり失ふ原因となつたのである。彼は頭腦も良く、相當勉强もしたにかゝはらず、學校の試驗を受ける自信がどうしても持てなかつた。たうとうイムポテントとなり、狂氣となつたが、さうなると彼は、獨りきりでゐるをりは始終、自分を丈高に見せやうと爪立つて室の中を步きまはつて悅に入つてゐたのである。そこで、右の「チビ」といふ語は、彼にとつて多くの非常な苦痛の經驗を代表してゐたわけである。

これは固執語をもつ患者によくあるこ

とで、さうした語は、被試驗者の個人心理を研究する際、重要な何ものかを常に含んでゐるものである。

家と女

川上水夫

大槻憲二氏が嘗て『文學時代』と云ふ雜誌に『室と女』の題で書かれた女の象徵としての家や室の話は、私には非常に興味が深く、その後氣をつけてゐると隨分まだあるやうだ。その二三を左に拾ひ上げて見よう。

一、『むすめ師』、土藏破りの事。昭和六年十二月號「文藝春秋」、江口捜査課長に物を訊く座談會記事の內。

一、『むすめ師』（隱）同じ意味として「改造」一九三二年一月號「最新百科社會辭典」にも出てゐる。

一、『後家あらし』、空巢狙ひの事。「隱語辭林」五六頁。

一、『いんらん娘』、戶締りの嚴重でない土藏。（同書、三二頁）、また事實、性的自己禁制の强い女ほど、戶締りを嚴重にする傾向が見える。尤も、戶締りが嚴でないからとて、その女が多情であるとは限らぬ。多情の女が自分の多情を非常に禁制しなければならない事情にある時、非常に戶締りに神經質になる傾向が見える。

一、『うぐいす』、强姦の意、籠に入れて無理に鳴かせるところより出づるものゝ如し。

一、『花魁』、土藏の事。「改造」一月號「最新社會語辭典」四五　。

一、『お輕場』、忠臣藏七段目、「折から二階へ勘平が妻おかるは醉ざまし………」より出で、おかるばとは二階の意。（「隱語辭林」七六頁）

一、『かげま』、男色の事。陰間、背後の室、肛門の意か。

一、『きむすめ』、用心堅固な土藏。

一、『傾城』——美人又は遊女の意。語源は、漢武帝、李夫人の故事、「一顧傾人城再顧傾人國」にありとなつてゐるがもつと故い意味では、城それ自身を女に象徵してゐた言葉があつたのではなかつたかと察せられる。フロイドの「夢の註釋」にはウーランドの詩中に用ゐられた一例が擧げてある。

一『共同便所』、無貞操の女、淫賣婦、誰でも用達することが出來る意より出づ。（「隱語辭林」八二頁。）

一、『作藏』、男根の意、畑を女に例へ作男を男に例へたものか。（「改造」一月號、最近社會語辭典、一一四頁）

一、『土藏』、處女の意。（同書、二〇八）

一、『戶締り』、貞操の事。

一、『閂を拔く』、貞操を破らせること

一、『ローン』（Lawn）、大學生間の用語、陰毛の意。（「隱語辭林」、一八七頁）

一、『バンガロー』（Bungalow）、西洋風の安値の家との意味より、「本牧ガール」を意味す。

一、『ヒュッテ』（Hütte）、登山者の宿より轉じ、假りの宿り、卽ち一夜妻の意となる。

一、目下『英語靑年』に連載中の、岡倉由三郎氏稿には Bride を『新室』と譯してある。

俳優術

伊東豐夫

俳優術と云ふものを吾々の立場から考へて見る場合には、それは俳優の演じやうとする戯曲の內容を、出來るだけ俳優自身の心的境遇と密接せしめるに在ると云ふ事が出來る。一口に言ふと、まづ吾が事のやうに凡てを感じなくてはならないのだ。戯曲の內に盛られた葛藤を、自身の心理的葛藤と同列に置くことが、俳優たることとの根本要件であると。斯う云ふ理由からして、プロレタリア劇（？）を演じる、左翼の人々は、自分自身の生活が窮迫すればそれだけ、或は諸君の演技は容易になり眞に迫つたものともならう。だが、それは眞の俳優術ではないと云ふ人もゐるだらう。舞臺の上の世界を此の現實の世界と混淆してはならない。それが藝術的に修飾されたる別世界を形作る時、それが本當の演劇であつて、俳優は俳優であると云ふ自覺を一刻も失つてならないと云ふ說だ。

實を云ふと、私は眞に迫つた俳優術と云ふものを、餘り有難い代物だとは考へない。それかと云つて、私はあの豪華な超現實世界を、詠歎的な語物につれて展開させる歌舞伎劇を、演劇の理想として戴く事は、我々の現代的センスが許さない。觀客の感動を頭に置くなら、戯曲の內容は餘り吾々の生活と徑庭があつてはならない。そしてそれを演じる俳優諸君は多少の藝術的反省を以て、兎角突張り出さうと逸つてゐる現實に向つての呼聲を押へ、コントロールする必要がある。

人間は誰にでも俳優性があつて、神經症患者の場合等はそれが誇張され、執拗に繰返され表出される。それは彼等の性格を不具にした程激しい外傷的な體驗を戯曲化して演じ、再び心の均衡を取戾さうとする、痛ましい努力なのだ。

つまり、人間を俳優性へと狩り立てるのは、其の人間のコムプレクスであるのは、吾々に既に知れてゐる事なのだ。いや、誇張された俳優術と云ふものは、何も神經症患者特有のものではない。將軍の將軍らしさ、官吏の官吏臭、敎師の物知り顏、警官の威張り等と云ふものは、彼等が如何に內心のナルチスムスを支持するために、劣等感を補償する爲に、俳優になり切つてゐるかを吾々に敎へてくれる。又、職業的に云つて、銀行員の地味な態度は其の銀行の信用の爲には、ルネサンス式の豪壯な建物と共に必要なのであり、乞食の憐憫を誘ふ風貌や言葉、魚屋の哥兄振りも、この中に數へられる。更に云ふならば、娘の娘らしい振舞、母親の母親らしい態度も俳優性の中に數へなくてはならないと云ふなら、諸君は私が餘りに事物を一樣にのみ評價し過ぎると云つて非難するかも知れない。私も凡てが何もさうだと主張するのではない。

併し、私は歌舞伎劇の中でも、特に子役の演技、動物の道德的な態度を見せつ

けられる時に、私は自分の考へ方がそれ程間違つてゐなかつたやうに思へて來るのだ。さうだ、芥川龍之介氏の短篇「手巾」の中では、此の事を、封建道德の、或は武士道の型と呼んでゐたやうに記憶してゐる。所で、もつと意地の惡い見方をすると、自分自身の型を作り上げ、世間一般が此の型を認めたり、賞讃したり、痛快がつたりするやうになると、御苦勞千萬にも此の型を愈々重寶にして、その中に自分を押し込めやうとする人々がないでもない。手近かな例を擧げると、正宗白鳥氏の白鳥らしさ、林房雄氏の房雄振り、大宅壯一氏の人物評論編輯ぶりなんかは如何だらうか？

其處で再び俳優術に戻つて來ると、であるから、俳優諸君は實世間に於ける、多くの此のやうな馬鹿氣た俳優等を、眞に迫つて模倣してはならないのである。若し、そんな事をやらうとするなら、觀客席からの罵聲を覺悟しなくてはならない。

其所で、プロレタリヤ演劇の俳優等のやうに、絶えず現實的な葛藤に曝されてゐる場合であつても、諸君はそれをもつとずつと人類的な廣がりのある、エディポス・コムプレクスにまで接觸させる用意を怠つたなら、藝術的感動を期する事は絶對に不可能であると云つてい丶。

小說の分析

小說を精神分析するには、種々の方法があらう。小說の中に書かれた事件を、そのま丶取上げて、是を取卷いて動いてゐる人物を心理分析すると云ふ方法を、是迄吾々は多く使用して來た。が、其の他の方法として、小說全體を其の作者の空想、乃至は妄想として分析を進める行き方がある。恐らく此の方が、文學を分析するには遙かに正しい方法であると、私は信じてゐる。併しこれを本當にやるには非常な骨折りを要する。新聞の三面記事すら、新聞記者固有の趣味、思想、性格に依て歪められ、不當に擴大され、或は抹殺される場合が少くないのだ。事件其のもの丶本來の姿等は、到底見出し得ないと云つてよい位なのだ。が、私は新聞本來の使命、編輯者の野心的な、營業政策的な、大衆心理の操縦、煽動については別に機會を改めて論じ度いと思ふ。

一度人間の頭腦を通すと、一の事件が或は一つの事實が必然に、其の人間の心理的色彩を帶びないわけには行かない。實際それは、多くの人々が考へてゐるやうに、それ程簡單な事ではない。だから吾々が思想を檢討する場合には、その思想の妥當性よりも何よりも先づ、無意識が現實の重壓に反抗して此の體系を形成した心理的道程を辿る。そして此の流儀からして、フロイドは哲學の內にパラノイア的な構造を、宗教に强迫症的組織を見出した。

同じやうに、これは極めて大膽な言分に聽えるかも知れないが、科學の領域に於いてさへ、吾々の心理的活動が最も重要な役割を占めてゐる以上、現實觀察の忠實さは、それ程容易に期す事は出來ない。私は敢て質問するが、諸君は科學者

が何時も科學的に動いてゐるものか、一體諸君の科學的と呼むでゐる態度が、如何なる意味で科學的であると考へてゐるのか、一度でも反省された事があるか。例へば、子供と云ふものは一樣に信仰的であり、空想的であるが、一體此の子供等の頭は、何時如何なる徑路を經て科學的に事物を見るやうになるのか？　問題が傍道に逸れさうだから、私は此の問題をも保留しやう。そして唯、戰爭防止に關する問題でアインシタインに答へたフロイドの書簡から左の一節を引用して置くに止めやう。

『恐らく貴方は、吾々の理論が神話に類するものであり、而も此の場合、決して歡迎すべき性質のものではないと云ふ感じを受けられた事と思ふ。併しながら一切の自然科學は此のやうな神話的なものゝ、域を脱してゐないのでは無からうか？　今日、貴方の領域である物理學に於ては、多少とも之と事情を異にしてゐるであらうか？」

所で、斯う云ふ風に見ると、作品は作家のコムプレクスの形像化となり、作中人物はグッと現實味を失つて、作家の影に過ぎなくなつて來る。詰り、作品は作家の心理內に蟠まる願望や、惡意や、衝動が人格化して一つの世界を、言語によつて築く白晝夢だとも云はれる。そして此の白晝夢を小說家が築き上げる內的動機は、その作家の內的苦悶と呼ばるべきである。だから、諸君、時節に應じて、「不安の文學」を唱へるのは止すがいゝと、私は忠告するのだ。作家は不安であるべきものだ、そして作家は此の不安を克服する爲に、宿命的に作品を書かずにはゐられない、內的必然性を持つてゐるべきものであつて、それは哲學者が懷疑に追はれ、宗教家が罪障感に惱むで、體系を樹てようとしたり、彼岸へと到達しやうと努めたりするのと一般だ。だから今更、不安の文學を取上げる事は、日頃作家諸君が、如何に人間の內的苦悶に對して、無知であつたとか、作家諸君が是にどうやらやつと氣付く爲には、サーベルの音を必要とする事を告白するやうなものだ。まあ、留置場文學は留置場文學者に一任して置けばよからうに……。

內的苦悶の終結點にある一つのイデエとして、私はアンドレジッドの「無動機の殺人」を示す事が出來る。藝術に精進する事は苦業だ。ジッドが內的不安を克服する事に疲れ切つても、最後には良心そのものを締殺す事しか考へられないのだ。動機を否定する事、心理的經過を隱蔽する事は良心に對する不敵な、太々しい挑戰だ。だが、何故又、殺人と云つた惡むべき犯罪を、それ程捨身になつて固執するのか。それは「父殺し本能」が宿命的に、（或は無動機的にと云つていゝ）人類に課せられてゐる以上、避け得ない事だ。ドストイェフスキイは「罪と罰」で同じく此の「父殺し」を取扱つたが、彼の場合には、一層風土的に、深刻に、無抵抗的に描かれてゐる。其の解答に於けるジッドとの差違は、ラテン民族とスラヴ民族の道德性の隔りを示してゐるものだらうか？私は此處で、無謀にも「解答」と云ふ語を用ひたが、一體文學は何

等かの意味のでも、人生に一つの解答を與へやうとしてゐるのか？

探偵小説が同様、此の問題を正面から扱つてゐる。此處では良心の逃避手段としては、「完全な犯罪」の凝縮したイデエがある。實際には犯人の擧らぬ殺人事件等は幾らも起つた事なのだ。併しながら探偵小説にはさうあつてはならないのだ。良心に對しては、人類は拒ぎやうがないと云ふ鐵則が維持される爲には。それを事件の序幕に於ては、さも有り得る事のやうに小説が組み立てられ、科學的に執拗な計算をして讀者を負け勝負の賭ばくに誘ふのは、多少とも大人氣ない氣がするではないか。文學として、探偵小説が一段下位に置かれる所以であらう。

母娘

今福由江

或る夫人の話である。夫人には男の兒が二人あつて、彼女は長男を非常に氣に懸かる子だと云つてゐた。この言葉がその愛し方を表してゐた。次男は、たゞ普通に如何にも母親らしい落付いた愛情で育ててゐた。長男が五歳の時、夫人の實家の母が非常に長男を可愛がつてゐたので、彼女の妹に當る人を迎ひによこした。二三日は泊らして欲しいとの傳言であつたが、其の夕方子供は熱を出して了つたので連れて行く事が出來ず、妹は空しく歸つて行つた。十日程經つて夫人は長男の病氣が快くなつたので、今度は自分から子供の寢卷まで用意して實家へ其の子を連れて行つた。折角迎ひまでよこして呉れた母親への感謝として、禮儀として、當然の事と自分では思つてゐた。處が、自分丈け歸るのが何とも云へず厭になつて、どうしても子供を置いて行く氣になれない。到頭、夕方になると、持つて行つた子供の寢卷を又風呂敷に包んで、さて『お母さん。折角お願ひしに連れて來ましたけど、やつぱり私、子供を連れて歸りますわ』と云つた。すると母親は、遠い處を連れて來たんだし、折角だから一晩でも泊めるわけには行かないか、明日は早く送つて行くと言葉をつくして言つた。夫人は氣持ちの上ではさうするのが一番いゝと思つてゐたが、如何しても子供を置いて行く事は氣がすゝまない。暫く默つてゐたが、『やつぱりどうしても連れて歸りますわ』と云ふと母親は、ムツとした顏付きで、『さうかい、此の間も折角迎ひにやつたんだが、本當か嘘か知らぬが熱を出したさうだね』と口をつぐんで了つた。にもかゝはらず、夫人は子供を連れると急いで吾が家に歸つて來て了つて、それ以來、實家の母親との感情が惡くもつれ、何か不愉快なものになつてしまつたが、未だに夫人は子供を連れ歸つて善い事をした思つてゐるさうである。あの時連れ歸らねば子供は自分の手に（精神的に）もどらなかつたであらうとの妄想が起きると云つてゐる

此の場合、此の夫人のものわかりの惡さは何に歸すべきであらうか。わざ〳〵自分で送つて行つたに係はらず又連れもどるその心理、母親と不和を來たした事を悔いぬ程の執着心。夫人は「我れながらあの時の氣強さには驚かされる」と云つてゐるが、私はこの話に依つて夫人の

父コムプレクスがわかるのである。それは、こゝに書く丈けの事では讀者からも夫人からも非難されるかも知れない。然し、夫人が毎も云ふ、「私は父が遊びに來てもあまり親しく話をした事が無い。」「何だか氣分に引つかゝりが出來て父が家に來ると落着かぬ」等の言葉にその手懸りがあると思ふのである。

　女兒は愛する父親を母が獨占するとの觀念に絶望的な嫉妬を感じると、フロイドは言つてゐる。「父親を獨占した母は、やがては自分の夫をも、そして我兒をも自分から奪ひ去るのではなからうか」との根強い疑ひからの競爭心と見るのが妥當ではないか、と思ふのである。そして次に當然來るのは、夫人の男性器羨望であらう。

　女性の男性器羨望は相當根深くて動かす事の出來ぬ事實である事は、數々の分析實例がそれを證明してゐる。子供は母親にとつてはペニスを意味するものであり、從つて「母親――男の兒を持つた母親といふものは殊に落着いた感じを人に與へるものである」と或る人が言つてゐたが、それを私は本當だと思ふのである。母親は女兒が幼兒期に於いて、强い望みであつた男性器を、自分に與へず、あまつさへ父親（男性器）を獨占し、幼兒にとつては羨望に堪えぬ處のペニスを持つた母として、永い間君臨する。それに對する女兒の嫉妬焦燥の念は、或る場合にはエディポスとなり、或る場合には同一化となる。女性が結婚して子供（殊に男兒）を持ち、初めて一人前の人となつたと自他共に落着いた氣持ちになるのは、やはり子供をもつて男性器であると無意識に於いて看なす爲めである。幼時に於いて自分も男性器を持ち度いとの願望をやうやく充たした後の滿足と解していゝ。

　次に當然來るのは夫人の去勢恐怖である。自分に男性器を與へなかつた（去勢した母親は、又子供を（ペニス）も奪つて（去勢して）行くとの無意識の恐怖の前には、意識面の理性も役に立たなかつたのである。

ロスメルス・ホルムの女主人公

近頃、イプセンのロスメルス・ホルムを讀み返して見て今更らながら偉大な文豪であり、心理家であると感じた。私は普通一般には廣く讀まれて問題となつた「ノラ」よりも、ロスメルス・ホルムの女主人公、レベッカ・ウェストの性格に非常な興味を持つ。其の事は、自分自身の或るコムプレクスに觸れてゐるからかも知れない。フロイドは「成功の曉に破船する型の女」として、マクベス夫人と共に、此のレベッカ・ウェストを擧げて論じてゐるさうである。

　ロスメル家へ入り込んだレベッカが非常な、殆ど分析者的な努力をもつて、ロスメル夫人ベアーテの心理的弱點につけこみ、「水車堀へ通じてゐる迷路」へ追込んで自殺させる。「元氣のいゝ、生れたまゝの意志をもち、遠慮と云ふものを知らず、どんな事でも必ずやつて退けら

れる自信があつた」と自分で云つてゐる程、ナルチスティッシュなレベッカがロスメルに對して持つた情慾も、成功した後には抑壓せざるを得なくなつて了ふ。そして遂にロスメル夫人の死への罪障感と超自我の責苦とに惱み、兩人の愛を證據立てる爲めとの理窟付けがあるにしても同じ思ひのロスメルと協同戰線を張つて、相抱き、ロスメル夫人の跡を追ふ。

こゝに女性心理への考察として非常に興味あるのは、自殺したベァーテの心理である。「子供を持たぬ女は位置を讓らねばならぬ」との考へにこびり付かれてゐる、その虚をレベッカに衝かれて遂に自殺する。言ひ換えれば、死の願望もさる事ながら、ペニスを持たぬものゝ劣等感をつゝこまれての逃げ道と解せられる。解放的で、進取的で、大膽で野心的であるレベッカとは一つの對照をなしてゐる。レベッカ・ウェストは屢々現實にも見られる野心家型の女だ。

「こゝなら一生の運が作り出せさうだ」と策略をかいて住みこんだロスメルス・ホルムの生活は、完全に彼女の計畫が實現して、思ふ通りになつた時、意外な彼女の心理的原因から崩されて了つた。崩されて了つたと云ふよりは、彼女の近親姦禁斷に依つて崩してしまつたと云ふべきであらう。

彼女の出生は誠に不幸で、父親をハッキリと知らなかつた。母の死後彼女を引取つて呉れた養父も、彼女には辛い思ひをさせて死んで行つた。たゞその辛さに耐え得たのは「私生兒」になり度くないとのひたすらの願ひからのみであると言つてゐる。そして、その養父こそ彼女の實父であつたと聞かされても、強く否定してゐる。だが、父親を持たぬ子は無い、彼女の無意識の奥深くあるのは、父親とロスメルとのコムプレクスである。それ故に當然ロスメル夫人に對してエディポス的な死の願望を持つた。レベッカ自身ではその願望を、「ロスメルの不幸な家庭生活を救ふために」と理窟付けしてゐる。で、女性共通のナルチスムスを刺戟された彼女の救助願望は「行動」に移り首尾よくベアーテの席を空にする事が出來た。然しながら、ロスメルへの情慾を自ら意識した時に、無意識の近親姦禁斷は猛然と起きて、彼女の一生は「苦しい灰色の恐怖で覆ひかくすやうな事になつた。」そしてロスメルに、信頼されて、優しくされゝばされる程、心の爭鬪は烈しく、遂には「賤しい官能の醉ひにひたるやうな情慾はずん／＼ずん／＼遠退いて行つてしまつた。靜かな落ち着いた心持ち――それは丁度、この國の鳥の群がる山を、眞夜中の太陽の光りで仰ぐやうな靜けさがおそひかゝつて來た。」と云ふ完全に抑壓された境地、昇華された心境に達した。然しながらベァーテへの死の願望とその實現への罪障感は「わたしの犯して來た罪は――それで相應の報ひをうけるのですわ」と彼女に云はせてゐる。要するに、レベッカの死は、母殺しの罪障感と超自我の叱責に對する降參のしるしである。が、見方を換へれば、死後のベァーテのなした復讐だとも云へる。イプセンはこゝに、ベァーテもレベッカも共に恐しき女性である事を描かうとしたものではないだらうか。ロスメルへの考察は後にゆづる。（完）

探訪

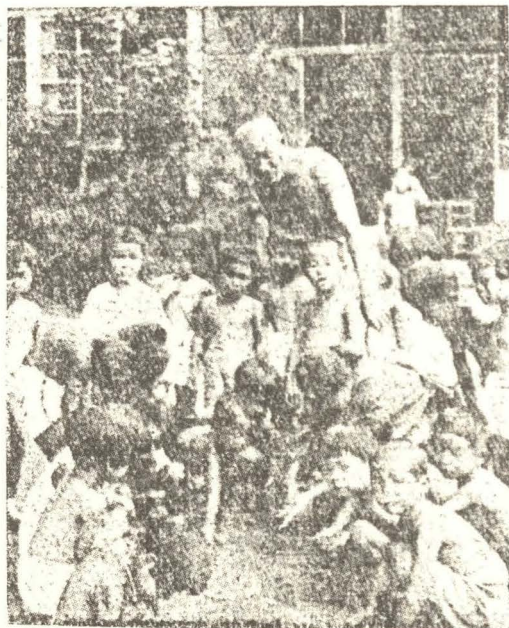
（五）

高崎氏の阿佐ヶ谷幼稚園

阿佐ヶ谷と高圓寺との中間位、通信學校の北裏に當る高燥の地を相して、この幼稚園は建てられて既に十年の歷史を經てゐる。記者が訪れたのは一月の中頃、冬の日の靜かに照つた正午過ぎであつた。折から放課になつたので、園內からは小さなバスケットを手に手に提げて坊ちやん孃ちやん方が嬉々として笑ひつ戲れつ、小犬の群のやうに轉び出て來た。

園長高崎能樹氏は既に、園の裏手にある自邸に引揚げられたと保姆さんに敎へられて、園庭の滑り臺の傍を通りぬけてその方に廻る。直ちに、日本風の座敷に請ぜられて主人公と對座する。

高崎さんにはこの前、我々の研究會で既にお目に掛つてゐるので、約一ヶ月ぶりの再會である。頭髮は白く、色は淺黑く、身體は頑丈であるが、流石に宗敎家出身の幼兒敎育家らしく、眞底から柔和な感じの人柄である。氏の關係してゐられる雜誌『子供の敎養』に氏は自分の事を『容貌怪異にして、眼小く、鼻低く…………』と書いてゐられるが、『怪異』ではないまでも慥に異相ではある。一見して遂に忘れられぬ特異の風貌である。如何なる人でも、その人自身の天稟（分析的にはコムプレクスと云ひ直してもいゝかも知れない）に依つてその職業を決定せざるはないのに、殊に、氏の場合のやうに、多くの幼兒を敎育しようと云ふからには、必ずや母性本能をその男性的風格の中に多分に包藏してゐるに相違ないと豫想したが、相對談する一二時間內に於いて、自分は自分の豫想の完全に適中したことを感じた。

氏は阿佐ヶ谷幼稚園の外に、杉並兒童相談所に長たるのみならず、消費組合や前記雜誌『子供の敎養』の同人としても活躍し、中央沿線に於ける廣い意味の敎育界に於いて隱然たる勢力者である。私は氏のやうな宗敎家出身者にして、精神分析學の如き自由な學問の意義と功績とを認められるその寬大な人格に非常に尊敬を覺えてゐる。實際、汝の敵を愛せよと、口に云ふは容易であるが、從來の多くの宗敎は敎團以外の者を極端に憎惡することに依つて、その敎團內の愛を支持して來、そのために數々の宗敎戰爭の如き矛盾した現象をさへ歷史上に遺して來たのであることは精神分析學が既にアムビファレンツとして說明してゐる通りである。汝の敵人を愛することは、なほ易し。されど汝の敵學を愛することは、難中の難である。この大難事を敢て實行してゐられるだけでも、我々は氏に對して

心から頭の下る思ひがする。これまたグレート・マザー本能の現れであるからだ。

園兒の內にも、相談所へ來る子供の內にも、數々の奇癖あるもの、病的傾向あるもの、幼兒神經症を有する者があるが十分それ等への分析處置法を心得てゐないのが殘念であると氏は云はれる。エディポス・コムプレクスは幼兒に於いて既に十中八九まで、判然と見られるさうである。先日も甚だ面白い事件があつたとて氏はかう語られた。

園兒の內の一女兒。或る日、保姆に向つて、昨夜父が亡くなり母が非常に落膽してゐると云つた。再三それを繰返すので、早速花束に黑のリボンを結んだのを携へてその家へ悔みに出掛けると、主婦はいと朗かな顏付でその保姆を迎へ、平常と少しも變つた樣子も見えない。これはをかしいと思つたが、携へて行つた黑リボンの手前、辯明しないわけにも行かず、一什始終を物語ると、主婦の驚きは非常なものであつた。園長は併し、主婦にその女兒を叱責することを控へさせ、最近の家庭內に於ける種々の經緯を訊いて見たところ、その女兒と母親との間に殆ど敵對的な關係と感情とが生じたことがあつたと云ふことが分つた。さうしてその女兒の噓は、父の死を願望するのでなく母の最も悲しむ事實としてその空想を造り上げた結果であることが明かになつた。

また突然の物音に恐怖する女兒の話が出た。園長はこの女兒に對し、歌にも二種あつて、或るものは我々を慰め、或るものは我々を勇氣づけるためのものであると敎へ、漸次にそれ等の恐れられた物音も、彼女を驚かすためのものではなく彼女を奮ひ立たせるためのものであると云ふ風に思ひ込ませることに努力したと云ふ。これは本人の恐怖の病源をまづ探らうとしないものである點に於いて、分析法ではないが、記者はその母性的な方法をたゞ謹んで傾聽するのみであつた。

また幼兒は多く非社會的で、殊に內向性の兒等の扱ひには困るが、それを外向的にし、社會的にするための忍耐的な方

高崎氏の阿佐ケ谷幼稚園

法の數々を承つた。

×　×　×

記者が園長と對談してゐる間、如何にもこのやうな事業の內助者としてその功の大きくありさうに思はれる活動的な感じの夫人は、茶菓を供してまめ〳〵しく待遇された。園長は我等の研究所の事業に對しても、種々親切な援助を約束せられた。辭去して園の建物を顧望した時、記者はこの園長の男性としてのグレート・マザーに對して、（十分に自己分析して滅多にコムプレクスを起さない記者でありながら）不知不識に母コムプレクスを起しかけてゐたことを自覺しないわけには行かなかつた。記者も幼兒なら是非こゝの園兒になりたいと思ふ。

（寫眞は當園の非抑壓主義の敎育法を象徵するニウディズム遊戲。中央は高崎園長。その下が園長夫人。）

研究所關係者に色紙を贈呈

研究所關係者諸氏の內には、他の關係者の筆蹟を希望せられる向きが御座いますので、研究所は各位平素の好意と支援とに酬ゆるため特別誌友、客員、所員の內何れの方にても、他の關係者の色紙、短冊又は原稿（本誌に使用のもの）御希望の方にはそれを貰つて差上げたいと存じます。關係者中には高位重職にある方や、專門學藝に大名ある方々が多いばかりでなく、また專門以外にも意外の特技を有する方々が大勢ゐられますから、その作品は實に貴重な家什として永く誇るに足るものとなるで御座いませう。たゞ萬一都合のため執筆不可能の方もあらうと存じますにつき、御申出の方は念のため御希望者候補三名までを擧げておいて頂きたう御座います。（色紙短冊原稿の別も同時に……。）なるべく貴意に添ふやうに努めたく考へてをります。但しこの奔走のためには多大の勞務と雜費とを必要といたしますので、希望者は、郵稅、荷造費、材料費その他のため、金一圓だけ各自御負擔あらむことを御願ひいたします、併し御申込はハガキにて結構です。出來の上は御通知申上げます故、その節御送金被下度、御願ひ申げ上ます。

英文國際雜誌第四册

英文『國際精神分析學雜誌』昨年度第四册の內容を次に紹介する。

一、E・ジョーンズのフェレンチーへの弔詞。――一九三三年六月十三日、英國精神分學會にて述べられたものゝ筆錄。（ジョーンズはフェレンチーの性格の美點は、親切と、正直と、忠實とにあると云つてゐる。他人の意見はよく味解する方であつたが、而も自分自身と自著とに對しては最も峻嚴な批評家であつた。他方、彼は異常な想像力の所有者で、天才的な學者であつた。觀察や發見や結論を、彼は實驗の結果得て來たのではなかつた。それ等が彼の心に滿つると、彼の思想は愈々躍進し、遙かな思辨にまで走るのであつた。……）

一、P・フェーデルンのフェレンチーへの弔辭――本誌昨年十一月號本欄に於いて既に紹介したものゝ英譯。（フェレンチーの人格の感化力は非常に大であつた。フロイドはリビドーに三つの型を擧げてゐるが、即ち人間の獨創の仕事はそのナルチスムスを表はし、その仕事の仕振りにはその人の義務感（卽ち超自我の壓迫）が表はれ、またその他人に對する影響に於いてそのエロスが表れると。この三つの型の混合したものが、常態人である。さうしてフェレンチーは正にさう云ふ人格であつた……。）

三、『現實感の發達に對する倒錯構成の關係』エドワード・グラヴー（ロンドン）――本號に於ける殆ど唯一の研究論文で、精悍なるグラヴーは愈々頑張つてゐると云ふ感じである。『現實』だの『現實感覺』だの『現實試驗』だのと云ふ語は精神分析文獻中に常用されてゐるが、この語の概念が明白でないとて、それの明確を期せんとして物した論文である。何れ他日精しく紹介批評する機會があるであらう。

〇その他、各種新刊の分析學關係著書の批評紹介と、國際學界各地支部の事業報告があつた。

マルロオの受賞

フランス文壇年末行事の一つ、ゴンクウル賞推薦は、昨年度はアンドレ・マルロオの小說「人間條件」（ラ・コンディション・ユウメン）に擬せられ、プルウスト以來の收獲だとの賞賛を博してゐる。

マルロオのこの小說は、背景を上海にとり、蔣介石を暗殺しようと介てる一支那人を主人公としてゐる。そして血なまぐさい慘虐と混亂の世界に生きる人間共の冒險、爭鬪が映畫的に展開するが、劇的事件の進展に伴つて、心理解剖が極めてなだら

かに行はれてゆく點——即ちアクションとアナリイズとの驚歎すべき然も渾然とした融合が彼をしてドストエフスキーに比べられ、又一方プルウスト以來と稱される譯なのであらう。マルロオは一九〇一年にパリに生れた。パリの東洋語學校を終へてからは東洋諸國を渡り歩いてゐた。廿七歳に處女小說「征服者」を公けにしたが、既にその鬼才は一部の人々から認められる所となつてゐた。彼は近くペルシヤに遠征して、その地の石油事業家とそれにまつはる取卷連のパノラマを書く準備にかゝるといふ。（一月十四日、東京朝日より轉載。）

オランダ精神分析學會

一九三三年一月二十八日、總會を開き、役員選擧をなし、オフイイゼン Cphuijsen 氏會長となる。

三月四日、ライデンに會合し、シェルフェン Dr. Th. v. Schelven 氏、色情的線畫に就いての研究發表。

四月二十二日、ヘーグに於いて會合し、ワイル Dr S. Weyl 氏「性的倒錯の犯罪者」に就いて研究發表。

六月十七日、アムステルダムに會合し、フェレンチーへの弔詞を會長述ぶ。

その他、時々事務的會合。

フランス精神分析學會

一九三三年五月二十三日、『强迫』の報告に就いての討議は、フランス精神分析者第七年總會に、ボーレル、セナリ兩氏に依り提出せられ、特に後悔と强迫との關係が問題となつた。

六月十六日、パーチミネー Dr. Parchminey 氏は『神經症の發生に於ける一素因としての退行の概念』に就いて研究發表。パヴロウ Pavlou の條件放射に關する研究が、ある神經症機制の說明に參考となることが指摘さる。

ハンガリー精神分析學會

一九三三年四月七日、ドクトル・ヲザール夫人は『教育相談所に於いて取扱つた二三の兒童』に就いて講演。同時に總會を開き、役員選定す。

四月二十一日にはレギ夫人が『婦人の性慾に就いて』研究發表し、五月五日には、同女史その續論を發表し、同十九日にはロッター夫人『自由聯想に於ける形式の特異性』に就いて研究發表し、五月二十二日には同會創立者にして會長なるフェレンチーの死に會す。

ハンガリーには非常に婦人分析者が多いやうである。メラニエ・クライン女史の出でたる、亦偶然に非ずと云ふべし。

最近國內事實

★『毛髮の有する咒力』中山太郎氏稿。『文化公論』二月號、芝、片門前町、同社）

★『源氏物語の話』諸岡存氏稿。『話』二月號、（文藝春秋社）

★『フランチェスカ』松居桃多郎氏作。（正月明治座上演劇、分析的意圖に依る。）

★『龍子探入深水中』大槻憲二氏稿。『雲雀』一月號、（麹町五ノ一、反響社）

★『狂亂後のオフィリヤ』坪內逍遙氏稿。『藝術殿』一月號、（神田、梓書房）

★『所謂モダン・マン』長言成氏稿。（右同誌）

★『霧』原民喜氏作小說。『ヘリコーン』一月號、（神田、表神保町、栗田書店）

★ギインの精神分析學界視察中なりし丸井淸泰氏は去る十二月二十八日無事歸朝。

★『アンドレ・ジイド小論』新庄嘉章氏稿。『佛蘭西文藝』一月號（神田今川小路一ノ四、金星堂）

★『精神分析と文學』XYZ氏稿。『反響』一月號（世田ヶ谷區、玉川瀨田町一〇一八、反響社）

★『女の生理』小倉淸太郎氏稿。『婦人公論』新年號附錄。（中央公論社）

★『戀愛心理の分析』大槻憲二氏稿。『人生創造』二月號（人生創造社）

★『醫事新報』誌最近號、醫家一般の精神分析學研究の必要を說く。

★本誌先月號內容に關しては、奧付上を參照の事。

本研究所研究會一月例會

一月十七日夜、例に依り神田驛前アメリカン・ベーカリに開く。

食後、大槻憲二氏立つて『自我發生以前の無意識內容と自我發生の過程に就いて』研究の發表があつた。自我發生以後その發達に就いては、次回にその續論を試むべきことを約束せられた。それに對して長崎文治氏の質問や、小山良修氏の醫學的說明などがあつた。

その後は、博覽にして雄辯なる中山太郎氏に物を訊く座談會の如き形となつたが、長谷川誠也氏の『おめこ餅の話』や、高橋鐵氏の『喧嘩の效用』論も、その間に座を賑はせた。

出席者は右言及の諸氏以外には、朴永鎭、小松德、小野田幸雄、大槻岐美の諸氏であつた。なほ病氣又は急用のために出席不可能との挨拶あつたのは、田內長太郎氏、伊東豐夫氏、松居桃多郎氏、霜田靜志氏等であつた。

相談

姑の迷惑な孫可愛がり

問――私は結婚八年になる二十五歳の人妻ですが、不幸子供を惠まれません。然るに主人の兄で六人の子福者、又生れる子供の年まはりが惡いとて、是非私共に育てゝ欲しいとの事故、當方も幸ひと存じ、生れて二十一日目より今年五歳迄育てゝ參りました。

處が、私の隣りに主人の母が居り、孫の可愛さで盲目的となり、朝の食事も私等にだまつて食べさせ、私が子供を叱ればスグ來て連れて行き、『お前は嫁で他人だけれど、秀夫は私の孫だから』などゝ罵ります。私は二十一の時より育兒について苦勞致し、子供には何の不自由も感じさせず自分の子として育てて參りましたので、可愛くて手離すことは絶對に出來ません。幸ひに主人は私をよく解つてゐて呉れます。

姑達は義理の子といふことを人々に申しますので、子供の將來のため本當に困り、私は姑を恨めしく思つて居ります。夫は次男であつても遠くに引越すことは事情があつて實現することが出來ません。一體、どうすれば、子供のことについて不和になつたり惡感情を抱かせないですむでせう？　姑は私達からどんなにことを分けて話しても駄目で御座います。少し叱ればいぢめると申し、子供の生家へ告げ口に參ります。女學校を卒業後、スグ嫁いで來た私故、至らないことは萬々あるとは存じて居りますけれど。（S子）

答――御手紙を讀んで見て直ぐ解るのは、姑が普通人には出來ない事を平氣でやつてゐる、點でありませう。姑は孫の愛に盲目になつてゐるよりは、自分の感情に盲目になつてゐるのです。一體、母の心理と云ふものは、一度自分が母親になつて見ないと解り兼ねませうが、實に複雜なもので、母性心理が良く働いた場合には、崇高な母性愛の發露となりますし、惡く働いた時には、息子は自分の物だとの觀念を捨て去る事が出來ずに主我的となり、子供の結婚後の生活にとつては誠に困つた存在になるのであります。貴女のお姑さんの場合は後者でありませう。さうした貴女とお子さんとの間を割く如き言動をなさるのはつまり貴女に對する復讐の念がある爲めであらうと存じます。尤もそれのみでなく、實際に於いて孫が可愛い事も確かでありませう。然し、その愛情を頼つて、自分の息子を奪つて了つた嫁へ不愉快な感情を與へて僅かに腹いせをしてゐるのだと解せられます。さうでなければ貴女方の、事を分けての道理ある話が聞き入れられないわけはありません。惡意のある所からそのものわかりの惡さが生れるのでありませう。

具體的な策としては、姑さんが頭の上らない方に、分析的な説明を加へてさうした事は恥しい事だから止めるやうにと話して貰ふことをおすゝめいたします。貴女方が、それをなさると

却つて事が難しくなつてまゐりませうから……。昔から年寄り子供と申して人間は、老年になると意識的にものわかりを惡くし度がる事さへもあり勝ちです。貴女方もその呼吸を呑み込んで扱はれゝば、眞正面から切り込んで、賴んで見るよりもいく分か効果があらうと存じます。

狂氣じみた姑と優しすぎる夫

問——私は當年廿七歳の人妻ですが、今から五年前に當時卅歳の夫と結婚致しました。其後約一ヶ月の後夫は海外某地の支店へ轉勤する事になりましたが、夫の母は老齡(當時五十八歳)でもあつたので行く事を好まず、私丈で新任地へ參りました。そして本年六月まで大變幸福に過ごして參りました。

　夫は非常に優しい眞面目な人で酒も煙草ものまず、勤續十五年にもなり、上下の人々から大變信用されてゐます。然るに母は其反對で殆ど極度のヒステリーの爲、人には毛虫の如く嫌はれ、實子にも愛想をつかされる程の人でございます。

　このやうな人が長い間一人で暮してゐたので淋しくなつたせいか、矢の様に歸國を促して參りました。果は幾度も危篤の通知をよこしましたが、折返し名古屋の知人に眞僞を確めると、病氣どころか益々元氣との返電に全く二の句がつけなかつたこともあります。

　然し其後様々の策を弄するので、私共も遂に本年の六月内地に餘儀なく歸らされましたが、私共の歸りを待ち構へてゐた母は、家へ上るや否や、私共を自分の前に坐らして朝の六時から夜の九時迄も、聞くに堪えざる惡口雜言をあびせるのです。且今にも飛びついて來さうな勢ひに全く私はふるへ上り、夜の十時頃其儘實家へ逃歸りました。然し此間夫は一言も口答へせず涙をこらへて坐つてゐたのです。

　右樣のわけで私はとうてい姑と同居して居れないと思ひましたが、夫や仲人がたつてすゝめるので再び歸宅しました。少しは姑も氣が折れたかと思つて來た處、益々强烈にあたりちらすのです。幾度も逃げ歸らうとする私を、夫は影になり陽になりいたはつてくれるので死ぬやうな思ひで我慢しましたが、言語を絶した母の言動にはとうてい居たゝまらなく、四五日前又又逃げ歸りました。

　例によつて夫は迎へに參りましたが、總てを知つてる父はもう少し姑の心の靜まるまで、私を預つて置くと云つてくれました。然し涙をこぼして歸宅を乞ふ夫の心を思ふと飛んで歸りたい心もしますが、又逃げて歸る事は分かつてゐます。仲人は母と別居する事をすゝめますが、母は頑として別居反對です。日夜母の爲に泣き暮す私共夫婦は今後どうして進んだらよろしいでせうか。(名古屋、トヨ子)

　答——前問の場合もさうだが、かうなつては愈々母子のつながりの惡い方ばかりだと云へませう。御主人のマザーコムプレクスも、母親の息子に對する纏綿も、分析に依つて癒されるよ

り致し方はないと思ひます。たゞ、こゝに問題になるのは、何故、氣狂ひじみた姑は居るけれど、優しい夫を持たれてゐながら貴女が、家を飛び出す程心を動揺させてゐるかと云ふ事です。隨分辛い事情だとは思ひますが、もし貴女の夫なる人が母に向つてヅケ〳〵とものを言ひ得る人であつたらば、時としては貴女と共に家出をも決行出來る程、獨立的（精神的に）な人であつたらば、必ずや、夫の愛情を信じて、辛い姑の言葉も我慢出來ない譯はないだらうと思ひます。非常識な母親のやり方を涙で見てゐるのみで一言も口返し出來ぬ夫へ齒がゆさを感じるのは當然でありますが、其の心の底には貴女自身も氣がつかないであらう、夫と母親への嫉妬がかくされてゐないでせうか。そしてその爲めに餘計、姑の狂態と、夫の無氣力を辛く思ふのではないでせうか。參考までに一寸申上げます。

仲人の云はれるやうに、私も斷然別居說を唱へたいですが、肝心の夫がお母さんから離れられない嬰兒症患者――これが病氣であると氣付いてゐないのが第一にいけない事です――である內は駄目でせう。夫は只今二人愛人が出來て、どちらにも申譯ない思ひをしてゐる男の心理狀態にあるのです。全然お母さんを卒業するやうに背中の一つもどやしつけておやりなさい。でなければ、分析を受けさせるのです。これより外に策はありません。（記者）

公開講習會豫告

阿佐ヶ谷幼稚園及び本研究所主催にて、二月下旬から三月中旬にかけて、阿佐ヶ谷小山（阿佐ヶ谷驛下車）阿佐ヶ谷公會堂で、四週間（多分每週土曜一回、午後三時間宛）精神分析學講習會を催す事になりました。中央線沿道の本誌讀者諸氏は、奮つて御來會願上げます。講師は左記の諸氏（いろは順）でありますが、なほ多少の增減異同があるかも知れません。委細は『杉並區阿佐ヶ谷小山三〇、阿佐ヶ谷幼稚園內、精神分析學講習會事務所』へお聞き合せを乞ふ。但し本誌特別誌友は、本研究所へお申込み下さい。特別の御便宜を計らひます。

一、精神分析要領……………岩倉具榮
一、文藝と心理分析……………長谷川誠也
一、兒童教育と母親教育……………高崎能樹
一、盲人教育史……………中山太郎
一、精神分析と教育……………長崎文治
一、科學的修養法としての精神分析……大槻憲二
一、心理治療法としての精神分析……矢部八重吉
一、精神分析學と醫學……………古澤平作
一、人間教育と藝術教育……………霜田靜志
一、精神病治療經驗談……………諸岡存

編輯後記

本號も御覽の通りの內容で出來上りましたが、不可避の論文がみな長篇でありましたので、中篇くらゐで興味のあるものを割愛しなければならなくなつたのが多く、殘念でした。また母性心理、青年期心理などの特殊硏究の際にこれの補ひをつけませう。

フロイドの「女性論」は、本誌前號の古澤氏論文中にもある通り、近來の斯學界に於ける重大な論文でありますから、特に精讀せられむことを願ひます。

×

例に依り、執筆者中の新顏を御紹介いたします。

宮田修氏は純粹の東京ッ子で、明治三十一年東京專門學校（早大前身）文學科卒業、爾來雜誌記者、學校敎授を勸め、現在成女高等女學校長として令名あることは今更申すまでもない。長谷川誠也氏とは同窓の舊友である。

安藤一郞氏は明治四十年東京に生れ、府立四中卒業、東京外語英語部出身の秀才。昭和四年に龍口直太郞氏等と共にMELグループを起し、現代英文學の飜譯紹介をなし、「MELパンフレット」「詩と詩論」、「英文學硏究」、「文學」等に執筆せらる。現在は主として「新英米文學」に寄稿し、一方詩作を續けると共に、東京府立六中に奉職。著書としては、詩集「思想以前」、譯註「死せる人々」（ジョイス）、及び共譯の岩波版「ユリシイズ」（四册）がある。

×

川上水夫氏は詩人であるが、現在は國民新聞社に勸めてゐられる。

×

宮田氏の論文は、職掌柄扱はれた貴重な材料が人々の興味を索く。心理學者としてよりは、敎育者としての立場から材料を見てゐられるが、この未定稿が定稿となつて、本誌が再紹介の日を人々は待望するであらう。

長谷川氏がそのコリオレーナス論の中に言及してゐられるミドルトン・マリーは、岩倉氏の譯された小說の作者マンスフィイールドの夫君であつて（安藤氏にも彼女を硏究の一對象として頂いたのだが）、偶然ながら御夫婦の因緣は恐ろしいものである。

×

前號は年末混雜の際とて校正者にも植字者にも手落があつて、卷末の方に少し誤植がありました。表紙第四面ドイツ文の正誤を次に擧げておきました。

	誤	正
上から七行	Poliklnik	Poliklinik
……一五行	Ohttki	Ohtski
……二〇行	verschiedene	verschiedenen
……二一行	Wahnsim	Wahnsinn
……二五行	Grenzen	Grenze
……三五行	Behandung	Behandlung

×

本誌は他誌と違ひ、筆者と讀者との間を親密にしたいと思ひますから、なるべく特別誌友になつて頂くことを希望します。特別誌友とは直接購讀者になつて頂く丈で、それ以上の義務はありません。

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他）

●性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

●客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、教育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

●所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

毎月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。(但し誌代を別に申受く。)

五、講習會

毎月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

前號（心理療法研究號）内容

昭和九年一月二十五日印刷
昭和九年二月一日發行　第二卷第二號

定價五十錢（郵稅一錢）

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二

東京市牛込區改代町廿四
印刷所　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅一錢）
半年分　參圓（送料共）
一年分　六圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割増に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京　東京堂・東海堂　大東館・北隆館

來月號豫告

傳說研究號

傳說は民族の夢であり、夢は個人の傳說であるとは、精神分析學の標語であります。我々は傳說、民俗、言語を研究することに依つて、我々の超個人的無意識（エス）を知ることが出來ます。夢を研究した我々は必然的に傳說を研究せねばなりません。我々の傳說研究は單なる物好きや趣味ではありません。傳說は我々にとつて現實の一部であります。

傳說の分類と型式…………中山太郎

博覧強記を以て學界に鳴る筆者が三十年の研究の組織的凝結。

キルヤム・モリス『地上樂園』の研究…………大槻憲二

英國詩聖モリス誕生百年祭紀念として、その傳說文學の一大寶庫の華々しき分析開帳。

傳說と民俗とに表れたる冠婚葬祭の同一性…………長崎文治

芝居に現れたる傳說の研究…………松居桃多郎

近代的人間の精神問題…………武田忠哉

鬼子母傳說に就いて…………長谷川誠也

坪内逍遙博士會號執筆

二月號（第四卷第二號）

要目

編輯　財團法人國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

診療科目

諸種疾病ノ診斷及治療
性格素質ノ審査及矯正
精神衛生ノ相談及指導

診療ハ特ニ
神經衰弱、ヒポコンデリー、不安性神經症、性障礙、ヒステリー、强迫觀念症、恐怖症、不眠症、心臟神經症、憂欝症、偏執病、輕度早發性癡呆症、性格異常等。

精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七
田園調布驛東口下車
電話田園調布一〇三二番

診察時間

午前七時――正午（主トシテ外來）
午後一時――五時（主トシテ往診）
但シ日曜ハ午前中、祭日ハ休業

昭和八年七月七日 第三種郵便物認可
昭和九年一月廿五日印刷納本
昭和九年二月一日發行
毎月一回一日發行

精神分析 二月號

II. Jahrgang, Heft 2, Feb. 1934. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für weibliche Psychologie)

Inhalt

Studien

Literarische Werke

Kritik

Einführung in die Psychoanalyse

Varia

Ausfragebesuch der Anstalten

Neuigkeiten des In-und Auslandes

Ratgeber

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalytischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.

定價金五十錢 郵稅一錢